
Bチームの戦場

残念無念

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bチームの戦場

【Nコード】

N1265S

【作者名】

残念無念

【あらすじ】

突如世界中で開いた異世界との門。そこから人型兵器を主力とする異世界の軍隊が侵攻を開始した。戦力不足のため徴兵制度が復活した日本で、18歳の平凡な少年山田太郎は一癖も二癖もある連中ばかりが集められた通称「Bチーム」に配属されてしまう。さつさと死ねとばかりに押し付けられる任務の数々。太郎達に明日はあるのか！？主人公が一切ロボットに搭乗しないロボット物、スタート！！（注：作中に出てくる用語や行動などは現実のものと違う可能性があります。ご了承ください）

山田太郎（18）の戦場 1（前書き）

この小説を書き始めたきっかけは、最近よくある侵略物を見たからです。通常日本（もしくは世界）に侵攻し、少年少女が戦うハメになる敵は、大抵宇宙人が訳のわからない生物です。

ですが、もしそれが人間だったら？自分達と殆ど同じ人間が侵攻してきたら、彼らは戦えるのでしょうか？

山田太郎（18）の戦場 1

地面に寝転がり、青空を眺めていた山田^{やまだ} 太郎^{たろう}（本名）は唐突に思った。

何故、自分はここに転がって青空を見ているのだろう。

何故、自分は迷彩服を着用しているのだろう。

何故、自分は鉄帽^{ヘルメット}と重たい防弾チョッキを身につけているのだろう。
何故、自分の手には小銃が握られているのだろう。

そして、何故、自分の周りが銃声と爆発音、怒号と悲鳴で満たされているのだろう。

そんな事を考えていた太郎の視界に人影が入り、そこでぼんやりとした思考は止まった。

「立て、山田士長！戦車橋が展開するのを援護するんだ！！」

太郎の視界に映ったその中年男性は、太郎の腕を掴むとその身体を引き起こした。その男性も、太郎と同じく迷彩服を着用し、手には小銃を掴んでいる。

いや、太郎とその男性だけではない。今ここにいる殆どの人間が、同じような格好をしていた。

「了解！」

太郎はそう答え、そして走った。

何故、自分はここに転がって青空を見ているのだろう。

さっき爆風で吹っ飛ばされたから。

何故、自分は迷彩服を着用しているのだろう。

それが戦闘時の服装だから。

何故、自分はヘルメットと重たい防弾チョッキを身につけているのだろう。

飛んでくる銃弾と砲弾の破片から身を守るため。

何故、自分の手には小銃が握られているのだろう。

戦うため。

そして、何故、自分の周りが銃声と爆発音、怒号と悲鳴で満たされているのだろう。

ここが戦場だから。

太郎は走り、川岸にある大きな岩の陰に滑り込んだ。川岸にはいくつも大きな岩が並び、そこに太郎と同じ年齢で同じような格好をした連中が、それぞれ武器を手に身を隠している。

半分は大人だが、残りの半分はまだ成人も迎えていないような子供だ。皆険しい表情で、対岸を覗きこんでいる。

対岸からは、無数の銃弾が飛んできている。時々爆発音が響くのは、迫撃砲かロケット弾を使用している証拠だ。そこにいるのは『敵』。太郎達が戦う事を余儀なくされた原因の連中が立て籠もっている。

太郎達のいる側の岸には、多くの陸上自衛隊の部隊が展開していた。戦車を始めとした戦闘車両、そして自衛隊員達が、手にした武器や火砲を対岸に撃ちこんでいる。

自衛隊と『敵』は川を挟んで対峙していた。その川は幅が広く、橋が一本架かっている。しかしその橋は途中で寸断されていた。自衛隊の侵攻を阻止、もしくは遅延させるため、『敵』が爆破したのだ。そしてその橋を復旧させるため、自衛隊は91式戦車橋を前進させた。74式戦車の車体を流用した、戦車も通行可能な橋を架けるための車両だ。無論『敵』も、自衛隊の侵攻を阻止するために戦車橋を集中攻撃している。

太郎達に与えられた任務は、対岸から銃撃を加えてくる『敵』を排除し、味方の戦車橋が橋を展開するのを援護する事だった。しかし対岸にはビルが多く立ち並び、『敵』はそれを障害物として高低差を利用した戦闘を行っている。こちら側の岸には障害物となる物が少なく、太郎達は激しい銃撃に晒されていた。

「ぐおっ・・・!!」

ぐぐもった悲鳴で太郎が横を見ると、岩から身を乗り出して小銃を撃っていた少年兵が地面に倒れていた。首筋から大量出血を起こしている。撃たれたのだ。

それを見た太郎はすかさず叫ぶ。

「一人撃たれた！衛生、来てくれ！！」

しかし、いつまで経っても衛生員は来てくれない。激しい銃撃で動きが取れないのと、他にも負傷者が続出してその手当てに追われているのだ。

その間にも少年兵の首からは血が溢れ続け、顔が蒼白になっていく。銃弾の嵐をかくぐって衛生員がやってきた時には、すでに少年兵は息をしていなかった。

「クソッ！！」

太郎は叫び、そして恨みを晴らすかのように対岸へと銃撃を加えた。支給されている89式小銃を構え、装着されたACOG低倍率スコープを覗き、照準に収まった『敵』を撃つ。ボロボロの廃車を盾に銃撃を加えていた『敵』は被っていたヘルメットごと頭を撃ち抜かれ、太郎の視界から消えた。

「エムだ、エムが出たぞ！！十一時の方向！」

自衛隊員の一人が叫び、太郎はその方向を見た。銃声と爆発音の間から、ズシン、ズシンと地響きが聞こえてくる。

やがて全長20メートルの『それ』は、ビルの陰から姿を現した。

そこには、まるでアニメかゲームにでも出てきそうな、灰色を基調とした迷彩を施した人型の兵器が立っていた。

ESP - MOBILE - WEAPON、超能力機動兵器。略してEMW。そのままでは長くて呼びづらいので、前線の自衛隊員達は単にEMW^{エム}と呼んでいる。

エムは、『この世界』に侵攻してきた『敵』の主力兵器だ。

3年前、突如それらは現れた。

世界中で異世界との門が開き、そこから異世界の軍隊が侵攻してきたのだ。

日本では島根県隠岐諸島の島後に門が開いた。そこから現れた軍隊は瞬く間に隠岐諸島を制圧、そして島根県境港に上陸した。

この世界に侵攻してきた異世界の人間たちは、この地球に存在する人類に容姿や生体機能が酷似、というより遺伝子レベルで全く同じだった。言語を操り、兵器も使う彼らを、この世界の人類は『異世^{アザ}界人^ス』と呼称した。

アザースは様々な兵器を用い、侵攻してきた。大部分はこの世界で使われているような兵器と似ているものばかりだったが、決定的に違う兵器があった。

それが先程のEMWだ。戦場で鹵獲したり捕虜（意志疎通に大分時間がかかったらしい）の話を聞く限り、アザースには超能力を保持する人間が多数いるようだ。

そしてその超能力者達が操るのが、人型兵器であるEMWだ。全高

20メートル程のEMWは、超能力者が念じるだけで動く兵器なのだと捕虜は語った。しかし超能力を保持しているのは6割が10代の子供で、残り3割は成人女性。成人男性の超能力者は1割程度しか存在しないそうだ。

必然的に、EMWを動かすのは大半が子供ということになる。現に太郎も戦場で撃破したEMWから、子供の操縦士が脱出してくるのを何度も目撃したことがある。

EMWにはさまざまなタイプが存在する。

重武装、重装甲でこちらの世界の戦車に相当する陸戦型。

中程度の武装と装甲で、ある程度飛行が可能な攻撃ヘリコプターに相当する地上掃射型。

軽武装、軽装甲で、高速で高機動の飛行が可能な戦闘機に相当する空戦型などだ。

その他にもさまざまなタイプがあるらしいが、全てのEMWのタイプを把握は出来ていないらしい。

アザースの軍隊の主力兵器はEMWであり、何故かこちらの世界の戦車、攻撃ヘリ、戦闘機に相当するような兵器が存在していない。自動車や航空機は存在するが、それらはもっぱら輸送用に使われており、戦闘を主目的とした自動車や航空機は確認されていないのだ。これらに関しても調査が続行されてはいるが、太郎達下端にはそんな情報は回ってこない。

太郎は18歳の少年だ。本来なら高校3年生、学校に通っているはずの年齢の少年少女達が戦場にいるのには、ちゃんとした理由がある。

3年前のアザーズによる日本侵攻に立ち向かうには、当時の自衛隊の戦力は不十分だった。国連軍やアメリカを始めとした他国に救援を求めようにも、世界中でアザーズの侵攻が始まっており、日本は独自にアザーズの侵攻に対処しなければならなかったのだ。

時の政権は無能であり、自衛隊が防衛出動するまでに数十万人の市民が犠牲となった。それに激怒した自衛隊の上層部はクーデターを起こし、政権を掌握した。

自衛隊が防衛出動した後も、戦況は芳しくなかった。アザーズは隠岐諸島を拠点として続々とやってくるのに対し、自衛隊の戦力はとても足りなかったのだ。

その結果、日本では徴兵制度が復活した。始めは20歳以上の男子を対象とした徴兵令は国民投票で反対多数で否決。

すると国会はなぜか対象年齢を15歳に引き下げ、さらに男女の区別もなくした改正案を国民投票にかけた。今度は何故かあっさりと可決された。

15歳から28歳までの健康な日本国民の中から、無作為に選出した人間を特別自衛官に任命。訓練を受けた後に戦場へと向かわせた。ちなみに特別自衛官は、男女比1：1で選出される。

そして法案が通過した年に、高校に合格したばかりの太郎も早速徴兵されてしまったというわけだ。半年間に渡る基礎訓練を受けたのち、太郎達は二等陸士に任命され、このクソみたいな戦場に来たのだ。

本来なら高校に通っているはずだったが、それもオジャンになった。徴兵された高校生には3年の任期満了と共に高校卒業の資格が与えられ、更に大学進学がさまざまな面で有利になるという特典さえなければ、太郎はさっさと脱走していただろう。

それから3年。

中国地方北部一帯を占領下に置いた異世界軍との戦いは、未だに続いている。

山田太郎（18）の戦場 1（後書き）

御意見、御感想お待ちします

山田太郎（18）の戦場 2（前書き）

陸戦型 E M W

この世界に侵攻してきたアザース軍に最も配備されている兵器。こちらの世界の戦車に相当する。

全高20メートル。

武装：42？機関砲。122？砲。6・2？ガトリングガン×2（自衛・歩兵掃討用）

その他にも多彩な武装を施す事が可能。

移動速度は時速60？程度だが、推進装置を追加することで時速100？での低空飛行が可能。ただし燃費が悪いため、あまり使われていない。

山田太郎（18）の戦場 2

舞台は戻って川岸。

激しい銃撃戦が繰り広げられる中現れたアザーズ軍の陸戦型EMWは、2本のマニピュレーター（簡単に言うと手である）で持った突撃銃型の機関砲を連射し始めた。人間が持つ突撃銃のサイズを20メートルのEMWが持つようなバカでかいサイズに変更したものだから、当然発射される弾丸のサイズもデカイ。

陸戦型の持つ突撃機関砲には2基の武装がある。一つは42？機関砲。当たり所によっては戦車すら撃破出来る砲だ。

そしてもう一つは42？機関砲の銃身下にグレネードランチャーの如くセットされている122？砲。こちらの世界の西側国家の主力戦車の方は120？が主流だから、それよりも口径がデカイ。こちらは当たり所に関係なく、戦車に大ダメージを与えてしまう。

そんなEMWが出現したので、慌てて91式戦車橋は後退した。肝心要の戦車橋がやられてしまつては、アザーズ軍が占領する対岸の街を奪還するのは困難になる。目標を外した対戦車ミサイルや迫撃砲弾が川に落下し、派手に水柱をあげる。

「おい、戦車は？」

「戦車は敵の対戦車ミサイル陣地を破壊しないと、格好の的になります。まずは敵の対戦車陣地を無力化しないと」

この作戦に従事する大隊の大隊長である二等陸佐は、さつそく航空自衛隊に近接航空支援を要請した。

アザーズ軍はビルの屋上に対戦車ミサイルをあちこちセットし、対空砲も空に睨みを利かせている。迫撃砲は山なりの軌道を描いて砲弾が飛翔するのでビルの屋上のようなせまい場所は狙いづらく、低

速で飛行するこちらの攻撃ヘリではあつという間に撃墜されるのがオチなので、高速で飛行する攻撃機から対戦車ミサイル陣地を爆撃してもらおうと考えたのだ。

一方太郎達は、激しい銃撃で身動きが取れなくなっていた。E M W がひっきりなしに砲撃を加え、銃撃に加えてビルの屋上から対戦車ミサイルまで飛んでくる始末だ。

E M W は全高が20メートルと高く、離れた場所からも見えるので十分な距離を取れば簡単に撃破できる。しかし一度接近されてしまえば、その機動性と高さを生かして攻撃を加えてくる。戦車の砲塔を上部から攻撃し、撃破してしまう事が多々ある。

「くそつ、戦車はまだかよ!？」

「対戦車ミサイルを片付けなきゃ無理だ!!」

そんな怒声が飛び交い、そしてE M W の砲撃で遮蔽物の岩ごと粉碎された隊員の身体の一部が宙を舞う。

太郎の隣にいた少年隊員の一人は、その光景を見て恐怖で身体を震わせた。情けない悲鳴を上げ、小銃を放り出して銃撃が来るのとは反対側、後方に向けて走り出した。

「お、おい!どこに行く!?危ないぞ!!」

太郎はそう言つて、逃げ出した少年隊員を追いかけた。しばらく走ったところで土手を駆けあがろうとした彼に追いつき、太郎は少年隊員を地面に押し倒した。

「このバカ!どこに行こうつてんだ!？」

「も・・・もうイヤです!僕はこんなところにいたくありません!

家に帰るんだ!!」

「アホか！お前が戦わなかったら、その帰る家すらなくなるんだぞ！！」

「僕はこんなところに来たくて来たんじゃないやありません！何でこんなところで戦わなくちゃならないんですか！？大人の仕事でしょうこれは！」

太郎は少年隊員を地面に組み伏せつつ、彼の襟章を見た。二等陸士だ。そしてこの年齢から勘案するに、彼は恐らく徴兵されてこの戦場にきたばかりだったのだろう。パニックに陥っても当然だ。

太郎は今更ながら、自分が危ない事を行っているのに気付いた。銃弾の嵐が飛んでくる中、少年隊員と二人で開けた場所ですっとしているのだ。いつ撃たれてもおかしくはない。

「おい、落ち着け！俺がお前を守ってやる、だから一緒に戻ろう。な？」

そう優しく問いかけたが、彼は恐怖が頂点に達したのだろう。喚いて自分を押し倒している太郎を突き飛ばすと、一気に土手を駆けあがっていく。

「おい、待……」

太郎が最後まで言う前に、

走る少年隊員の上半身が爆発した。

びしゃつと自分の顔に降りかかった物に触れ、太郎はそれが血や肉片である事に気付いた。振り返ると、対岸のE M Wがこちらを見て、手にした突撃機関砲を向けているのがわかった。

少年兵はE M Wの42? 機関砲に撃たれたのだ。装甲車の装甲板なら簡単に貫通する42? 弾を食らっては、上半身が消失するのも当然だ。

上半身を失った少年隊員の身体は、惰性で少し進み、そして地面に倒れた。何かごろごろと転がってきたので太郎が足元を見ると、そこにはヘルメットに包まれた人間の頭があった。

しばらく呆然とし、そして怒りがわき上がってきた太郎は、振り返って対岸のアザーズ兵を小銃で撃った。何人が射殺したところで、さっきまでいた岩場に戻り、小隊長の三等陸尉に言う。

「爆撃の誘導はどうなってるんですか!？」

「さっきレーザー照準器をセットしようとしてたが、迫撃砲で人員がやられた! 誰かが照射しないと全滅だ!」

小隊長の指差した方向を見ると、そこには小さなクレーターが出来ていた。金属片が飛び散り、バラバラになった死体があちこちに転がっている。

幸いにも、岩の上に置かれたレーザー照準器には傷一つついていなかった。あとは照準器を起動し、レーザーを照射するだけなのだが、そこに行くまでに弾丸の嵐の中をいくぐらなければならぬ。

「自分が行きます!」

太郎が言うと、小隊長は頷き、小隊に敵の注意をひきつけるよう援護射撃を命じた。ミニミ分隊支援火器やM240軽機関銃が弾幕を張り、敵を牽制する。

一瞬敵の攻撃が弱まったところを狙って太郎は走り出した。途中、

何度も足元に弾丸が跳ねたが、勇気を奮い起してどうにかレーザー照準器のもとへと辿りついた。

岩に隠れつつ、望遠鏡に機器類を収めた匡体をくつつけたような形状の照準器を覗きこむ。照準器の置かれた岩に何発か銃弾が当たったが、幸い太郎を岩ごと木端微塵にするような砲弾は降ってこない。三脚の位置を調整し、スコープの中心に爆撃する対戦車ミサイル陣地を収める。レーザー照射ボタンを押すと、赤いレーザー光線がビルの屋上、土囊で囲まれた対戦車ミサイル陣地に突き刺さるのが見えた。

『こちらバイパー01、目標を補足。パイプウェイ投下』

無線機から空自機の通信が入り、直後、レーザーを照射しているビルの屋上に黒い物体が吸いこまれ、爆発した。パイプウェイレーザー誘導爆弾。航空自衛隊が異世界大戦に伴って導入したアメリカ製の爆弾だ。

ビルの屋上から黒煙が上がり、コンクリートや金属片がまき散らされる。爆弾を投下した空自のF-2戦闘機が2機編隊で、太郎達の上空を通過した。ビルの屋上に設置されたアザーズ軍の対空機関砲が火を噴いたが、高速で飛行する戦闘機を撃墜するのは難しい。

『いいぞ、次は別の陣地だ！対空砲も照準しろ！』

指揮官の二佐の声が無線を通じて伝わり、言われた通り太郎は屋上の敵陣地を照準していく。F-2が次々パイプウェイを投下し、対戦車ミサイルの陣地を壊滅させた。

対戦車陣地が壊滅し、脅威が去った戦車隊が前進を始めた。10式戦車が土手を駆けあがるなり、主砲をEMWに向けて発射する。

飛来するF-2を迎撃しようとして気を取られていたEMWが、120?徹甲弾を胴体に喰らって派手に倒れる。燃料系を損傷したのか、一瞬の後に大爆発を起こす。

EMWの操縦者は人間で言う胴体部分に搭乗する。胴体に徹甲弾を食らっては、パイロットは即死しただろう。

もう一体のEMWが上半身を旋回させ、10式戦車に突撃機関砲を向ける。がそれが火を噴くより早く、こちらの対戦車ミサイルがEMWに向かっていた。

対空砲の脅威が去ったため、AH-64Dアパッチ攻撃ヘリが前線に進出し、さっそく攻撃を始めたのだ。EMWはその機動性を活かしてどうにかヘルファイアを避けたが、殺到してくるアパッチの30?機関砲弾までは避けきれなかった。

人間の頭に見えるEMWのセンサーやカメラの集合体を破壊され、操縦者はパニックに陥ったのだろう。全力で後退を始めた。それに続くかのように、対岸から銃撃を加えていたアザース軍が後退していく。

上空の無人偵察機の監視によると、アザース軍は占領していた街を放棄し、撤退していくようだ。この街の守備隊は一個中隊程度だったらしく、大隊規模で攻撃をしてきた陸自にかなわないと判断したらしい。

反撃が無くなった事により、戦車橋が前進して崩落した部分に橋を架ける。戦車を前面に押し立て、装甲車両や普通科隊員が街を確保すべく橋を渡って前進していく。撤退するアザース軍に追撃を掛けるのか、上空を攻撃ヘリや攻撃機が轟音を立てて飛んでいく。

しかし太郎の所属する小隊は、街の奪還には向かわなかった。戦闘で小隊の40名中8名が戦死し、9人が重傷を負って戦闘不能となってしまうからだ。当初の半分程度の戦力になってしまい、戦闘

不能の判定が下されて他部隊より早く帰投することとなった。

軽装甲機動車や96式装輪装甲車LAV WAPCに乗り、負傷者も乗せて駐屯地へと向かう。太郎もLAVの2号車に乗り、小隊は川岸を後にした。

後部座席の狭い窓から外の風景を眺めていると、助手席の分隊長が愚痴るのが聞こえた。

「・・・たく、政治家どもめ！何が『出来るだけ街に損傷を与えないように』だ！そのせいでこっちは何人も戦死したんだぞ！」

分隊長はそう言って、LAVの内壁を殴りつけた。

本来ならこういった作戦の場合、徹底的な砲爆撃を加えて敵の抵抗を無くした後、前進すべきだった。実際作戦実施の直前までそういった戦術で進める事が決まっていたのだが、そこに待ったをかけたのが某有力国会議員だった。

作戦目標である街を選挙区にしているその議員は、「住民の財産を守るため」出来るだけ建造物などに被害を与えないよう訴えかけた。しかも統合幕僚会議に乗り込んでまで、である。

結果、今回の作戦には榴弾砲や空自の攻撃機等は殆ど参加しなかった。普通科隊員と装甲車両を中心に攻撃を行い、そして多数の戦死者を出す代わりに街の奪還には成功した。

その国会議員が建造物の被害を出さないよう要請したのは、街が更地になる事によって自分の政治的な人気が無くなる事を恐れたのだと、一般の隊員達の間では噂されている。自分の票田である住民たちの財産（家など）を砲爆撃で木端微塵にされてしまったのは、自分が住民の生命財産を守る仕事をしなかったと思われ、次の選挙で投票されなくなってしまうと考えたのだろう。

そんな事を考えていると、助手席の陸曹が太郎に振り返った。

「・・・そういえば山田、お前今年で任期満了だったな？」

「はあ、そうですね」

「お前、退職したらどうする？」

そう訊かれ、太郎は返事に困った。

太郎が徴兵されたのは15の春だ。今年を生き延びれば、太郎は晴れて自由の身だ。わずかだが退職金も出る。

だが、その後の事は未定だ。今さら合格した高校に行ったらって、また1年生からやり直した。それよりも大検に合格して大学に行く方がいいだろう。それに徴兵された高校生は大学進学の面で試験や授業料の面で有利になる。

そこまで考えたところで、太郎はふと思った。

どうして俺は、こんなところで自衛隊員をやってるんだ？普通大人の仕事だろう。何でガキが戦争に行かなくちゃならないんだ？何で俺はこんなところで一度きりの青春を過ごしているんだ？

太郎がそんな事を言おうとした、その時だった。

太郎達の2号車の前を走るLAVが、突如爆発した。

ドン！！と轟音を立てて、1号車のLAVのエンジン部分が吹き飛ばされる。前輪を失ったLAVは地面を削りながら進み、そして止まった。

『地雷だ！全員降りて生存者の救助を！！』

無線機から小隊長の指示が流れ、太郎達の乗る2号車を始めとして次々車両が急停止する。隊員が屋根にマウントされたミニミ分隊支援火器を構え、WAPCの無人銃座が旋回し、全方位を警戒する。度重なる改修を受けて、LAVは地雷の攻撃を受けても乗員に被害が出ないレベルまで安全性が高められている。そのおかげで、乗っていた全員がどうにか生きていた。

太郎達は下車し、破壊されたLAVから這い出てきた乗員を救助に向かおうとした。しかしそれよりも早く、空気を裂く音と共に口ケツト弾が飛翔し、1号車を直撃する。

爆風を受けて太郎は数メートル吹っ飛ばされた。そのせいで一瞬何が起こったのかわからず、見たのは大きく破壊されて燃え盛るLAVとその周囲に倒れている隊員達の姿だった。

「待ち伏せだーッ！！！」

という叫び声が上がり、続いて上がった銃声とその声をかき消す。少し離れた場所に隠れていたアザース兵が、銃撃を開始したのだ。弾着の土ぼこりが舞いあがり、何人かが血を流して地面に倒れる。すかさず反撃の銃火があがり、アザース兵が隠れているブロック塀が弾痕でボロボロになっっていく。

WAPCの重機関銃が火を噴き、壁ごとアザース兵を撃ちぬいてバラバラにする。LAVのミニミも火を噴き、あっという間に形勢は逆転した。

ゲリラ攻撃というのは一発撃つたらさっさと逃げなければならない。おそらく撤退していくこちらを待ち伏せするため、街を占領していたのとは別の部隊が今まで隠れていたのだろう。

負傷者のうめき声上がり、無事な隊員が負傷者を車両の陰まで引
つ張っていく。太郎も89式小銃のACOGサイトを覗き、応戦し
ようとしたその時だった。

ACOGサイトで4倍に拡大された前方の風景に、携帯式のロケッ
ト砲を構えたアザーズ兵を太郎は見た。すかさず射殺しようとした
が、引金に掛けた指が止まる。

そのロケット砲を構えていたアザーズ兵は、太郎と同じくらいの年
齢の少年だった。向こうもスコープ越しに太郎を見て驚愕したのだ
ろう、武器を向けあったまま二人は固まってしまった。

一瞬の後、先に動いたのは太郎の方だった。引金を引き、それにつ
られたかのようにアザーズ兵もロケット弾を発射する。

銃弾とロケット弾では、速度は銃弾の方が早い。太郎の放った5・
56?弾はアザーズ兵を貫いていたが、代わりに彼の発射したロケ
ット弾も太郎目がけて飛翔していた。

「ヤバ・・・!」

太郎は呻き、そして走った。

あつという間にロケット弾は先程まで太郎がいた場所に到達し、そ
こにあったLAVに直撃した。大きな爆発が起こり、LAVが火に
包まれる。

どうにか爆発から逃げ切った太郎の頭に、飛んできた車両の破片が
直撃した。ヘルメットに大きな衝撃を感じ、太郎の意識が急速に遠
のいていく。

(あ、れ・・・?身体が動かない・・・。俺、どうなってんだ・・・

・・・？
）

薄れて行く意識の中で太郎は思った。
そして意識を失う前に最後に見た光景は、再び飛んできたロケット
弾で味方の車両が爆発するシーンだった。

山田太郎（18）の戦場 2（後書き）

御意見、御感想お待ちします。

山田太郎（18）の転属（前書き）

登場人物紹介

山田 やまだ 太郎 たろう

18歳

陸士長

一応この話の主人公。何かと不幸である。
平凡な名前のため、偽名や仮名だと思われる事が多い。また趣味や
学力、自衛隊員としての技量も平均的なレベルである。

高校に合格したものの、入学式のその日に召集令状が来てしまった。
なので高校には1日しか通えていない。

軍規違反など何もやらかしてはいないのだが、兵員不足だからとい
う理由で懲罰部隊同然の通称Bチームに送られてしまう。不幸であ
る。

山田太郎（18）の転属

一週間後。

4月13日

鳥取県東部 あいづえ 藍上市上空

青空の下を、一機のヘリコプターが西に向けて飛んでいた。

ヘリの名前はUH-1J改「ヒューイ」。陸上自衛隊の保有する汎用ヘリコプターだ。

ヘリの中には4名の自衛隊員が乗っていた。

2名は操縦席に居る操縦士と副操縦士。もう1名は後部の兵員室に座る機上整備員。

そして最後に残った1名こそ、先週の激戦を生き残った山田太郎（本名）である。

兵員室のスライディングドアにはめ込まれた窓から外をばーっと見上げていた太郎は、機内通話装置で操縦士から呼び掛けられ、我に返った。

『おいにーちゃん、そろそろ目的地に着くぞ。準備しな』

「了解、機長さん」

太郎が言うと、急にヒューイは高度を下げ始めた。敵のレーダーに探知されたり目視で発見されるのを防ぐため、地形追従飛行に入っ
NOTE
たのだ。高度15メートル以下の超低空を地形に合わせて飛行し、時々ビルや電線を避けるために上昇する。

太郎が窓から下を見ると、荒廃した市街地が広がっていた。砲撃や爆撃、そして何回か行われたこの地域の争奪戦のために、家屋は倒壊するか大きく壊れ、あちこちに穴が開いている。

下の市街地に人の気配はない。アザーズが攻め込んできた時、この辺り一帯は避難命令が下され、それ以降住民が戻ってくる事はない。

太郎がへりに乗って西に向かっているのには理由がある。

一週間前の戦闘で太郎の所属する小隊は半分が戦闘不能に陥り、更に帰投する最中に待ち伏せ攻撃を受けたせいで小隊の殆どの人員が死傷した。

小隊40名の内、20名が死亡。9名が重傷を負って病院行き。無事に戻れたのは太郎も含めて11名という有様だった。太郎は戦闘の最中頭部をヘルメット越しに破片で強打し、脳震盪を起こして気絶していた。

そのせいで太郎の所属する小隊は解隊され、人員はそれぞれ補充を必要とする部隊に送られることになった。新たに補充人員を加えて小隊を再編成するより、他の部隊の欠員を満たす事が優先されたのだ。

11名はそれぞれ別々の部隊に送られることになった。太郎は戦友と別れ、そして新たな部隊へ向かう事となった。

太郎が行く先の部隊は第58普通科連隊第2中隊第1小隊B分隊という。鳥取県東部の高校を接收して駐屯地としている部隊だ。

そしてこのへりはその駐屯地と後方部隊を結ぶ定期便だそうだ。その証拠に、太郎が今座っているキャビンの床には、郵便物やら何やら入った段ボール箱が所狭しと積み重ねられ、その僅かな隙間に太郎は便乗している。

『そーいやお前、何か軍規違反でもやらかしたのか?』

唐突に整備員に訊かれた。このへりに乗っているのは太郎も含め、20代前後の若者しかいない。戦況が逼迫しているため、徴兵された若者も適正さえあれば操縦士になっているのが現状だ。

整備員の襟章が三曹のものであることを確認する。そして太郎は、どうしてそんな事を訊かれたのだらうと思った。

「・・・いや、思い当たりませんね。自慢じゃないですけど、俺はルールって名のつくやつは何から何まで遵守してるんで」

赤信号の時に横断歩道を渡る事はしませんよ。そう言うつと機内の全員が笑った。

『まあ気をつけるよ。あそこは色々と大変だつて噂だから』

「気をつけます。こんなところで死にたくないんで」

『あつはつは！その意気だ少年！！』

やがてへりが速度を落とし始めた。窓の外を覗いた太郎は、目的地である駐屯地が近付いているのがわかった。

前方にコンクリート製の建物が立っていた。その建物の近くでは、大小さまざまなへりが着陸し、整備を受けている。

一旦ヒューイが上昇し、太郎は上空から詳細に駐屯地の様子を見て取った。

以前は高校だったというこの建物は、今や立派な軍事施設と化していた。あちこちに通信用と思われるアンテナが立ち、レーダー車両がアンテナを回転させている。その近くには、地对空ミサイルSAMを搭載した車両が、空に睨みをきかせていた。

元は校庭だったらしき広い場所は、今やへり部隊の発着場となっていた。輸送・攻撃問わず、さまざまな用途のへりが着陸して整備を受けていたり、あるいはこれから出撃するのかローターを回転させ

人員を収容している。ヘリの着陸場所は足りないようで、もとは国道だったらしい広い道路にも、電柱等の障害物を取り払ってヘリが並んでいる。

戦車を始めとする戦闘車両が並んでいた。整備を受けていたり、武器弾薬を積み込む作業を行っているのがよく見える。

建物の周りの地面のアスファルトは引つpegされ、そこに小銃掩体や交通壕が迷路のように掘られていた。

ここがこの世界と異世界の戦争の最前線の一つ、たちつ館津駐屯地である。

太郎がしばらく下の風景に見とれている内に、パイロットは管制塔から着陸許可を貰い、ヘリ発着場の一角に降下していく。

小さな衝撃と共にスキッドが地面に触れ、そしてローターの回転数が収まっていく。機上整備員がスライディングドアを開け、彼と一緒に太郎も外に出た。

「じゃ、荷物下ろすの手伝ってくれるか？」

そう言われ、太郎は素直に従った。ここまで便乗させてもらったのだから、それくらい手伝うのは当然だ。

兵員室に積まれた郵便物などを下ろし、受け取りにやってきた隊員に渡す。一旦ここで集めた後、別の場所で郵便物を配る。

最後の一つを下ろし終わり、太郎が自分の荷物が入った背嚢を担ぎあげると一人の少女がやってきた。一般隊員ではなく招集兵らしく、迷彩服に軍用ブーツ（戦闘靴）を身につけている。年齢は若く、太郎と同じ年くらいだろうか。

その隊員は太郎に敬礼し、そして言う。

「ようこそ館津駐屯地へ！あなたが山田太郎陸士長ですね？」

「はい、そうです・・・が・・・？」

思わず太郎は少女の顔を見つめていた。黒髪を肩まで伸ばし、目鼻立ちの整ったその少女の顔を、太郎はどこかで見た事があるような気がした。

そして見られているその少女も、太郎の顔をまじまじと見ている。数秒後、二人は一斉に叫んだ。

「あーっ！お前何でここに！？」

二人の声が大きかったので、周りにいた自衛隊員達が何事かと二人の方を見る。

「あんた、太郎！？」

「そっちこそ未恵か？何でこんなところにいるんだよ！」

「それはこっちのセリフよ！何でこんなところにいるの！？」

お互いに指差しつつ、同じようなことを言う。

少女の名前は勝田^{かつた} 未恵^{みえ}。太郎の昔の幼馴染だ。

太郎が中学2年生の時に引越し、それ以来一度も会っていないかった。こんなところで再開するとは太郎も未恵も思ってはおらず、互いにどうしてここにいるのかと訊く。

しばらくすると二人も落ち着き、近況を報告しあうようになった。

「まさか未恵とこんなところで再開するとはな・・・。お前も徴兵されたクチ？」

「そうよ。わたしが高校に合格したあと、春休みの最中に徴兵され

たの。太郎も徴兵されたの？」

「そーそー。入学式のその日に召集されちまってよ、ホントについてない」

「まあいいじゃない。お互いにこうして生き残ってるだけでも」

そう言つて未恵は笑顔を見せた。

太郎が未恵の襟章を確認すると、星一つに直線2本。つまり二等陸曹だった。招集されたのが徴兵令の達された年でも、昇進するのが早すぎる。

一方太郎は陸士長なので、未恵よりも階級は2つ下だ。つまり未恵が上官なので、太郎は彼女に従わなければならない。今までは幼馴染という関係だけだったのに、上官と部下、しかも太郎の方が部下という関係が出来た事に少し太郎は複雑な気持ちになる。

「それにしてもお前、どうして俺を迎えに来たんだ？」

「？聞いてないの？わたしの分隊に太郎が配属されるのよ？」

「ええ？お前分隊長なの！？」

徴兵されて2年で二曹までのぼりつめ、そして分隊まで率いることになっているとは……。太郎は幼馴染の変わりように心底驚いた。以前から未恵は努力家であり何事にも真面目だったが、こんなことになっているなんて。太郎はそう思った。

「まあ積もる話というものもあるでしょうけど、ここじゃ邪魔になる。わたしの部下達も待っているから早く行きましょ」

未恵はそう言つて歩き出し、太郎もそれに続こうとした時だった。太郎が乗ってきたヒューイの周りに、中身の入った黒い寝袋のようなものが次々と並べられ、そしてヒューイの兵員室に寄せられて行った。それを運ぶ自衛隊員達の表情は、どこか暗い。

当然だ。その袋の中には人が入っているのだから。そして袋の中に入っている人間は、二度と目覚める事はないだろう。

その黒い袋は、死体袋ボデイバッグと呼ばれるものだった。名前の通り、中には戦死した自衛隊員の死体が収められ、後送されるのを待っている。さつきまで陽気に会話していたパイロットたちも、神妙な面持ちでボデイバッグを丁寧に運んで行く。彼らは郵便物を届けた後、死体を積んで帰るのだ。

それを見て太郎は思った。

ここは、激戦区なんだと。

未恵の部下達がいるのは、かつて校舎だった建物の視聴覚室らしい。建物内部の構造はまるっきり学校と同じで、太郎は懐かしい気持ちを感じた。

もう2年学校には行っていない。太郎は高校の入学式が終わったその日に、召集令状が来て学校には行けなくなってしまった。

自衛隊では招集された高校生を対象にした勉強会のようなものを行ってはいたが、当然学校で行う訳ではない。駐屯地で任務と訓練の合間に、スパルタ方式でみっちり知識を詰め込まれた。

「うわー、懐かしい」

「なに太郎？何が懐かしいの？」

「だって俺高校殆ど行ってねえもん。こんな場所来るのは久しぶりだよ。俺が前にいた駐屯地は普通だったし」

3階に視聴覚室はあった。

ドアを開くと、中で思い思いの姿勢でくつろいでいた隊員達が素早

く立ち上がり、未恵に敬礼する。太郎は彼らが全員自分と殆ど同じ年齢の少年少女である事に気づき、軽い衝撃を受けた。

「休め」

未恵がそう言うと、彼らは休めのポーズを取った。皆が太郎に注目し、今まで注目された事がなかった太郎は少し逃げたくなる。

「さて、彼が前から言っていた新しい隊員よ。そしてわたしの親友でもあるわ。自己紹介をよろしく」

未恵に言われ、太郎は少し慌てた。まだ心の準備が出来ていない。

「え、えつと……。山田太郎陸士長です。年は18歳。皆さんよろしく願います」

そう言つて頭を下げる。こういう時に大事なものは、相手に悪い印象を与えない事だ。もし最初に悪い印象を与えてしまったら、ずっとその人からは悪い印象で見られる事を太郎は知っていた。

早速質問の手が上がる。手を挙げたのは、ショートカットの快活そうな少女だった。

「いつもーん！山田太郎って名前、本名ですか？」

いきなり失礼な奴だと思いつつも、よくされる質問なので太郎は迷わず答える。

「本名です！偽名でも仮名でもありませんよ」

「なんか平凡過ぎて逆に最近見当たらない名前だな」

大柄な少年が呟くと、室内が笑いに包まれた。
その後も色々と言問は続いた。

「趣味は？」

「読書です」

「平凡だなあ」

「彼女は？」

「彼女いない歴〃年齢です」

「平凡ね」

「やかましいわ！」

どこ出身？家族構成は？以前の所属部隊は？特技は？エトセトラエトセトラ……。

なお、階級が違うのにタメ口で喋っているが、これは徴兵された隊員の間だけで黙認されているルールである。通常の部隊ではタメ口きいた瞬間にぶん殴られるが、召集隊員の間だけでは問題ない。召集以前は普通の生活を送っていた人々（主に20歳以下）に自衛隊のルールを押し付けるのは精神的にキツイということが判明したからだ。

いきなり階級が絶対の社会に放り込まれ、厳しいルールを順守されるとノイローゼ気味になり、自傷行為や自殺を起こす事例が続出した。なので同年齢で徴兵された隊員同士では、お互いに了承すればタメ口で話している事になったのだ。無論、他の部隊の階級が上の隊員と話す場合は敬語を使わなければならないのだが。

太郎が質問攻めからようやく解放されると、今度は分隊の隊員達の紹介を末恵が始めた。

「彼は嶋松 洋二陸士長。ポジションは擲弾手。前は施設科にいたから爆発物の取り扱いにも詳しいわ。爆弾を設置したり解除するの

は彼の仕事」

「おう、嶋松だ。よろしく」

髪の毛がツンツンに立っている少年が手を挙げた。

「で、彼は古河^{こが} 孝俊^{たかとし}一等陸士。ポジションは小銃手。色々と格闘技をやってるから、接近戦では頼りになるはずよ」

「はずって何だよ未恵。まあ、よろしく」

今度は頭を角刈りにした、若干不良っぽい少年だ。ただその言葉に棘はないので、いい奴なのかもしれないと太郎は思った。

「次は大宮^{おおみや} 夏夫^{なつお}一等陸士。ポジションは分隊支援^{S A W}火器手。三輪車から大型輸送機まで何でも飛ばせるって豪語してるけど、本当かしら」

「なんだなんだ、俺のドライビングテクニックを疑うのか？大宮だ、よろしく」

こんどはまるでボクサーみたいな筋肉質の大柄な少年だった。頭は丸刈り、柔道部にでもいそうな奴だ。

「で、さっきから黙ってるのが松本^{まつもと} 恒二^{ひさし}等陸士。ポジションは分隊選拔射手。狙撃にかんしちゃこの連隊で1、2位を争う程の腕前よ」

「………よろしく」

ひよろつとした少年がボソツと言った。ボロボロの浴衣でも着せてお化け屋敷の隅にでも立たせておけば、けっこう様になるんじゃないかと太郎は密かに思う。

「次は女子ね。さつき太郎の名前が偽名かどうか訊いてたのが板妻
明子^{あきこ}二等陸士。ポジションは小銃手。機械類の取り扱いテクニッ
クはまさに神ね」

「どーもー、板妻でーす。よろしくー！」

太郎の腕を握り、ブンブンと勢いよくふるショートカットの少女。
なんだか親しみやすそうだ。

「で、最後のあの子が十条^{じゅうじょう} 聡美^{さうみ}二等陸士。通信士よ、異世界人^{アザース}の
言語も結構理解してる。ネットとかいろいろ詳しいから、情報関連
で何かわからなかったら彼女に訊くといいわ」
「十条です、よろしく」

大人しそうな、髪をツインテールにした少女だ。こんな女の子が無
線機を背負って戦場に出ているのかと、太郎は一瞬驚いた。

「じゃあわたしは司令部に行って、次の作戦の概要を聞いて来るか
ら。嶋松くん、太郎を部屋まで連れて行ってくれる？」

「りょーかい未恵。じゃ行こうか太郎」

そう言っつて洋二は太郎の腕を引っ張り、部屋から連れ出そうとした。
が・・・。

「ちょっと待った！次の作戦だつて？」

「そうよ。明後日に行われる予定のやつ」

「俺、今ここに着いたばかりなんだけど？」

「さあね。文句は司令部に言っつてちょうだい」

呆然とする太郎を残し、「じゃあねー」と言っつて部屋から出て行く
未恵。そして再びくつろぎ始めるB分隊の面々（太郎除く）。

今日ここに着いたばかりなのに、明後日に作戦があるだつて？ たつた今皆と顔を合わせたばかりだし、色々と戦闘時にどう動くかという訓練もまだやってない。そもそも補充の人員が来たばかりの時は、訓練をやるべきものだろう。

「じゃ、行こうぜ太郎」

腕を引っ張る洋二によって、太郎は部屋から連れ出された。

それで、太郎と洋二が向かっているのはこれから生活する隊舎だ。とはいっても、元々この学校は全寮制の中高一貫の私立校だったので、その寮を流用している。

元は合計2000名の生徒を抱えていたそうだ。最近はその日本の人口増加が著しく、小学校1クラス40人以上が4クラス以上、なんてものは珍しくない。

隊舎は教室棟とは違い、綺麗にされていた。きちんと清掃が行き届いている証拠だ。無論ここは前線基地なので、後方の駐屯地とは違い少し雑になつてはいるが。

「・・・にしても、いきなり任務があるなんてな。ここつてそんなに人出が足りないのか？」

さつき見たボディバッグの数々を思い出しつつ、太郎は隣を歩く洋二に言った。前線基地ということはここから作戦部隊が出撃していくということなので、後方部隊よりも損耗率が高いだろう。

「いんや、別にそんなことないぞ。俺達だけしょっちゅう狩りだされるっただけ」

「どういう事だ？B分隊って精鋭の部隊なのか？」

「違う違う。太郎、懲罰部隊って知ってるか？」

懲罰部隊という単語を太郎は聞いた事が無かったので、素直に「知らない」と答えた。

「軍規違反をやらかした連中や犯罪者を集めた部隊だ。第二次世界大戦中にあちこちの国で作られて、使い捨てにされたのさ」

「まさか、このB分隊がそうだと？」

「上層部は公式にはそんな部隊存在しないって言ってるがな。ま、このB分隊は何かやらかして上から嫌われてる連中ばかりが集められ、死んでも惜しくない戦力って事であちこちに出撃させられてる」

洋二の話を聞く限り、2週間前にも任務を与えられたばかりなのだという。

「じゃあ、お前も何か軍規違反をしたのか？」

太郎がそう訊くと、洋二は何でもないように答えた。

「ああ。俺の場合はとりあえず動かなくした爆弾を後学の為に弄ってたら、いきなりタイマーが作動しちまってな。慌てて逃げ出して建物から出たら、ドカン！幸い死傷者はいなかったがな」

その後も洋二は皆がB分隊に来た理由を述べていった。笑えるようなものもあれば、全く笑えないものもあった。

大宮は運転好きだ。ある時無断でヘリコプターを操縦してしまい、基地を大混乱に陥れた。そしてB分隊送りになった。

スナイパーの松本は、歳が上というだけで先輩風を吹かせて後輩をいじめていた特別自衛官を、戦場で後方から狙撃した。この事件は流れ弾が当たったと処理されたが、軍法会議を免れた代わりにB分隊に送られた。

十条は情報系、例えばパソコンや通信に関しては天才だ。ある時間違って自作のコンピュータウイルスを自軍のネットワークにアツブロードしてしまい、彼女も軍法会議と引き換えにB分隊に来た。

板妻は機械好きが高じて、装備品や兵器を次々と改造してしまった。最初の内は黙認していた上層部だが、やがて我慢できなくなって板妻をB分隊に送った。

古河に関しては少し違う事情がある。古河は中学生の時に親友をいじめて自殺に追い込んだクラスメイト十数人をボコボコにして全員集中治療室送りにし、免責と前科抹消と引き換えにB分隊にやってきた。

ちなみにもう1名は、前回の作戦を終えた後に盲腸炎を起こし、後送されてしまったのだとか。で、代わりに太郎がやってきたというわけだ。

「あれ？勝田は？」

「さあな、俺も知らん。まあ何かやらかすような奴でもないから俺も不思議に思ってるんだが。それより、お前も何かやったのか？」

「いいや、一切思い当たらん」

「じゃあお前は数合わせでここに送られたんだな。ご愁傷さま」

「不幸だーっ！！」

太郎は今更ながら、ヘリのパイロットたちが「何かやらかしたのか

？」と訊いてきた理由がわかった。彼らは太郎の行き先が懲罰部隊同然の場所なので、何か軍規違反をやったと思っていたのだ。

やがて太郎が生活する事になる隊舎の一室に辿り着いた。部屋番号は401だ。

荷物を担いだ太郎の代わりに洋二がドアを開ける。4人部屋なのの中には2段ベッドが4つ並び、机やイスも人数分揃っている。部屋の一角にはロッカーがあるが、使用者を表す名札は1つしか貼られていない。

そしてその名前は洋二のものだった。どうやら太郎は洋二と相部屋になるらしい。

「何で4人部屋なのに、俺とお前を含めて2人しかないの？」

「ここが慢性的な人員不足で、定員を満たす程隊員が来てないから」
「・・・泣けるッ！」

持ってきた荷物をロッカーに収め、名札を扉に貼る。

太郎は部屋の窓から空を見上げ、誓った。

絶対に、生きて帰って任期满了してやる、と。

山田太郎（18）の転属（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 1（前書き）

登場人物紹介

勝田 かつた 未恵 みえ

17歳

二等陸曹

Bチームのリーダー。太郎の幼馴染で、中学生の時に引越して以来会っていなかったが、Bチームに配属された事で太郎と再開した。他人の能力を把握して指揮することに長けており、2年で5階級も昇進した事がその優秀さを証明している。

懲罰部隊同然のBチームに配属されたのか、誰も知らない。Bチームに配属されてからもその優秀さは失われず、アットホームな雰囲気ですべてをまとめている。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 1

太郎がBチームに配属されてから2日後。つまり作戦開始日。

明るい雰囲気ですぐに打ち解けた太郎を加えたBチームに与えられた任務は、敵長距離対空ミサイル陣地を破壊せよ、というものだった。

館津駐屯地から数十キロ離れた場所に、アザーズ軍が築いた対空ミサイル陣地がある。そこには長射程の対空ミサイルが多数配備され、自衛隊の航空機が飛行していると攻撃してくるのだという。

そのため自衛隊の作戦に支障が出ている。アザーズ軍が占領する地域を奪還するためにはヘリボーン作戦（ヘリコプターで兵員を一気に前線に運ぶ作戦）を行う必要がある。しかしそのヘリコプターが撃墜される可能性が高いし、仮にヘリが到達しても、作戦を支援する重要な空自の攻撃機が撃墜されてしまえば作戦遂行は困難になるかといって地上を装甲車などで大部隊で前進していけば、あつというまに敵に発見されてしまう。

なのであらかじめ少数の部隊を送り込み、対空ミサイルを破壊した後には大部隊を送り込むのがセオリーなのだが・・・。

未恵から作戦概要を聞いた時、太郎は真っ先にきいた。

「えっと、それって特殊部隊の仕事じゃね？」

「もしそうなら元々わたし達には話は回って来ないわよ」

似たような作戦に、湾岸戦争の時の「スカッド狩り」というものがある。この場合は地对空ミサイルではなく地上発射型のスカッド短距離弾道ミサイルなのだが、多国籍軍の特殊部隊が脅威となるスカッドミサイルを破壊しまくった作戦だ。

陸上自衛隊には特殊作戦群という部隊がある。名前の通り少数精鋭でさまざまな特殊作戦（対テロ、偵察、破壊工作エトセトラ・・・）を行う部隊だ。

他にも第一空挺団や西部方面普通科連隊といった精鋭部隊がある。このような作戦の場合、真っ先に彼らに任務が託されるはずなのだが・・・。

「じゃあ、他の部隊も参加してくれるんだな」

「何言ってるの？わたし達しかないわよ」

「単独でやれとっ！？」

驚愕した太郎に、洋二が追い打ちするように言う。

「上の連中、俺らを威力偵察に使うつもりなのさ」

威力偵察とは、敵部隊にわざと攻撃を仕掛けてその規模や配置、攻撃を受けた時にどう動くかを調べる事である。反撃を受けて全滅してしまつたら元も子もないので、通常は車両などを用いる事が多い。撃つたらさっさと逃げるために軽快な装輪車両で、威力偵察が任務の87式偵察警戒車という車両は、装甲と機関砲を備えている。

わざと攻撃を仕掛けるため、威力偵察というのは危険である。なのになつた1個分隊8名でやれというのは、死んでこいと言っているようなものだつた。

「元々わたし達がミサイル陣地を破壊してくるなんて期待されてないのよ。わたし達が攻撃を仕掛けて敵の情報が得られれば上にとつては十分なの。わたし達は死んでも惜しくないし、死んだら今度こそ特殊部隊とか送り込んで、確実に目標を破壊するんでしょうね」

それを聞いた太郎は思った。

（俺達の命って、やつすゝい）

それで、2日後。つまり作戦決行日。

4月15日 21:00

Bチームは作戦開始前に、8時間の睡眠をとる事が許された。他のメンバーが爆睡している中、太郎は中々寝付けなかった。十分な支援もない、まさに使い捨て同然の任務に駆り出されるのだ。他のメンバーは慣れているのかもしれないが、転属されてきたばかりの太郎は不安しか感じられない。

今まで数々の修羅場をくぐり抜け、いくつも戦闘を経験したことはある。だがこんな作戦、果たして無事に生還できるのだろうか。

無理矢理眠りにつき、休息を取った太郎だったが、作戦開始直前になっても不安感を拭うことは出来ない。

今回の作戦には6日かける事が予定されていた。

まず夜中にヘリを使ってレーダーに引っ掛からない低高度を飛行して移動。目標の50キロ手前で着陸し、あとはひたすら徒歩で目標に向かう。2日かけて目標に到達したのち、残された時間のうちに敵陣地を偵察し、6日目に攻撃を仕掛ける。

一列に並び、武器庫から各々の小銃、機関銃、拳銃、銃剣を搬出し
ていく。

グラウンドに出て座り込み、配布された弾倉に弾を込めていく。さ
すがにこの時間ともなると警備や当直で敵襲に備えている部隊や、
別の任務で出撃していく部隊の隊員しか姿が見えず、グラウンドは
いつもより広く見えた。

以前の自衛隊は隊員の携行弾数を弾倉6本分までとしていたが、異
世界大戦が始まってからは携行弾数は増える一方にある。物量で押
してくるアザーズ軍の前に、弾切れを起こす部隊が続出したためだ。
太郎を始めとした小銃手が携行するのは弾倉10本。1つあたり3
0発装弾されているため、合計300発だ。

夏男は手にしたミニミのボックスマガジンに、丁寧にメタルリンク
で繋がれた5・56ミリ弾を入れていった。弁当箱のようにも見え
るミニミのボックスマガジンには、実に200発の弾丸が収納され
ている。

分隊支援火器であるミニミは（というか機関銃全般に言えることだ
が）、ひたすら弾をばらまき敵を牽制し、味方の行動を援護するた
めの火器だ。そのため小銃とは違い、大量の弾丸を携行しなければ
ならない。

体格の大きな夏男でも、すべてのボックスマガジンを携行するのは
無理だ。そのため配布された5つのうち、3つを大宮が持ち、残り
2つを明子がサポートして持つ。

狙撃用の64式小銃を持つ俊二は、できるだけ無音で狙撃を行うた
めの減音器サプレッサーと亜音速弾を支給されていた。今回は攻撃開始まで敵に
気づかれるのは望ましくないため、音を立てないように戦闘するた

めだ（無論、回避するのが最優先ではあるが）。

ライフルグレネード

他にも手榴弾や小銃の銃口に取り付けて発射する小銃擲弾なども配られたが、擲弾手である洋二には、MGL140グレネードランチャーが支給されている。

MGLはライフルグレネードとは違い、弾種が多彩だ。非致死性のゴム弾や照明弾、発煙弾などが使用可能だ。実に6発を連発できる。通常の榴弾に加え、それらの弾丸も携行する洋二の顔は、どこか喜んでいるように見えた。彼は爆発が大好きな少しアブナイ少年なのである。

爆発物担当の洋二は、今回の作戦で重要なC4爆弾も装備した。信管や無線式の遠隔起爆装置も持つ。

—110？個人携帯対戦車弾《LAM》と呼ばれる使い捨てのロケット弾も装備される事となった。敵の対空陣地にはEMWが配備されている事が偵察衛星によって判明さたからだ。LAMは対戦車ミサイル^{A↑}や無反動砲とともに、普通科隊員が一撃でEMWを撃破できる装備として配備されている。

聡美が預けられた背負い式の無線機やノートパソコンの具合を確認める。どちらも問題無く作動する。

各々がそれぞれの武器にマウントされた光学照準機の調子を確認し、照準を調整したのちは、今度は必要な携行品を背囊に詰めていく。個人用天幕、雨衣、さらには重要な糧食なども詰める。しかも、ビニール袋に入れての防水処置もしなければならない。暗闇の中で仲間の背囊から中身を取り出す事もあるので、決められた手順通りに防水処置をして詰めていかなければならない。背囊の重量は全部で30キロ以上となり、予備の弾薬や防弾チョッキなども合わせれば、一人当たり40キロもの装備品を携行する事となる。

それが終われば、二人一組になってお互いの装具がしっかりしているか、声に出して点検していく。声を出すことによって、ミスをしていないかしっかりと確かめることができる。

武器や装備品の準備が終わった後、最後の訓練を行う。といっても攻撃を受けた時にどう動くか、誰が誰を、どの方向をカバーするか等といったことだ

すでに太郎が来てから数回練習したが、良くも悪くも平均的な太郎はすぐに要領を覚え、自分がどう動くのかを理解した。それも終われば、いよいよ出撃の時だった。最後に目標やルートを確認し、作戦を指揮する偉い人の話を聞き、すでにエンジンを温めていたグラウンドのへりに乗り込む。

驚いた事に今回乗るへりは、太郎が館津駐屯地にやって来た時に乗っていたあのヒューイだった。パイロットもそれに気づいたのか、乗り込んできた太郎に言った。

『よう、早速厄介事を押し付けられたみたいだな』

「あなたは・・・！またお世話になります」

『おう。ちゃんと目的地まで送り届けてやるから安心しな！』

力強いその言葉に安心し、若干不安が解消される太郎。

中身がたくさん詰まった背囊が次々運び込まれ、定員14名のヒューイの兵員室はあつという間に狭くなっていく。暴発して被害を出さないよう、銃にはまだ弾倉を装着しない。

離陸許可が出たので、ヒューイがゆっくりと上昇していく。敵のレーダーに引っかけられないよう、地上スレスレを飛行する形となる。暗闇のなか、眼下に遠ざかっていく館津駐屯地を見て、太郎はやは

り不安だ、と思った。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 1（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 2（前書き）

登場人物紹介

古賀^{こが}孝俊^{たかとし}

17歳

陸士長

Bチームの擲弾手。グレネードランチャーを装備し、また爆薬を仕掛けたり解除したりする技能を持つ。

爆発が大好きなアブナイ子。徴兵された事でその趣味に目覚めてしまった。以前は施設科や武器科に所属しており、そのため爆薬の取り扱い方法や解体法を知っている。

とりあえず停止させ回収したアザーズの爆弾を、興味が高じて弄っていたらタイマーが作動してしまい、どうにか脱出したものの味方の施設を吹っ飛ばすというヘマをした為Bチームに送られた。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 2

「今日は桜空輸をご利用頂きありがとうございます。機長は私、鎌田^{また}卓也^{たくや}。副機長は大谷^{おおたに}修吾^{しゅうご}。機上整備員は早川^{はやかわ}大輔^{だいすけ}となっております。当機の機内サービスはライフル弾、もしくはエンジンオイルだけとなっております。なお、吐き気を催した方はお手元のゲロ袋にinして下さい。機内に吐いた方は、ドアから放り出させて頂くのでご了承ください・・・」

機内通話装置を兼ねた無線機の骨伝導式のイヤホンから、機長の鎌田の陽気な声が流れる。ジョークの利いたその台詞に、機内が笑いで満ちた。とはいっても頭上で回転するローターが発する轟音で、その声もあつという間に掻き消されてしまうが。

館津駐屯地から出撃して数十分、発見されるのを防ぐために機内だけでなく航空灯も消したヒューイは、Bチームの面々を乗せて超低空を飛行していた。真っ暗なので操縦士達は暗視装置を装着し、GPSの画面と前方の風景を見比べつつヒューイを飛ばしている。窓の外には町並みが広がってはいるが、そこに明かりが灯る事はない。自動車のヘッドライトすら見えない。

当然である。そこに人は一人も住んでいないのだから。

今ヒューイが上空を飛行している街は、アザーズの侵攻に伴い、全域に避難命令が出された。住民は強制的に街から追い出され、今頃はそれぞれ疎開先で新たな生活を送っているはずだ。

無人となった街は戦場となり、幾度となく自衛隊とアザーズ軍の激戦が繰り広げられた。太郎が見ている無事な町並みはごく一部しか

なく、他は瓦礫と崩壊した家屋、そして撃破された兵器の残骸が転がる風景が広がっている。

ここ数ヶ月はこの街での大規模な衝突は起きていない。時々互いに送り込んだ偵察隊が、偶発的な小規模な衝突を起こすだけで、基本的には無人のゴーストタウンと化している。

最初は軽口を叩き合っていたが、着陸地点が近づくにつれて機内には無言の空気が漂い始めた。

敵の対空陣地は低い山脈の向こうにあり、ヒューイは山脈の手前に着陸することとなっている。敵のレーダーは山脈の向こうを飛ぶ機体を補足出来ない。レーダー波を山が反射してしまうからだ。

だが仮に山脈を越えたり高度を上げれば、たちまちヒューイは敵のレーダーに補足されてしまう。そうなったら、あつという間に空戦型E M Wが駆け付けて来る。

他にもレーダー網を埋めるため、敵のE M Wが巡回しているはずだ。それらの監視の目を全て回避し、尚且つ安全に兵員を目的地に届けるのは至難の技を越えている。

それなのに鎌田を始めとしたヒューイの乗員達は、顔色一つ変えずに着陸地点に近づいていく。数々の戦いを乗り越え、20代前半にしてすでにベテランの域に達しているのだ。

『あと5分!』

副操縦士が叫び、太郎達は一斉に武器に弾倉を装着した。機関部の右側面に突き出ているボルトを引き、薬室に初弾を装填する。切替^{セレクト}レバーはまた、アに合わせたままだ。

兵員室のスライドドアが開かれ、外気が勢いよく機内に流れこんで

来る。

ヘルメットに取り付けられた暗視装置を目に当てる。熱線映像、光増映像、その両方を組み合わせた映像の3種から選択して見られる暗視装置だ。

お互いの装備をチェックし、着陸に備える。

やがて前方に着陸地点が見えてきた。着陸地点とはいっても、山脈の麓の森にある、木と木の間にある少し開けた場所だ。

ローターが木に接触しないようにヒューイはゆっくりと降下していき、スキッドが地面に触れるのと同時に、開かれたドアからBチームは一斉に飛び出した。

少し走ったところで地面に膝をつき、銃を構えて死角を作らないように全員が別々の方向を警戒する。幸いな事に、着陸と同時に木々の間からロケット弾が飛んでくる、なんて事はなかった。

長い間留まっていれば、それだけ敵に発見される可能性も高まる。周囲に敵がいらない事を確認すると、ヒューイから馬鹿でかい背囊を素早く下ろす。

Bチームとその装備を下ろして空になったヒューイは、上昇して引き返して行った。

だがそれを見送るような隙はない。それぞれ背囊を背負い、Bチームの面々は末恵のもとに集合した。

末恵が地図を取り出し、改めてルートを確認する。山の麓を迂回していくのは敵の待ち伏せを食らう恐れがあるので、山を登っていく（山といっても標高500メートルくらいだが）。

今いる場所から対空陣地までは50キロある。マラソン選手なら4時間あれば確実に走破出来る距離だが、40キロ以上の荷物を背負い、手に銃を持って、道なき道を敵を警戒しながら進んでいくのはマラソン選手には出来ない事だろう。

時間もかかる。歩くのはアスファルトで舗装された平坦な道ではな

く、森の斜面である。どこから敵が襲ってくるかもわからない。そんな状況なので、移動にはとても時間がかかる。

2列になつて前進する。先頭を末恵と孝俊が歩く。先頭の二人は一分間あたりの自分の歩数を数えて歩く歩測というスピード調整をして、同じペースで歩いて余分な体力を消費しないようにする。

とても重い背嚢を背負つてはいるが、歩くペースは普段と変わらない。女子なんか自分の体重と殆ど変わらないような背嚢を背負っているが、2年間の訓練と実戦によって鍛えられているので、男子と同じように歩く事が出来ている。

暗視装置を装着していて狭い視界の中で、体力を浪費したり敵に察知されないよう無言のままだ。

前から2列目を歩く太郎は、小銃や拳銃に加えLAMを携行している。太郎の他にも孝俊がLAMを携行している。偵察衛星が対空陣地に2体のEMWを発見したので、その対策のためだ。

聡美の背負う無線機も重いが、やはり武器であるLAMの方が重い。背嚢に加えて1メートルの太くて重い筒を背負う太郎と孝俊は、他の隊員に比べ動きが散漫だ。

無言で歩くBチームの周囲に聞こえるのは、葉なりや鳥が鳴いたり飛び立つ時に発する音くらいである。各々が前を歩く隊員を見て、ペースを合わせて前進する。

その時前方の草むらで、がさがさとか何か動いた。末恵が片手を上げ、『前方に動きあり』と手信号で知らせる。ハンドシグナル

Bチームに緊張が走り、隊員達が障害物となる木に隠れ、物音がした方向に銃を構える。

太郎も89式小銃の銃口下に取り付けられたレーザーサイトを起動

した。暗視装置を装着していると照準機が使えないので、不可視性のレーザーの光点を頼りに狙いをつけるのだ。

暗視装置の緑色の視界の中、隊員達の銃から発するレーザーが前方の茂みに突き刺さる。がさがさという音は次第にBチームに近づいて来ており、小銃のセレクターをアから単発^タに切り替え、人差し指が引き金にかかる。

皆が今か今かと待ち構えるなか現れたのは、一頭の雄の猪だった。

あちこちから溜息を吐く音が漏れ、そして後ろの人に小声で「猪だ」と伝える声。

「この野郎脅かしやがって……。ばたん鍋にして食ってやろうか」

孝俊がそう言って小銃を下ろし、再び立ち上がつて前進を続ける。

日はとづくに昇り、腕時計の針は午前11時を指していた。途中何度か小休止を挟んだ以外ずっと歩き通しだったBチームは、すでに山頂に到達していた。山頂は木々に覆われ、麓から発見されることはなさそうだと判断した末恵は小休止を取ることに決めた。

警戒する二人を除き、水分補給をする。以前の自衛隊では水を携行するときは腰に水筒を下げていたが、今では背囊の脇に取り付けられたペットボトルにチューブを繋ぎ、先を胸元辺りに固定することで手を塞がず行進したまま水が飲めるようになっていた。

チューブを吸って少しでも水飲む。水は貴重だし、大量に飲むと逆に喉が渇く。

他の隊員が小休止を取っている間、未恵と狙撃手の恒は、眼下に広がる敵対空陣地を観察していた。

かつて運動公園だったというその場所には、あちこちに鉄骨を組み合わせた監視塔が立ち並び、積み上げられた土嚢を盾にして機銃座が設けられている。異世界人と言えども、やることはこちらの世界の人間と同じようだ。

双眼鏡の倍率を上げ、さらに対空陣地を詳細に観察する。ブルパップ式の突撃銃を携えて周囲を巡回する兵士。休憩中なのか煙草らしき物をくわえ、煙を吐き出している兵士。談笑している兵士……。遠くから観察していても、彼らはこの世界の人間と同じにしか見えない。金髪や銀髪、黒髪など人種はバラバラだが、どこか外国の軍隊が侵攻してきたといった方が、まだリアリティがある。

ただし未恵が見た限り、アザーズ軍の兵士の半分は未恵達と同年代の子供のようだった。アザーズが長命で子供のような容姿をしているのも実は大人なのか、あるいは単に戦力不足で子供まで徴兵しているのか、未恵にはわからない。ただ、今まで未恵がいた戦場で見たアザーズは大半が大人のような容姿だったので、案外後者なのかもしれない。

もしそうならさっさと撤退すればいいのに、と未恵は思った。アザーズさえ元の世界に戻れば、未恵達が戦う理由はなくなる。

（問題は……）

未恵は双眼鏡で、対空陣地の奥の方を見る。間隔を取って並んでいる対空ミサイルSAMを守るように、4体の陸戦型EMWが配置されている。仮に戦闘になれば、真っ先に攻撃を仕掛けて来るに違いない。

こちらの対戦車火器がL A M 2 発だけである以上、下手に攻撃を仕掛けることは出来ない。

出撃前の最新情報では、確認されたE M W は2 体だけという事だった。運悪く、出撃直後に増援が来てしまった・・・というところだろう。

だからといって無線で増援を呼ぶにも、司令部がイエスという可能性は0 に近い。そもそも増援を送ってくれるようなら、最初から多くの部隊を送りこんでいるはずだ。

また下手に無線を使えば敵に電波を察知され、発見されてしまう。つまり、B チームは孤立無援の状態で、任務を遂行する事を強制させられているのだ。

溜息を吐いた末恵が目を下げると、対空陣地から離れた場所に無人の住宅街が広がっている。荒れ果ててはいるが、まだまだ無事な家屋が多く残っている。

あそこを拠点にしよう。そう判断した末恵は、B チームに小休止の終わりを告げた。

B チームの面々は立ちあがり、再び前進を始めた。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 2（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 3（前書き）

登場人物紹介

こが たかとし
古河 孝俊

17歳

一等陸士

Bチームの小銃手。近接戦闘の鬼で、Bチームの中で孝俊に敵う隊員はいない。

中学生3年生の時に親友を苛めで自殺に追い込んだクラスメイト達を、男女問わずにボコボコにして集中治療室送りにした。

警察に逮捕されたが、免責と前科抹消を引き換えに自衛隊に送られ、Bチームに配属される。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 3

作戦開始から2日目、20:00。

山を下りたBチームは、対空陣地から数キロ離れた場所にある住宅街に身を潜めていた。無論住民は一人もおらず、所々で爆発によって住宅が倒壊していたが。それどころかあちこちに不発弾が埋まっている有様で、アザーズ軍が近寄らない理由もよくわかる。

Bチームが拠点と定めたのは二階建ての民家だった。ここ数ヶ月立ち入られた形跡は無く、また周辺の民家も同様だった。

センサーやトラップが仕掛けられていないことを確認したのち、Bチームはその民家を拠点とした。

道路などに簡単なセンサーを仕掛け、巡回してきたアザーズに気づかれた場合に備えて遠隔操作式の対人地雷クレイモアもセツトされた。

周囲の安全を確保した時には、既に日は沈んでいた。未恵は本日の行動はここまできと宣言し、Bチームは交代で不審番に立ちつつ休憩を取る。

午後8時から不審番に立つのは太郎と未恵だった。1階リビングで寝ている隊員達と離れ、見晴らしのいい2階に上がって周囲の警戒をする。

「・・・そういえば太郎、あんた誕生日いつだったけ？」

「4月1日」

「そっいえばそうだったわね。今更だけど誕生日おめでとう」

「どーも」

声を抑えて会話する。センサーはまだ何も感知していないが、アザーズ軍の兵士が巡回しているかもしれない。ここで気づかれてしまったら陣地に攻撃する前にこっちが猛攻を受けてしまう。救助が来

るかもわからないので（使い捨てても惜しくないと思われるから）、自分達の生き残る確率を自ら下げような事はしない。少なくとも太郎は、まだ死にたくないと思っている。

その後も取り留めのない会話は続く。2人とも実質中学校までしか行っていないので、中学時代の友人の話が主となる。

誰がどの高校に行った、誰と誰が付き合ってる、誰はこの大学を狙っている・・・などなど。まるで普通の高校生のような会話だった。

ただ、手には小銃、迷彩服や防弾チョッキを身につけ、顔にガングロのギャルも真っ青なフェイスペイントを施していなければの話だ
が。

「そついえば、あんたまだあの人好きなの？何て言っただけ・・・？」

「あさ子センパイか？つたりめえだよ」

あさ子センパイ、と言った時の太郎の声は少し弾んでいた。あさ子センパイとはその通り太郎や未恵の先輩であり、そして太郎が特別な思いを抱いている人である。

（そついやセンパイ、何やってるかな・・・）

太郎はそう思い、窓から外を眺めた。

2年と数ヶ月前、太郎が中学3年生の、受験を控えた12月のある日。

その日学校は午前中で終わり、太郎は昼前に帰宅していた。定期テストも終わり、3年生は受験勉強のために早く帰宅したのだ。

両親は共働きのため家には太郎一人しかおらず、昨晚の食事の残りを食べつつ何気なくテレビを点けた太郎は、映し出された画面に少し驚いた。

市街地を巨大な人型兵器が蹂躪し、街のあちこちから煙が上っている。ヘリからの空撮映像らしく、ズームされた映像の中で兵士達が市民を銃で撃っていた。

あれ、人気ロボットアニメの実写番組なんてやっていたっけ？それにしても凄いCGだな、いつの間に日本映画界はハリウッド並の合成技術を手に入れたんだ？にしても凄い制作費が掛かってそうだな・

そんな事を思いつつも、太郎は面白そうなのでもう少し見る事にした。どうやらドキュメンタリー風味の番組らしく、アナウンサー役の役者が必死に叫ぶ声や、画面上にテロップが流れている。

『鳥取県に正体不明の軍隊、攻撃を開始』

『隠岐諸島との通信途絶。光の柱が出現との情報あり』

『死傷者数不明』

『自衛隊、関与を否定』

かなり本格的だと思い、つい入ってしまう。なぜかCMは流れない。

『ご覧下さい、境港市が火に包まれています！あのロボットは今のところ10体現れたとの情報ですが、海を渡って飛んできたヘリコプターから兵士が次々と降り立ち、市民に銃撃を加えています！』

その声と共に、カメラがズームされて兵士の姿が大写しになる。確かに自衛隊じゃあないようだ、白人とか色んな人種が揃ってるし。その時画面の中のロボットがヘリの方向を向いたようで、頭のような部分が画面に映る。手にしたライフルのような形の武器が向けられた。

『え、嘘、何

！？』

直後、その武器が火を噴き、画面に砂嵐に切り替わった。撃墜されたと設定なのか、よくあるパターンだな。すぐにスタジオに変わるのも、ありきたりだと太郎は思う。

太郎は残り物の生姜焼を食べつつ、ひとまずチャンネルを変えてみる。最近総理大臣が脱税やら違法献金やらの政治汚職をやらかしているのも、そっちのニュースも知リたかつたからだ。

だが奇妙な事に、他のチャンネルも同じ様子を映し出している。

まさかと思って新聞のテレビ欄を見てみた。本来ならこの時間、バラエティーやニュースをやっているはずだった。

つまり、壮大なドッキリでもなければ、これは今実際に起き

ている出来事なのである。

その日の夕方になって、ようやく事態が太郎にも掴めてきた。

所属不明の軍隊が中国地方北部に上陸し、市民に無差別の攻撃を仕掛けた。

アメリカ、ロシア、中国などは一切関与していない。

自衛隊の秘密兵器でもない（なぜかネット上ではこの説が疑問視されている。日本はロボット好きな国だから？）

ロボット出現の直前に、隠岐諸島との通信が途絶。今に至るも回復せず。

なお隠岐諸島島後に巨大な光の柱が出現。今のところ関連は不明。

ネットも使って得られたのはこのくらいだった。テレビは通常の番組を変更し、ずっと謎の軍隊についての報道が続けている。

自衛隊は今だに出勤していないようだった。国民が死んでいつているのに、総理大臣は「当該部隊の所属国を確認した後、防衛出動を命じる」などと言ってはいたが、下手に攻撃を加えたら後々に国内外の非難を集めるかもしれない、などと臆病になっているんじゃないかというのがネット上での見解だった。

ま、領海侵犯をした漁船の船長を、相手国がちよっと脅しただけであっさり解放しちゃうような総理大臣だしな。太郎はそう思った。

緊急の国連総会と安全保障理事会が開かれ、攻撃をしているのが世界のどこの国の軍隊でもない事が確認された。高度に訓練されたテロリスト集団ではないかという意見も出たらしいが、テロというの

相変わらず、自衛隊は防衛出動していなかった。総理大臣は自身の保身に精一杯であり、アザースの侵攻に対応する能力はなかった。自衛隊は正当防衛や緊急避難を適用してアザース軍に立ち向かってはいたが、それにも限界があった。正当防衛や緊急避難という名目は攻撃を受けた地域やその周囲の地域の部隊しか使えず、自衛隊の大規模な投入をするには総理大臣が防衛出動を命じるしかない。移動中に攻撃を受け「正当防衛」、保護を求めてきた民間人を助けるために「緊急避難」。そんな風に戦うしかないから、自衛隊の被害もつなぎ登りだった。

増え続ける損害。だが自衛隊は勝手に出動することは出来ない。文民統制という制度のため、自衛隊の最高指揮官たる総理大臣の命令がなければ動くが出来ないのだ。だが時の総理大臣は右往左往するだけ、自衛隊の出動を命じられるような状態ではなかった。

そのため自衛隊は、最後の手段を取った。
すなわち、クーデターである。

政権を掌握した自衛隊は統幕議長をひとまず指導者に起き、自衛隊に防衛出動を命じた。在日米軍にも協力を要請したのち、3ヶ月以内に衆議院の解散総選挙を行う事を国民に確約した。クーデターは一時的なもので、自衛隊がずっと政権を取る訳ではないと国民にアピールしたのである。

防衛出動が命じられ、自衛隊はようやくアザース軍に対して効率的な作戦行動を取ることができた。陸海空が協力し、一時は京都に迫る勢いだったアザース軍を押し返すことが可能になった。

ただしアザース軍は既に上陸地点の境港市を中心に拠点を築いてい

た。隠岐諸島にある光の柱から続々とアザース軍は現れ、海を渡って境港市に上陸する（アザース軍は軍艦も保有していた。光の柱の一部は海の上にあり、艦艇は直接海上に出現する）。

戦闘は膠着状態に陥ったが、その隙に日本は戦時態勢に入ることが出来た。物資の統制、軍需物資の確保、武器弾薬兵器の増産・・・。

そして、徴兵制度の復活。

自衛官以外

文民で構成された新内閣が発足したのは、年が変わって3月。その頃には、自衛隊の戦力は60パーセント以下にまで落ちていた。度重なる激戦に加え、元々自衛官の数が少ないのも原因だった。

前政権は「動的防衛力」と称した自衛隊の人員削減を実行しており、その影響で戦うべき自衛官がなくなっていたのだ。一説には日本全土を守るには陸自だけで20万人が必要と言われているが、定員は15万人以下と定められていた。さらに財務省^{自衛隊の真の敵}によって人件費も削られまくっている状況では、充足率（実際にいる人数）は90パーセント台の部隊が殆どだった。

4月の入隊を繰り上げてどうにか新隊員を確保しようとしてはいるものの、この戦争の時代にわざわざ好き好んで自衛隊に入隊する人間も少なかった。このままでは数カ月以内に戦闘継続が不可能になるという試算が出た時、政府は最後の手段に出た。

1回目に行われた徴兵制度をめぐる国民投票は、反対多数で否決された。大人達は自分達が徴兵され、戦地に行くのを恐れたのだ。

2回目に行われた国民投票は、可決された。徴兵開始の年齢を「身体検査を通過した15歳から28歳までの国民」となったためだ。

これに29歳以上の大人たちは賛成した。自分達が徴兵されなければそれでいいという、無責任な考えからだった。

徴兵される人間には3月中に通知が来る事になっていた。まず無作為で抽出された後、学校などの身体検査の記録を見て更にふるいにかける。通知が来たモノは4月になったら指定の駐屯地などに集合し、身体検査を通過した者は特別自衛官に任命される。

太郎の元には、3月中に徴兵の通知は来なかった。徴兵を免れたと太郎は喜び、そして合格した県立高校に入学した。

2年前 4月5日

体育館で行われた入学式の後、教室で行われた顔合わせや自己紹介を行うオリエンティングも終えた太郎は、桜が舞い散るなか帰宅の途に就こうとしていた。

校門の前では在校生らが部活動の勧誘を熱心に行っており、何人もの新入生が拉致同然に部室に連れて行かれる。それらを回避したり「考えておきます」で乗り切った太郎の元に、一人の女子生徒が声をかけてきた。

いい加減勧誘をうっとおしく思っていた太郎は振り返り、そして固まった。

そこにいたのは長身で、やや茶色がかった髪をポニーテールにまとめた2年生の女子。

「あ、あ、あ・・・あさ子センパイ・・・」

「よっ、太郎。アンタもこの高校に来たんだ」

あさ子と呼ばれたその女生徒は、親しげに太郎に声をかける。太郎は驚いているふりをしつつも、内心では「やった!!」と思っていた。

あさ子は太郎の中学生の時から先輩だった。サバサバとした姉御肌だが、美人で文武両道の人物であり、性別を問わず人気があった。当然太郎もあさ子に憧れていた。中学校の時に生徒会に書記として入った太郎は、生徒会長をやっていたあさ子に一目ぼれしてしまった。あさ子も何かと太郎に話しかけて来ており、仲はよかったと言っている。

そんなあさ子だが、高校は県内でも5本の指に入るような県立の進学校に行ってしまった。良くも悪くも平均的な成績だった太郎は、あさ子に会いたいという理由で猛勉強に励み、そしてあさ子と同じ高校に合格した。

話している内に、太郎はさまざまな情報を掴んだ。

- ・あさ子に彼氏は出来ていない（最重要情報）
- ・部活は軽音楽部に入っている
- ・相変わらず成績は優秀

太郎はあさ子が1年前と変わらない事に安堵を覚えつつ、幸せなひと時を過ごした。

「そっいえばセンパイ、知り合いで徴兵された人っています?」

「いいや、いないね。だって2年生だけで10クラス500人人もいるんだよ？友達は多い方だけど、誰かが徴兵されたって話は聞かない。太郎の友達は？」

「俺の友達にも来たって話はないですね。ま、3月中に通知が来るって話ですし、俺達は戦争に行かなくて済むってことですよ」

そう言って笑いあい、あさ子の所属する軽音楽部の見学に行き、即座に入部を決めた（楽器など平均的にしか弾けないが）太郎は、これからの高校生活に思いを馳せながら帰宅した。

そして、太郎の幸せな時間は終わりを告げ、代わりに血と汗と硝煙に塗れた地獄に放り込まれる事となる。

太郎が帰宅すると、ポストに大きな水色の封筒が入っていた。

何だと思って差出人を見ると、太郎が住む県の自衛隊地方協力本部からだった。どうやら本来は3月中に届く予定だったものが、配送が遅れて今日届いたらしい。

震える手で封筒を開くと、そこには太郎の予想通りで、一番回避したかった書類が入っていた。

すなわち、召集令状である。

家族全員が現実を受け入れられないまま、次の日には自衛官が太郎を迎えに来た。逃げ出す事も抵抗する事もせず、頭が真っ白になったままの太郎は大人しく身体検査の会場に連れて行かれた。

色々と平均的だった太郎は、身体検査をパスしてしまった。家に荷物を取りに戻り、家族と最後の時間を過ごす事を許可された太郎は、何も出来ないまま入隊予定日を迎えてしまった。

それからはずっと、訓練、戦闘、訓練、戦闘、待機、訓練、戦闘・
・・・。

同期入隊の仲間達は次々と死んでいった。太郎も敵を殺し、そして今はBチームに放り込まれてしまったという事だ。

だからいくら楽しい高校生活を思い浮かべても、無駄なのである。過ぎてしまった太郎の時間は、上書きされることはないのだから。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 3（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 4（前書き）

登場人物紹介

おおみや なつお
大宮 夏夫

17歳

一等陸士

分隊^{S A W}支援火器手。大柄でBチーム一の怪力を誇る。またチームの運転手。

「三輪車から大型輸送機まで、何でも動かしてみせるぜ」がモットー。その名の通り、自動車のドライビングテクニクに優れ、また飛行機なども飛ばす事が出来る（ただし「飛ばす」だけ。着陸までは保証しない）。

以前所属していた部隊でこっそりとヘリコプターを飛ばしてしまい、基地中を大混乱に陥れた。そのためにBチームに送られる。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 4

時間は一気に飛んで、作戦開始から5日目の22:00。

この3日間、Bチームはずっと対空陣地を見張っていた。ネズミのように地面にはいつくばって、コソコソと隠れながらの偵察だった。陣地の動きを見張り、地雷やセンサーの位置を確認。兵士が巡回する時間やルート、機銃座などの兵器の配置や種類も確かめた。

「こことここ、後こっちに地雷が埋めてある。結構な数だぜ」

「ここは見張りが多い、下手に動けば発見されるぞ」

「こっちにセンサーも仕掛けてあったわよ」

Bチームは拠点の民家に戻り、地図を広げて得た情報を報告していく。地図に次々と、地雷などの障害の位置や、アザーズ兵の巡回ルートが書き込まれていく。

陣地の周囲にはあちこちに地雷が仕掛けられている。南側に埋まっている地雷の数は少なく、北側に行くほど多くなっている。代わりに地雷の数が少ない場所ほど、歩哨や巡回の回数が多くなっていく。EMWの位置も確認した。常に2体が稼働して陣地の周囲を警戒している。全高の高いEMWからなら、地面に伏せている歩兵はあっという間に見つかってしまう。代わりに、こちらもすぐに接近してくるのがわかるが。

「・・・そういえば、ここにいる歩哨はやる気がなさそうだ」

普段は無口な松本が口を開き、陣地の一角を指差す。その場所には

監視棟や機銃座が設けられている。

「歩哨は何人？」

「3人」

「シフトは？」

「・・・02:00から06:00まで。・・・個人的な感想だが、夜明けと同時に気が緩んでいるみたいだ」

「ふーん。交代が近いのと、『今日も夜襲を受けなくてよかったぜラッキー』てな感じなのね」

「・・・ああ。欠伸をしているような有様だからな。だが、15分おきの定時連絡はしっかりやっている」

未恵はそれを聞くと、顎に手を当てて何かを考え始めた。

地図を眺めながらどこをどう行くか、正面から仕掛けるのかコッソリ行くのかを考えているのだ。太郎としてはまだ死にたくないので、選択権があるならコッソリ行きたいが。

しばらくして、未恵が宣言した。

「北側から侵入しましょう。まず嶋松くんが先頭で、地雷を解除しながら前進。地雷原を突破したら松本くんが歩哨を狙撃。侵入に成功したら、15分以内に全部の対空レーダーに爆弾を仕掛ける。陣地を脱出後に爆破するわ」

「定時連絡に应答しない事がばれたら？」

「その時はその時よ。爆弾を設置したらその時点で起爆。後は敵陣地を脱出」

「上手くいくのかよ？」

太郎は不安になって尋ねた。確認されたアザース軍の数は500名

以上。もし戦闘になれば近隣のアザーズ軍基地から増援も来るだろうから、敵はさらに増える。

対してBチームの数は8名。この数で戦いながら脱出なんて無理がありすぎる。

だが末恵は、こともなげに言った。

「やるしかないわよ。私達が『使える奴』って上層部に認識させない限り、私達はこれから最前線に放り込まれ続けるわ。使い捨ての戦力としてね」

作戦開始は明朝05:00。それまでに休息を取ることになった。

武器を抱えて眠るBチームの面々。だが太郎は相変わらず眠れない。さつき末恵が言った「使い捨て」という言葉。自分達が有能だと示さなければ、Bチームはこれからも危険な任務に投入され続ける。

休む暇もなく戦い続けていれば、いつか疲労がピークに達する。そうなれば死ぬ奴が出て来るだろう。

Bチームのような懲罰部隊があり続ける限り、人員不足という理由で太郎のように何の落ち度もない奴が次々放り込まれる。そうなる事を防ぐためにBチームは任務を成功させ、懲罰部隊などというものを解体させるのだ。

太郎にもその事くらいわかる。だが何もやっていないのに懲罰部隊に放り込まれた身としては、理不尽さしか感じられない。

いや、そもそも徴兵された事が理不尽な事だ。自分勝手な大人達が徴兵制度を復活させ、太郎や他の数多くの子供達の青春や未来を奪った。太郎はまだ18歳、やりたいことなら一杯ある時期だ。

いつかあさ子センパイに、「好きです」って伝えたかったのに。そ

んなことを考える太郎の目に、涙が浮かんだ。

徴兵されてから何回、いや何百回も考えてきたことだった。戦闘を生き延びる度に次の戦闘に怯え、仲間が死ぬ度に「次は自分の番だ」と考える。

太郎達が命を張って戦っているのに、後方の安全地帯で生活している国民は、戦争が続いている事すら忘れてしまっているような状態だ。テレビや新聞は開戦当初は連日最前線からの報道や、自衛隊を持ち上げるような特集していた。だが戦争が長引くにつれ、戦争関連の報道は減っていった。

代わりに戦争を終らせられない自衛隊を非難するような報道が増えていく。街頭インタビューでは「税金が高すぎる」だの、「さつさと戦争を終らせろ」だのという無責任な声上がる。

戦争を終らせたいのはこっちの方だ。太郎は唇を噛んだ。

太郎だって死にたくない、だからさつさと戦争が終わってほしいと望んでいる。だがそれを阻んでいるのは「人員不足」という現状だ。

戦争を終らせたいなら、自分も武器を取って戦えよ。それが嫌なら、せめて金を出して支援しろよ。俺達が毎日死にそうな思いで青春を犠牲にして戦っているのに、何でわかってくれないんだよ……！

「眠れないの？」

未恵の言葉で、太郎の悲観的な考えは終わった。

未恵はリビングに置いてある椅子に座っていた。今は孝俊と明子が

警戒についているので、未恵は恐らく作戦について詳細を詰めていたのだろう。

涙を拭きつつ、「ちょっとな」と太郎は答えた。目が冴えてしまったので、リビングに行って椅子に座る。

未恵は地図を睨み、時々何かをメモしている。邪魔にならないように黙っていようと太郎が思った直後、「何か喋ってくれない？」と未恵が言う。

「黙ったままだとなんか気まずくない？」

というのがその理由だった。太郎は正直言っただ喋りたい気分ではなかったのだが、仕方なく口を開く。

「なあ、もし明日任務を成功したとして、司令部はすぐに制圧部隊を送り込んでくれるのか？」

「わたし達が作戦行動を起こした時点で待機、もし対空ミサイルを無力化したらすぐに攻撃機とヘリボン部隊を送り込んでくれるそうよ」

「信頼できるのか？俺達上層部に嫌われてんだろ？」

「嫌ってるのは以前に所属していた部隊の上官や政治家連中くらいよ。現場の部隊の指揮官は結構よくしてくれてるわ。それにウチの連隊長、父さんの知り合いだし」

「そうか、お前の親父さん幹部自衛官だっけ。今どうしてるんだ？」

「・・・元気よ」

太郎はあれっと思った。話題が未恵の父親に及んだ瞬間、未恵の顔が少し歪んだからだ。まるで、怒っているかのよう。

まあ思春期だしな、父親を嫌っている時期なのかもしれない。太郎はそう考え、深く触れない事にする。

未恵の父親とは幼い頃に数回会っただけなので、太郎は顔をあまり覚えていない。幹部自衛官は転属が多く、太郎が中学に上がる前に

未恵の父親も単身赴任していった。後に未恵と母親も父親を追って、引越してしまったのだが。

「連隊長、お前と仲いいの？」

「少なくとも嫌われてはいわね。いつもわたし達に危険な任務が回ってくると、『そんな任務は特殊部隊にやらせるべきだ』って擁護してくれてるし。あの連隊長がいなければ、とっくにわたし達過労死してるわよ」

「ふーん、なら安心だな」

太郎はそれを聞いて少し気が楽になった。もしそれが本当なら作戦を成功させればすぐに味方が来てくれ、Bチームが見捨てられるなんて事も起きないだろう。

もつとも、防空網を無力化してもそのままにしておけば、あつという間に敵が復旧させてしまうのだが。

作戦開始から6日目、05:00。

それぞれの装備を点検した後、民家の庭に生えていた草や蔦を刈ってヘルメットや迷彩服に偽装を施していく。長い間放置された庭の雑草は伸び放題になっており、それを身につけたBチームの面々は、あつという間に緑色のなまはげみたいな格好になる。

「最後にもう一度確認するわね。まず歩哨を狙撃で倒した後、4斑に別れてそれぞれリーダーに爆弾をセット。セットし終わった斑から離脱してAに集合。^{アルファ}全員集まったら起爆して、友軍が到着するのを待つ。途中で敵に発見されたら、セットし終わった爆弾から起爆、

各個にAに向かう。Aに敵がいた場合、^{フラボー}B地点に集合よ」

擬装を施し終わった隊員達は、黙って未恵の話を聞いている。その顔は引き締まり、未恵の言葉を聞き逃すまいと真剣に話を聞く。

「発砲は厳禁、敵は出来るだけ回避するように。もし倒すしかない場合、銃剣などを使って。ただし、一人でも発砲したら、あとは遠慮なくやっていいわ。何か質問は？」

質問はない。皆既に、自分達がどのように行動すべきかわかっていた。

それを確認した未恵は、Bチームに前進を命じた。

銃を構えつつ、全員がそれぞれ別の方向に視線を飛ばしつつ前進する。まだ薄暗いので、暗視装置を装着しての行動だ。

ゴーストタウンと化した住宅街を、足音も立てずに進んで行く。ところどころに地雷やセンサーが仕掛けられているが、ここ数日の内にそれらの位置は全て把握されていた。

仕掛けられた地雷やセンサーに引っ掛かる事もなく、Bチームは対空陣地の北側へと向かう。

大きく迂回して陣地の北側に回り込んだBチームは、ついに陣地を囲むように設けられた地雷原に侵入した。敵の「まさか地雷原を堂々と通り抜けてくる連中なんていないだろう」という考えの隙を突いたのだ。

爆発物の解体が出来る洋二を先頭にして、匍匐前進する。間違っ解除していない地雷に触れないよう、洋二の後を一直線に進む。

「解体く解体く、一役買いたい」

洋二がそんな歌を小声で口ずさみ、地雷を解体していく。地雷の上部を覆うカバーをドライバーで外し、信管を外す。

その間、数十秒。

アザーズ軍が使っている対人地雷は、この世界で使われているのと構造が殆ど同じである。洋二は武器科に所属していたこともあるので、爆発物の解体に関して一通りの技術と知識を持っている。

地雷を解体していく洋二の後を、芋虫のようについていくBチーム、洋二が通った場所は安全なのだ。

地雷原の端まで来た時、先頭の洋二が片手を上げた。「止まれ」のハンドシグナルだ。

（どうしたの？）

（前方に巡回中の兵士、数は4）

小声で末恵に情報を伝え、皆は一斉に地面に顔を押しつける。

Bチームの目の前を、4人のアザーズ兵が歩いていく。周囲に視線を飛ばしてはいるが、緊張感がなさそうだ。

Bチームが潜む地雷原の方もちらちらと見ているが、特に注意して見てはいない。地雷原を突破してくる奴なんていないと考えているのだろう。

（どうする、殺るか？）

（いえ、放つときましよう。このままやり過ごして）

未恵の指示でBチームは息を殺し、巡回中の兵士が過ぎ去るのを待つ。万一発見された時に備え、音を立てずに銃の安全装置を解除する。

幸いな事に、巡回はBチームに気づくことなく通り過ぎて行つた。

地雷原は草が伸び放題で擬装が効果を発揮したことや、何より気が緩んでいたのだろう。

アザース兵が去つたのを確認すると、Bチームは再び前進した。地雷原を抜けた瞬間に立ち上がり、前方にある障害物へと走る。邪魔になる背囊は民家に置いてきたので、動きは軽快だ。かつてはブロック塀だったのだろうが、いまやコンクリート片と化している瓦礫の陰に隠れ、陣地の様子を伺う。外から見る限り、陣地に異常は起きていない。目標の歩哨三人も、特に何かを注意している様子はなさそうだ。

（明子さん、集音機貸して下さい）
（はいよつと）

明子が小さな背囊から指向性集音機を取り出し、聡美に手渡す。大きめの拳銃の銃口にパラボラアンテナを装着したといった体の集音機を受け取ると、イヤホンをつけた聡美はそれを構えて敵の歩哨に向けた。

聡美はかなりアザースの言語を理解している。日常会話くらいなら問題なくこなせるくらいだ。聡美は敵の会話を盗み聞きし、Bチームが警戒されていないかを確かめる。

指向性集音機は微弱な空気の震えでも感知し、音声として再生が可能だ。このサイズでは数十メートル先まで聞こえるかどうかだが、メカオタな明子が（無断で）改造したことにより、100先の言葉も聞く事が出来る。

聡美は時々聞こえるアザース兵の言葉を脳内で翻訳していく。内容は飯がまずいだの、上官が厳しいだのといった愚痴くらいだった。彼らは本当に人間そのものなんだなと、聡美は改めて思った。

（大丈夫、気づかれてないです）

（わかったわ。松本くん、狙撃して）

（・・・了解）

松本が瓦礫の陰から少し身を乗り出し、64式小銃改に取り付けられたスコープを覗きこむ。

長らく問題点が多く指摘されていた64式小銃だが、異世界大戦勃発とともに改良されるようになった。具体的には、

- ・機関部の改良
 - ・部品脱落を起こさないように各部をユニット化して部品点数削減
 - ・機関部上部のボルトの位置を、機関部左に変更
 - ・照準機の改良
 - ・光学照準機取り付け用にマウントレール搭載など・・・
- もはや別物の銃と言ってもいいほど中身も外も変わっているが、自衛隊はあくまで64式小銃の「改良型」で通している。下手に「新型を導入します」と宣言してしまったら、「この戦時に余計な出費をするのか！」と議員先生達に怒られてしまうからだ。

64式小銃のスコープを覗き込み、まずは監視塔の上から周囲を見張っているアザース兵の頭部を十字線の中心に納める。照準補助用のトリチウムを利用した赤い光点が、ピタリと頭に重なった。だがまだ撃たない。撃つのは連中が定時連絡を終えた直後だ。風は吹いていないし、気流を乱すような障害物もない。狙撃には格好の条件だ。

東の空がだんだん明るくなってきた。恒はそのせいで、照準しているのが自分と同世代の少女だという事に気づいてしまい、少し鬱になる。

（・・・出来れば子供は殺したくないんだがな・・・）

そんな事を思っても、敵が少女だといっても、恒には撃つ選択肢しかない。ここで対空陣地の無力化に失敗したら、アザーズ軍はここを拠点にしてさらに攻撃を加えてくる。それがわかっていいるから、恒は今まで何度も引き金を引いてきたのだ。

やがて地上で雑談していたアザーズ兵の片方が、無線機を取り出して何か言った。集音機でそれを聞いていた聡美は、アザーズ兵が「異常なし」と言ったのがわかった。アザーズ兵が通信を終える直前に、未恵に報告する。

（今定時連絡中・・・、今終わりました）

（よし、松本くん撃って！）

（・・・了解）

恒は引き金を引いた。

サブレッサー減音器に加えて亜音速弾を使用していたので、発砲音は殆どしなかった。幼い表情を残したアザーズ兵の少女が、その顔面に弾丸を喰らって崩れ落ちる。

恒は素早く照準を移動し、続いて機銃を構えて雑談しているアザーズ兵を撃った。目の前で仲間が血を流して倒れたのを見て、呆然としていた最後の一人も撃つ。

（・・・目標を射殺）

（上出来よ松本くん。皆、前進するわよ）

未恵がそう言い、発見される恐れが無くなったBチームはこそそと対空陣地に侵入する。陣地の周囲は有刺鉄線を巻いたフェンスで囲まれていたが、洋二がペンチを使って金網を切断し、一人がしやがんで通れるほどの穴を空けた。

「じゃ、いいわね？事前に伝えておいた目標にC4をセットしたら、さつさと後退すること。万一設置途中で発見されたら、セットして充分離れた位置で起爆し、無線で援護を要請するなりなんなりしてじゃ、行くわよ！」

未恵の言葉で、Bチームが二人一組になって陣地内を進んでいく。陣地内の対空レーダーの数は東西南北に計4つ。対空ミサイルは数十発。一々ミサイルに爆弾を仕掛けていたら爆弾が足りないのです、レーダーのみ爆破することにした。ただしレーダーを爆破してもミサイルは無事なので、代わりのレーダーが起動したら再び防空網が復旧してしまう。

一つ一つ仕掛けていって15分では間に合わない。なので4つの班に分散し、それぞれ爆弾を仕掛けていくのだ。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 4（後書き）

御意見、御感想お待ちします。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 5（前書き）

登場人物紹介

まつもと ひさし
松本 恒

17歳

二等陸士

分隊選抜射手。スコープを装着した64式小銃改を装備している。普段はまったく喋らず、話す時も「・・・」がつくことが多い。

徴兵されて部隊に配属された時、同じ部隊にいた同じ階級で年上の特別自衛官に苛められていた。長い間我慢していたが、やがて我慢できずに戦闘中、後方からその特別自衛官を狙撃した。

「流れ弾が当たった」として事件は処理されたが、降格された上にBチームに放り込まれた。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 5

対空陣地に侵入したのち、Bチームは4隊に別れてそれぞれレーダーを破壊に向かった。

北側のレーダーに向かう未恵と恒は、アザーズ兵に見つかることなく対空レーダーにたどり着いた。アザーズ軍の注意は主に南側に集中しており、北側の警備は手薄だったのだ。

車両で牽引して移動するタイプの対空レーダーは支柱を高く伸ばし、レーダー板を回転させている。レーダーの脇には電源車が停められており、ケーブルで繋がれて電源を供給している。

レーダー車の前には4人のアザーズ兵が陣取っていた。警備兵らしく、ライフルを手にして時々周囲に視線を飛ばしている。だが彼らも自分達が襲撃を受けるとは露とも思っていないようで、談笑しながら時々周囲を見回すだけである。

「・・・どうする？」

「ここで待つて。私がC4を仕掛けてくる」

「・・・警備はどうする？やるか？」

「もし私が発見されそうになったら、その時はよろしく」

未恵はそう言つて、背囊から弁当箱ほどの大きさと形に成型されたC4爆弾を取り出した。今朝洋二が用意したものだ。

未恵はレーダー車の前に止められたアザーズ軍の軍用車の陰に隠れ、飛び出す瞬間を見計らった。警備のアザーズ兵が未恵のいる方向から視線を外し、再び仲間と談笑を始めた瞬間を逃さず一気に走り、レーダー車の下に滑り込んだ。

それを見ていた恒は一瞬ヒヤとしたが、幸い未恵が発見されていない

ない事を確認した。そして手近な所に停められていたアザーズ軍の装甲車の屋根の上に上って伏せると、64式小銃改に取り付けられたスコップを覗いた。もし未恵が発見されそうになったら、その瞬間にアザーズ兵を狙撃できる態勢を整える。

一方レーダー車の下に潜り込んだ未恵は、早速C4を設置し始めた。粘土のようなC4の表面を折り畳みナイフの刃でえぐり、そこに電気発火式の信管を突き刺す。信管から伸びるコードを無線式起爆装置の受信機に繋ぎ、受信機を起動する。起爆装置が待機状態に入った緑色のランプを点灯したのを確認すると、未恵はC4をレーダー車の下を這うパイプとパイプの間に押し込んだ。

爆弾を設置したので恒の所に戻る。アザーズ兵は先程と同じく形だけの警戒をしており、未恵は簡単にレーダー車から離れる事ができた。

その頃東側のレーダーを破壊しに向かう夏男と明子は、停車しているアザーズ軍の軍用車両の隙間を縫って移動していた。早朝ということもあり、駐車場をうつつくアザーズ兵の姿は少ない。

そのおかげで、二人は発見される事もなくレーダー車にたどり着いた。レーダー車の前に二人のアザーズ兵がいたが、巡回の兵士らしく、しばらくするとレーダー車から離れていった。

誰もいなくなったので、二人は堂々とレーダー車に近づき、爆弾を設置する事が出来た。レーダー車の支柱に目立たないようにC4を仕掛け、テープで固定する。

「ラッキーだな、敵がいなくなってくれて」

「ほら、口よりも手を動かす!」

いつでも起爆できる状態になったのを確認すると、夏男と明子は合流地点へと移動していった。

西側のレーダー車を警備する二人のアザース兵に、背後から近づく影があった。孝俊と聡美だった。

二人は音もなく警備兵に近づき、そして同時にアザース兵に襲い掛かった。

口を片手で塞ぎ、もう片手で握った銃剣を首の横から突き刺した後、刃を前に突き出す。アザース兵は器官と頸動脈をやられて声が出せないまま、出血多量ですぐに死亡した。

「毎度思っただけど、十条って結構アグレッシブだよな・・・」

「まあそこは気にしないで下さい。それよりもさっさと仕掛けて退散しましょう」

「ま、それもそうだな」

孝俊はそう言って、手にしたC4をレーダー車にセットした。

問題は、南側のレーダーを破壊しに向かっていた太郎と洋二だった。

「・・・ここ、通るしかないのか？」

「通るしかないな、覚悟決めろよ」

「はぁ・・・。。わかつちやいたが、やっぱ緊張すんな」

太郎はそう言つて、目の前の光景を眺めた。

太郎達の前には、大きなテントがいくつも列を作り、立ち並んでいた。中ではアザース軍の兵士達が休んでいる。

先程ちらつとテントの中を覗いてみたら、中では十人近いアザース兵がいびきをかいて寝ていた。

テントの数から計算するに、ここで300人以上のアザース兵が寝ている計算になる。下手に見つかってしまったら、300人以上のアザース兵が湧き出てくることになるだろう。

出来れば太郎としては、このテントの列の前を通り抜けるのは回避したかった。が、テントの前を通るのがリーダーへの最短ルートであり、迂回しては制限時間内に間に合わない恐れがある。

（毎度の事だが・・・俺ってツイてないな）

太郎は溜息をはき、そして覚悟を決めた。

「うつし、行くか！」

そう小声で言つて、太郎と洋二は走り出した。テントで寝ているアザース兵を起こさないように音を立てず、尚且つ出来るだけ早く走るのは困難を極めた。小銃を構えつつ、油断なく周りを見ながら進む。さつさとテントの列を通り過ぎたいと、心の底から太郎は願った。

だが不幸なことに、最後のテントの前を通り抜ける直前に、それは起こった。

今まさに通り過ぎようとしていたテントの中から、一人のアザース兵が出てきたのだ。

トイレにでも行こうとしていたのか、あくびをしつつ出てきたアザース兵は、目の前にいた見知らぬ姿の兵士を見て動きが止まった。すぐにそれが自分達が戦っている自衛隊員だという事に気づき、大声で仲間に知らせようとした。

一方太郎達も、テントからアザース兵が出てきた瞬間には心臓が止まりそうになった。アザース兵が口を開こうとするのを見た太郎は、すかさず突進してアザース兵を地面に叩きつけ、馬乗りになる。アザース兵が声を出さないように口を塞ぎ、銃剣を抜いて無我夢中で首に押し当てる。逆手に握った銃剣を引き、アザース兵は器官と頸動脈を一気に切断された。

こぼこぼと口の端から血の泡を吐きつつ、アザース兵は絶命した。噴出した血が、太郎の顔を真っ赤に染める。

「太郎、大丈夫か!？」

「・・・ああ。それより結構音出しちゃったけど、気づかれてないか？」

「多分大丈夫だ。それよりもう時間がない、さっさと行くぞ」

洋二の手を借りて立ち上がり、再びレーダー車へ向けて走っていく。死体を隠す暇はなく、発見されないのを祈るしかなかった。

レーダー車の周囲には一個分隊程度のアザース兵がいた。未恵達が見たのとは違い、真面目に警備をしているようだった。無音で倒すのは難しそうで、太郎は頭を抱えた。

「気づかれずに近づくのは無理だ。どうするよ?」

「仕方ない。多めに爆薬セットして、レーダー車が巻き込まれるのを祈・・・」

洋二がそう言ってC4を取り出そうとした瞬間、

あちこちに設置されていたアザーズ軍のスピーカーが、甲高い警報音を鳴らしはじめた。

「おいどうなってる！？まだあと6分は余裕があるはずだぞ！」

「知らん！未恵達が見つかったか、死体が発見されたか・・・」

陣地内が慌ただしくなり、点呼や何かを怒鳴る声が上がりはじめる。太郎はとりあえず、未恵に連絡を取った。

「一体何があった？何かやったのか！？」

「わたし達がやったんじゃないわよ。多分死体が見つかったのね。爆弾は仕掛け終わった？」

「まだだ。警戒が厳しくてな、どう仕掛けるか相談してたら警報がなった」

「てことは、まだレーダーの近くにいるのね。今からわたし達も行くから、先に爆弾仕掛けて待ってて。発砲も許可するわ」

「おい待て、今陣地中が警戒態勢に入ってたぞ。どうやって移動するんだ？」

『こっするのよ！！』

通信が終わるとともに、陣地のあちこちで爆発が起こった。未恵達が先にレーダーに仕掛けた爆弾を、一斉に起爆したのだ。

陣地を駆け回っていたアザース兵が爆発で悲鳴を上げる。レーダー車前に陣取っていたアザース兵達の注意が、一瞬爆発が起きた方向に向く。

太郎と洋二はM67破砕手榴弾を取り出し、安全ピンを引き抜いてレーダー車へと放った。安全レバーを弾き飛ばしアザース兵達の足元に転がっていった手榴弾は、次の瞬間には爆発して周囲に金属片を撒き散らしていた。

3名が顔面に破片が突き刺さって即死し、残った5人も重軽傷を負った。太郎と洋二は今まで隠れていた軍用車の陰から身を乗り出し、狙いを定めて小銃を撃つ。

負傷して動けなかったアザース兵達は、銃弾を食らって絶命した。レーダー車の周囲からアザース兵がいなくなったのを確認し、二人は一気にレーダー車へと近づく。

「よし、今からC4仕掛けるから援護頼む！」
「わかった！」

洋二は小銃を地面に起き、背囊からC4を取り出して設置する。その間太郎は周囲を警戒する。

銃声に気づいたのか、すぐにアザース兵達がやってきた。太郎はレーダー車脇に停めてある電源車を遮蔽物として、アザース兵を迎撃する。

単発で射撃し、先頭の一人を撃つ。

一人が倒れると、後続のアザース兵は素早く周囲の物陰に飛び込んだ。時々顔を出し、二人に向けて発砲してくる。

太郎も車両の陰に隠れつつ、89式小銃のACOGサイトを覗き、応戦する。互いに隠れながらの銃撃戦なので、決定的な打撃を与えられない。しかもアザース兵は隠れながら移動し、だんだん太郎達に近づいてくる。

「爆弾設置はまだかよ!？」
「今終わった!」

洋二が叫び、銃撃戦に加わる。MGL140ランチャーを構え、遮蔽物に隠れているアザーズ兵に向けてグレネード弾を発射した。アザーズ兵の背後にあった壁や地面に着弾したグレネード弾が爆発し、敵の動きが一瞬止まる。

太郎も89式小銃の銃口に06式小銃擲弾ライフルグレネードを装着し、洋二と共に撃った。敵兵の動きが止まったその瞬間を見逃さず、一気に走ってレーダー車から離れる。

その様子を見て逃げ出したと思ったのか、アザーズ兵達は隠れていた遮蔽物から飛び出すと、太郎達を追おうとした。だが彼らがレーダー車の脇を通ろうとした瞬間、安全な距離まで離れたのを確認した洋二が、起爆装置のスイッチを押した。

レーダー車に設置されたC4爆弾が爆発し、隣に駐車してあった電源車も爆発に巻き込まれる。発電用の燃料が多く積まれていた電源車も誘爆を起こし、太郎達を追っていたアザーズ兵達が爆炎の中に消えていく。

その頃には太郎と洋二はスタコラサッサと逃げ出し、とつくに爆発に巻き込まれない距離まで離れていた。後方で爆発とともに黒煙が上がったのを確認し、二人は再び走り出す。

「・・・おまえら、俺が来る前からこんなことばかりやってたの？」
「おう、爆破したり爆発したり、爆破したりとかな」
「何故全部爆破なのか、俺がツツコミを入れといたほうがいいのか？」

「いいじゃないか爆発！漢のロマンだよッ！」

「そう思うのは島松洋二、絶対におまえだけだ！！」

そう軽口を叩いているのは、少しでも恐怖を紛らわそうとしているのかもしれない。そんなことを頭の片隅で考えつつ、太郎は無線で未恵を呼び出す。

「こちら山田だが、未恵、今どこだ？」

『今レーダー車があった場所に行こうとしていたんだけど、とつくに離れてるわよね。吹っ飛ばしたんなら』

「悪いな、敵を抑え切れなかった。俺達の現在地は・・・」

太郎はそう言つて、何か目印になるものがないか周囲を見回す。少し離れた場所に、牽引式の荷台に搭載された、細長いコンテナを束ねたようなものがある。

目を凝らして見ると、そのコンテナが対空ミサイルの発射器であるのがわかった。ミサイルの発射器がいくつも間隔を取って並んでいる。

「近くに対空ミサイルの発射器が並んでいる。敵兵はまだ来てないようだ」

『わかったわ。今からわたし達もそっちに向かうから、そこから動かないで』

「了解、終わり」

最後だけきっちり交信規則を守り、通信を終える。片膝について小銃を構え、周囲を警戒していた洋二が、

「なんだって？」

ときく。

「ここから動くなとさ。今こっちに向かってるらしい」

「そうか。じゃ、大人しく待ちますか」

二人は近くに積み上げてあった空のミサイルコンテナの陰に隠れ、周囲を警戒しつつ未恵達を待つ。太郎は空のコンテナを見て、一体どれだけの航空機がこれで撃墜されたのだろうかと思った。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 5（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 6（前書き）

登場人物紹介

いたづま
板妻 あきこ 明子

17歳

二等陸士

Bチームのメカニック。機械類に詳しい。

以前は工業系の高校に通っていたが、高校2年に進級する直前に徴兵される。その後自衛隊で様々な装備品を勝手に（趣味で）改造してしまう。

改造された装備品は能力が向上するものの、明子以外に分解も整備も出来なくなってしまったので、キレた上層部によってBチームに放り込まれる。

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 6

太郎と洋二は敵の猛攻を受けていた。積み上げられた空のコンテナを遮蔽物として、お互いの背中を守るように戦う。

「装填する！」

洋二が叫んで身を引つ込め、89式小銃の弾倉を外す。代わりに太郎がコンテナの陰から上半身を出し、ACOGサイトを覗いて撃つ。遮蔽物としていた軍用トラックの残骸から今まさに飛び出そうとしていたアザーズ兵が、至近距離に当たった銃弾に驚いて慌てて引込む。その間に洋二は再装填を終え、銃撃戦に復帰する。

「未恵たちはどこだよ！すぐに来てくれるんじゃないのか！？」
「知るかッ！しゃべる暇があつたら撃て！！」

太郎は叫び、防弾チョッキのポーチから手榴弾を取り出した。安全ピンを引き抜いて、少し待ってからトラックの残骸に向けて投擲する。

「グレネード！」

そう言つて身体をコンテナの陰に引つ込める。洋二も慌てて身体を隠すと、次の瞬間には手榴弾が爆発していた。

爆発までの時間を調整していたので、残骸の陰にいたアザーズ兵達に逃げる暇はなかった。高速で飛び散る破片がアザーズ兵達を引き裂き、絶命させる。

一瞬銃撃が弱まり太郎が安堵したのもつかの間、すぐにお返しとばかりに銃弾の嵐が襲ってくる。太郎達の近くにミサイルの発射器があり、誘爆を恐れてアザーズ軍は重火器を使ってくることはない。

だが大量の銃弾を浴びせかけ、太郎達が動けない隙に接近してこようとする。

「……………ッ！このままじゃ接近されるぞ！どうする！？」

「コンテナは分厚い金属製だからライフル弾は貫通しないだろうけど、重機関銃を持ち出されたら終わりだ。未恵たちが来てくれるのを待つしかない！」

痺れを切らしたように洋二が背中に吊っていたMGL140を構え、次々撃つ。リボルバー拳銃をそのまま大きくしたような形のグレネードランチャーから軽い音と共にグレネード弾が発射され、アザーズ兵達が爆発に巻き込まれた。だが数で勝るアザーズ軍は、遮蔽物に隠れつつ太郎達に近づいてくる。

すると次の瞬間、太郎達の横からBチームの面々が現れた。

「お待たせ！結構派手にやってるわね」

「知るかーッ！来るのが遅いんだよッ！」

「おまえらもしかして迷ってた？」

太郎と洋二は口々に怒鳴るが、その表情には余裕が戻っていた。

「大宮くん、敵を牽制して。松本くんはその間に敵の数を減らし、十条さんは司令部と連絡お願い。他は周囲の警戒ヨロシク！」

未恵が指示すると、隊員達は「了解ッ！」と答えて動き出す。ミニミ分隊支援火器を持った夏男が地面に伏せ、その装弾数と連射速度を活かして弾丸をばらまき、近づきつつあるアザーズ兵を牽制する。ミニミの銃声の合間に恒の64式小銃の発砲音が響き、敵部

隊の指揮官が頭を吹き飛ばされて斃れる。

指揮官を失ったアザースの小隊は混乱したようで、太郎達の前から引き下がっていく。

「どうにか凌いだか・・・」

「いえ、まだよ。またやってくるわ。十条さん、司令部はなんて言ってる？」

「えーと、今ヘリ部隊が向かっているみたいです。あと20分で到着だそうです。空自も支援機を出してくれてるみたいですが、スクランブルした敵の空戦型と交戦中。到着するのは最低でも5分後」

「遅いわ、その前にわたしたちは挽き肉よ」

未恵は注意深く周囲を見回しつつ、そう呟く。

アザース軍だつてバカじゃない。不意を突かれて対応が後手に回り、Bチームにいいように動かれてしまったが、すぐに態勢を立て直してくるだろう。近くのアザース軍基地からも増援がやってくるだろうし、Bチームが取るべき選択肢は「さっさと逃げる」しかないのだ。

未恵も即座にその考えに至り、周囲に何か使えそうな車両がないかで見回した。ミサイル発射器がいくつも並んでいる場所なので、それらの牽引車やトラックが何台も停めてある。異世界からやってきたといつても、車両の形は地球のものほとんど変わらない。

「大宮くん、あのトラック動かせる？」

「俺をなめんなよ未恵。トラックの運転なんて楽勝さ、たとえ異世界の車両でもな」

「そう、心強いわね。じゃあ板妻さん、大宮くんと一緒にトラックを動けるようにして頂戴。多分キーがついてないと思うから」

「りょーかいッ！」

未恵の指示で夏男と明子がトラック向けて走っていく。未恵は残りの隊員に、トラックが動ける状態になるまでの間二人を援護するよう命じる。

それぞれ手近な場所に置いてあるミサイル発射器の陰に隠れ、アザー兵の襲撃に備える。が、聞こえてきたのは歩兵の足音ではなく、ズシンズシンという地響きだった。

「・・・陸戦型エム、2体接近。・・・気づかれたッ！」

恒が顔色を変え、直後、Bチームの周囲に弾着による爆発があちこちで起こった。

陣地内のBチームを殲滅するため、アザーズ軍が2体の陸戦型エムWを送り込んできたのだ。

「敵襲ーッー！」

孝俊が叫び、EMWの突撃機関砲から発射された42mm弾が次々と飛んでくる。全高の高いEMWからはBチームがまる見えで、次の瞬間には、2体のEMWは全速力で走り、一気に接近してくる。

「対陸戦型戦闘準備！太郎、孝俊くんッ！」

未恵の声で二人は今まで担いでいたLAMを手にした。できれば使わずに済ませたいと太郎は思っていたが、どうやら陸戦型EMWを倒さなければならぬらしい。

LAMは最大700mmの装甲をも破壊する、歩兵（自衛隊では普

通科隊員と言うが）が携行する兵器の中では最大級の威力を誇る。安価で取り扱いが簡単なので、自衛隊では無反動砲や対戦車ミサイルと並んで対EMW用の兵器として大量に配備されていた。が、所詮はロケット弾。対戦車ミサイルのようなロックオン機能はないし、無反動砲と違って使い捨てだから撃ったらそれっきりである。

接近しつつあるEMWは2体。しかもこちらの世界の戦車に匹敵する陸戦型だ。装甲は厚く、重武装なので、普通科隊員が撃破するには大量の対戦車火器を使用するしかない。

「わかってわね？LAMは2発きりよ、外さないで！」

「無茶言っなよ・・・」

孝俊はうめきつつも、LAMの発射準備を進める。

安全装置兼用のグリップを起こし、弾頭のプロープ（信管）を回して伸ばす。プロープを縮めたままだと榴弾となり、破片を撒き散らすだけで装甲を破壊出来ない。対歩兵用としては有効だが。

未恵は太郎と孝俊に適切な発射位置に移動するように命じ、続いて残りの隊員達に援護射撃を命じる。LAMを携行する二人がやられてしまつては元も子もないので、EMWの注意をこちらに向けさせなくてはならない。

太郎と孝俊はそれぞれ攻撃する目標を確認したのち、対空ミサイル発射器の陰に隠れつつEMWが接近するのを待つ。2体のEMWは未恵達の射撃の方に注意が行き、太郎と孝俊には気づいていないようだった。

一方未恵達は遮蔽物に隠れつつ、EMWの注意を引くべく射撃していた。ライフルグレネードを撃つたり手榴弾を投げたりして、少しでもダメージを与えようと試みているように敵に思わせる。

2体のEMWは移動速度を落として歩きつつ、未恵達に接近していく。その装甲上や足元で爆発が起きるが、EMWに全くダメージは与えられない。

よくゲームとかアニメで手榴弾を使って装甲車やら戦車やらを撃破するシーンがあるが、実際に手榴弾の破壊力というものはそんなに強くない。手榴弾はほとんどのものが破片を飛び散らせるだけであり、しかも殺傷範囲も確実に殺せるのは半径5メートルくらいなものだ。飛び散る破片は防弾チョッキやヘルメットを着用すれば、胴体や頭部などの重要箇所は防護される。

そんな手榴弾なので、見た目は派手だがEMWにダメージは全く与えられていない。過去に普通科隊員がライフルグレネードなどでEMWの脚部を集中攻撃し、関節部分を破壊して動きを止めた事例がある。だがそれにしたって小隊規模で攻撃したからこそ出来たのであつて、Bチームのような一個分隊で立ち向かうのは自殺行為に等しい。

未恵もそれを理解していたからこそ、太郎と孝俊がLAMの射撃準備を終えたのを見て、さつさと後退することを決断した。突撃機関砲から発射される42mm弾が牽引車やミサイル発射器の台座を貫通し、地面に穴を開ける。

12・7mmクラスの重機関銃弾が胴体に当たっただけで、2000メートル先にいる人間も真つ二つになると言われている。その3倍以上の口径の弾丸が命中したら、太郎が以前見たように人間の上半身は消失してしまう。

「嶋松くん、スモーク!」

「あいよッ!」

MGLのシリンダーに弾頭の長いスモーク弾を装填し、近づきつつあるEMWの周囲に向けて発射する。何度か地面をバウンドしたの

ち、スモーク弾はE M Wの数メートル前で白煙を噴射し始めた。

未恵は他にも発煙手榴弾を自分達の足元に置き、自分達の姿を煙幕で包む。周囲が白煙で何も見えなくなってしまったので、暗視装置を赤外線モードにして装着し、後退する。

だがE M Wには赤外線カメラが備えつけてあり、さらに操縦士の超能力が外界の探知能力を向上させている。E M Wの操縦士達も素早くカメラを赤外線モードにして、白く表示されるBチームの人影向け、機関砲の銃口を向けようとした。

その瞬間を太郎と孝俊は見逃さなかった。白煙の中から切れ切れに見える陸戦型E M WへとL A Mを構える。

側面に取り付けられたスコープの中心にE M Wの胴体を捉えた太郎は引き金を引いた。弾頭が発煙筒から飛び出すと同時に後方からカウンターマスと呼ばれるプラスチック片が放出され、発射の反動を相殺する。太郎に一瞬遅れて孝俊もL A Mを撃つ。

太郎の放った弾頭はE M Wの胴体に直撃した。高温のメタルジェットの噴流が装甲を貫通して、内部の操縦士を蒸発させる。

もう一体、孝俊が狙った方のE M Wは太郎のL A Mの発射炎を見て即座に回避運動を取った。そこに孝俊の放った弾頭が直撃する。

目標が動いてしまったせいで、胴体を狙ったはずの孝俊の弾頭は狙いを外してしまった。弾頭はE M Wの左足付け根に当たり、左足を破壊する。

左足をもぎ取られたせいで、E M Wの身体は傾きはじめた。運の悪いことに、なんと太郎のいる方向に向けて倒れてくる。

「ちょ、ちよつと待て〜ッ!」

自分に向けて倒れてくるE M Wを見て、慌てて太郎は空のL A M発射

筒を捨てて逃げ出す。LAMは使い捨て式なので捨てても問題ない。太郎が倒れてくるEMWから離れた後、轟音とともに倒れたEMWが対空ミサイルの発射器を押し潰す。

「ヤバ………！」

押し潰された発射器を見て、とっさに太郎は手近な場所にあった別の対空ミサイル発射器の陰に飛び込む。直後、押し潰されたミサイルが爆発を起こし、EMWの装備した突撃機関砲の弾薬や燃料が誘爆を起こす。

ミサイルやEMWの破片が太郎の隠れたミサイル発射器に当たり、鋭い金属音を響かせる。隠れるのが遅かったら金属片で外科手術されているところだった、と太郎はぞっとする。

「おー悪い悪い。大丈夫か？」

「んな訳あるかーッ！ちゃんと胴体に当てるよ！」

『こらその二人！喧嘩しないでトラックに來なさい、脱出するわよ！』

両手を合わせて謝る孝俊、キレる太郎、そしてそんな二人を見て怒鳴る末恵。

死にかけたことにぶつくさ文句を言いつつも、太郎は孝俊とともにトラックで待つBチームのもとへ戻った。アザーズ軍のトラックは明子によってすでに動ける状態になっており、運転席には夏男が収まっていた。他のメンバーは荷台に座り、発進を待っている。

「災難だったな太郎。大丈夫か？」

「いや、大丈夫じゃない。それよりあのエム、放置しといていいのか」

そう言つて、左足がもげて地面に倒れているE M Wを指差す太郎。
E M Wはミサイルや機関砲、そして燃料の誘爆によって派手に燃えていた。それを見て未恵はもはやE M Wが脅威にならないと判断し、トラックを発車させるよう命じる。炎に包まれた状態では、どのみち操縦士は中で蒸し焼きになっているだろう。

「そういえば十条さん、本隊はいまどこに？」

「あと10分で到着だそうです。空自は制空権を得たので、支援機を向かわせてくれますが……」

「間に合わないわね」

エンジン音に混ざつて近くで聞こえるアザーズ兵の怒鳴り声を聞き、未恵は夏男にスピードを上げるよう言う。

「なあ未恵、そういえばE M Wは何体確認されたんだっけ？」

ふと思い出したように言つた太郎の言葉に、車上の全員がぎょつとする。皆さつきの陸戦型2体の対処で頭がいっぱいで、すっかりそのことを忘れていた。

「………4体ね」

「………残り2体はいずこに？」

「………」

直後、走るトラックの上をジェットエンジンの轟音を立てて何かが

通過した。背中に短い翼とジェットパックを装着して飛行するそれは、地球の戦闘ヘリに相当する「地上掃射型」と呼ばれるEMWだった。

人間の目に似た頭部のカメラが走るトラックに向き、続いて手にした機関砲が火を噴く。夏男が慌ててハンドルを切り、飛んできた砲弾をかわす。狙いを外した砲弾は、陣地内のアザーズ軍の天幕や車両に突き刺さる。

「あらら、巻き添えを出しても構わないくらい怒ってらっしゃる」
そう呑気に呟く洋二。

「大宮くんッ、スピード上げて振り切ってッ!!」

「無茶言つなよ未恵! あつちのスピードは時速300、こっちは良くて100だぜ!」

ハンドルを右左に切りつつ、夏男が怒鳴り返す。

Bチームの乗ったトラックは陣地を囲むフェンスを突き破り、外に出た。異常に気づいたアザーズ兵が何人が発砲するが、猛スピードで走るトラックになかなか当たらない。ミサイルが無力化された事により自衛隊の本隊が近づきつつあり、アザーズ軍のほとんどがそれに対処するためんやわんやだったせいもあるだろう。

問題はトラックの上空を飛行し攻撃してくる地上掃射型EMWだった。EMWはトラックと平行して飛行しつつ、機関砲、さらには肩に据え付けられたロケット弾まで発射してくる。

『イナハ・ラウ軍曹、ただちに引き返せ! 追撃命令は出ていない!』

一方飛行するE M Wの中では、一人の少女が憎悪の表情を浮かべつつ、コクピットの壁面に映し出されるトラックを睨みつけていた。コクピットの壁面にはE M Wの全身に取り付けられたカメラが中継する外界の様子が映っている。まるで小さなプラネタリウムのようなコクピットで、少女はやかましく上官の警告を流す無線機を切った。

（あいつらッ！あいつらが皆を殺したんだッ！生きて帰す訳にはいかないんだッ！）

アウル（地球側はE M Wと呼称している）を操縦するイナハ・ラウはその思いで、上官の制止を押し切ってトラックを追跡していた。こちらの世界に侵攻して以来、イナハには戦友と呼ばれる者たちが多く出来た。この島国^{ニホン}の軍隊　イナハが聞いたところによるとジエイタイと名乗り、軍隊でないと言い張っているらしい　の抵抗は激しく、イナハの戦友も次第に減っていった。

最後に残った戦友も、さっきあのニホン人達に殺されてしまった。搭乗するアウルの脚部を破壊され、生きたまま蒸し焼きにされてしまった。

（殺すッ！あのニホン人達だけはぶち殺すッ！）

先程までいた対空陣地にジエイタイが迫っているという知らせも、イナハには関係なかった。最後に残った戦友を殺された怒りで、彼女のまともな思考回路は吹っ飛んでいた。

飛行するアウルの姿勢を変更するイメージをすると、イナハの頭部のヘッドセットがそのイメージを機体に反映させる。超能力を保持する人間にしか、アウルを操縦することはできない。アウルの身体を動かすイメージを増幅できないからだ。

握った操縦桿（火器管制だけに使われる。操縦はイメージですからだ）のトリガーを引く。武装は機関砲だ。

発射された機関砲弾はトラックに突き刺さる。　　と思いきやトラックが急に横に移動したため外れてしまった。どうやら奪われたトラックの運転手は、相当な腕前のようなのだ。

他にも荷台に乗る二ホン人達がこちらを指差しつつ、何かを叫んでいる。二ホン人達は手にした武器を構え、発砲してくる。コクピット内に弾着の金属音が響くが、ライフル程度でアウルが撃墜させるわけではない。

（殺してやる　　）

イナハは唇の端を吊り上げ、そして引き金を引く。

「確かゲームにこんなシーンあったよな！？世界で一番売れた現代戦争の『ステンバイ・・・』が有名なゲームとか、戦車からヘリまで操作できる戦場の悪い中隊の続編とか！」

「版權対策しつかりやってるなって感心したいところだけど、喋る暇があつたら撃てよッー！」

洋二が現状をゲームのシーンに例え、すかさず太郎がツッコむ。

荷台の上でBチームの面々は銃を構え、攻撃してくるEMWを銃撃する。走って揺れるトラックの上からの射撃で、相手も飛んでいるので中々当たらない。EMWが放ってくる砲弾も夏男が驚異のドライビングテクニクで回避しているが、いつまで保つかわからない。長年放置されたせいで道は荒れ放題、衝撃で何度も荷台から振り落

とされそうになりつつも、無駄だとわかっていても飛行中のEMWに向けて発砲する。

トラックは荒廃した市街地から森林地帯に入り、EMWが平行して飛行しつつ横から撃ってくることはなくなった。代わりにEMWは上昇し、トラックの前方に回り込んで攻撃してくる。機関砲弾がトラックをかすめ、ロケット弾が地面に大穴を開ける。

「大宮くん、銃！」

言うが早いか末恵が運転席と荷台を隔てる窓を開け、助手席に置いてあったミニミと予備弾倉を掴んだ。ミニミを引っ張り出し、太郎へ放り投げる。

「太郎、それで弾幕張って！小銃よりはマシでしょ！」

そう言われたので太郎は89式小銃を荷台に置き、代わりにミニミを構えた。取り付けられたELCAN低倍率スコープを覗き、撃ちまくる。弾帯が次々とミニミに吸い込まれ、代わりに分離したメタルリンクと空薬莖が排出され、荷台に落ちて金属音を立てる。ミニミは小銃よりも装弾数や連射力に優れているが、使われているのは小銃と同じ弾薬だ。当たっても大したダメージはない。

「携SAMがあればなあ……」

89式小銃を撃ちつつ、明子が呻いた。

地球の戦闘ヘリに相当する地上掃射型は、戦闘ヘリと同じく対空機銃や対空ミサイルがあれば撃墜される。あるいは戦闘機を使えば、勝負は戦闘機のワンサイドゲームになる。

だが今そんな物はなく、Bチームは小銃と分隊支援火器の乏しい火線を撃ち上げるしかなかった。

とその時、無線機で何事か通信していた聡美が叫ぶ。

「司令部より通達！本隊が対空陣地の制圧を開始したそうです！空自のF-15が支援でこつちに来てくれるそうです」

「イーグル！？助かった」

明子が小銃の弾倉を交換しつつ、ホツとしたように言う。航空自衛隊の主力戦闘機であるF-15は、今なお世界で強いと言われる戦闘機の一つに数えられている。F-15なら、地上掃射型EMWはあつという間に撃墜できる。

一方イナハは、逃げ回るトラックをようやく照準に捉えていた。今まで森の中を走っていたトラックは今や森を抜けて田園地帯を疾走している。道の左右には草が伸び放題になった田畑が並んでいるだけで、障害となるものはない。

（クロス・・・・・・！）

イナハは引き金に指をかけた。

再びトラックの上。Bチームは向けられた砲口を見て凍りついた。周囲に障害物はない。

「ちょっと待て！なんでわざわざだだっ広い所を走ってんだよ！？」
「森の中じゃイーグルの支援は受けられないのよ！」

EMWの頭部カメラがトラックを向き、機関砲の砲口が微調整される。

皆がトラックごと木っ端みじんにされるのを覚悟した、その時、

トラックの後方を飛行するEMWに、轟音と共に無数の機関砲弾が突き刺さった。

背中のジェットパックや手足を破壊され、EMWが墜落する。しばらく地面を削りながら前進し、胴体各所から煙を吐き出してEMWは止まる。

そしてその上を、一機のF-15がジェットエンジンの轟音を立ててフライパスした。毎秒50発も20mm弾を連射できるイーグルのバルカン砲がEMWを破壊したのだ。

『こちら第204飛行隊、デインゴ01。どうやら間に合ったみたいだな』

無線からイーグルのパイロットの陽気な声が流れる。未恵がチームを代表して礼を述べると、イーグルはトラックの上空を一度旋回し、飛び去って行った。

耳を澄ませば、対空陣地があった方角から銃声や爆発音、そしてヘリコプターのローター音がいくつも響いてくる。自衛隊が対空陣地を制圧すべく戦闘を繰り広げているのだ。

トラックは停車し、Bチームが恐る恐る墜落したEMWに近づいていく。配線が焼け焦げる臭いが周囲に漂い、EMWの破片があちこ

ちに転がっている。

銃を構えつつ、E M Wを取り囲む。何か動きがあった場合、すぐに応射できるよう態勢を取る。

するとBチームの目の前で、機械音と共に墜落したE M Wの胴体の扉が開いた。操縦席からアザーズ兵の少女がはい出て来たので、即座に銃口が向けられる。少女は短機関銃を手にしていた。

「動くなッ！」

「武器を捨てて、両手を頭につけるッ！早くッ！」

日本語、アザーズ語の両方で警告しつつも、指を引き金に掛けるBチーム。少女は怒りに顔を歪めていたが、やがて諦めたように短機関銃を捨てた。

「板妻さん、ボディチェックして。他にも武器を持ってるかもしれない」

「了解」

明子は89式小銃を肩に掛け、代わりにレッグホルスターから9mm拳銃を抜き、アザーズ兵の少女に近づいて行く。

まずは短機関銃を蹴って少女から遠ざけ、次に身体を隅々まで探っていく。無論片手で拳銃を構えたままだ。E M Wの操縦士はボディスーツのようなものを着用しており、身体のラインがくつきりと浮かび上がっている。普段だったら男子達は鼻の下を伸ばしているところだが、生きるか死ぬかという状況なのでそんな事は全く気にしていない。

「何も持ってないよ。どうする？」

「拘束して。松本くん、ロープ取ってきて」

恒がトラックの荷台に置かれた背囊からロープを取ってきて、銃剣で適当な長さに切って少女を後ろ手に拘束する。

すると少女が何事かをアザーズ語で呟き、すぐに聡美が翻訳する。

「『さつさと殺せ』だそうです」

「『アホなの？』って伝えて」

未恵はそう言うと、皆にトラックに戻るよう伝える。

聡美が無線で連隊本部からの通信を伝える。それによると本隊は既に対空陣地を制圧し、そこを拠点とすべく他部隊の増援が向かっているらしい。

Bチームについては「任務遂行ご苦労。さつさと帰ってこい」との事だった。

捕虜にした少女を連れ、Bチームはトラックに乗って連隊本隊のある館津駐屯地に向かう。トラックの荷台から外を流れる風景を見つつ、太郎は思った。

（毎回続くの、こんな任務？）

敵長距離対空ミサイル陣地急襲作戦 6（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

幕間

太郎達が駐屯地に向かうのとはほぼ同じ頃。
ここではないどこかで。

「彼」は、途方暮れたような表情でトラックに乗り込む太郎を見ていた。いや、「見る」という表現は適切ではない。「彼」が見たいと望んだ風景が、勝手に「彼」の頭の中に入ってくるのだ。

『またあの子を見ているの、あなたは？』

「彼」の頭の中に、唐突に女性の声が流れこんできた。その声はどこか呆れたような口調だった。

その女性は「彼」の「同僚」だった。今まで数回しか顔を合わせたことはないが、声音や性格を「彼」は完全に把握している。

「仕方ないだろう。あの少年は僕のせいで運命が狂ってしまったんだ。それも不幸な方向に」『だからって四六時中見ているの？もし彼が死にそうになっても、あなたは助けることすら出来ないのよ？』
「あの少年はすぐに死にはしないさ。そういう「運命」に変更されている」

誰もいない、どこまでも続く広い、時間の概念すらない空間の中で彼は独り言のように呟く。するとすぐに、女性の声が頭に流れ込んでくる。

『あの「門」を開いてよかったの？今もあの二つの世界では大戦が

続いているけど』

「仕方ないさ。「門」を開かなければ、二つの世界に待っていたねは破滅だけだった」

『その破滅を回避するために、何万何十万という人間を犠牲にしてもよかったの?』

「よくはない。だけど放っておいたら両方の世界が滅ぶ。君だってそうなるような事態は回避させるだろう」

本当は、「門」を通じた平和的な交流を望んでいたんだけどね。彼はそう呟いた。

「門」を開いたら二つの世界ね間で戦争が起きることは彼も予期していた。いや、高い確率で戦争が起きるだろうとわかっていた。

だが「門」を開かなければ、二つの世界は近いうちに滅ぶことも彼にはわかっていた。だから彼は二つの世界の人間の良心を信じ、「門」を開いたのだ。

「それよりそっちの仕事はいいのかい?君の方はちゃんとやれてるの?」

『心配されずとも、どこも繁栄してるわ。私はあなたが取った行動を、随分昔にやったもの』

生まれてから 自分に意識が芽生えた時を「彼」はそう規定している このかた、彼と仲間達はずっと仕事を続けてきた。時には望んでいない結果が起きても、「彼ら」はずっと世界のために働いてきた。

今回「門」を開いたのもその仕事の一部だ。だが「門」を開いたことによって多くの人間の運命が変わり、そして不幸になった。

その最たるものが、山田太郎あの少年だった。彼にはこれから不幸な事が続くだろう。元々不幸を呼び寄せるような体質だったために、運命

が変わったことによる多くの不幸が彼に襲い掛かる。

「いつか、ちゃんと謝罪と埋め合わせをしなきゃな……………」

「彼」は誰もいない空間のなか、一人呟いた。

幕間（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

山田太郎（18）のたそがれ（前書き）

登場人物紹介

十条 聡美 じゅうじょう さとみ

17歳

二等陸士

通信士。戦闘時には無線機で指令を受けたり、ノートパソコンを駆使して敵の情報を掴む。常に敬語。パソコンやネット関連に異常に強く、ノートパソコンは部品を組み上げて自作した。また暗号やパスワードの解析ソフトも自作している。

ある日自作のコンピューターウイルスを間違って部隊のネットワークにアップロードしてしまい、危うく逮捕されて刑務所行きになるところを、Bチームに放り込まれた。

山田太郎（18）のたそがれ

Bチームが対空陣地を急襲する任務を終えて一週間ほどが過ぎた、4月下旬の午前。

「『自衛隊、アザーズ軍の対空施設を制圧』……………うわ、記事ちつさ。たったの二行かよ」

そう呟くのは山田太郎（本名）。彼は今新聞を片手に、隊員がまばらな食堂にいた。

午前6時半に起床し、日課のランニングや筋トレといった体力錬成を終えた後に朝食を取ったBチームには、訓練や警戒監視といった任務は入っていないかった。つまり、今日は休日である。

休日は各部隊にかわるがわる与えられる。Bチームの所属する小隊が休みでも、他の部隊はいつも通りに訓練や任務をこなしている。

朝食の後やることが無くなった太郎は暇になり、食堂に来たのだ。食堂は普段、隊員達が集って雑談したりする集会所として開放されている。

食堂の端にあるラックから新聞を取ると適当な椅子に座り、太郎は新聞を読みはじめた。そして冒頭に戻るというわけだ。

新聞といっても、わざわざ危険な最前線に新聞を配達してくれる会社などない。なので東京にある防衛省でその日の様々な新聞をスキヤナーで取り込み、前線の基地や駐屯地にデータとして送り、基地や駐屯地の方で印刷して配布する、という方式を取っている。その

ため記事はコピー紙に印刷されている。

太郎はとりあえず、ホルダーでまとめられた新聞を一面から読んでいく。一面には政治や経済関連の重要そうな記事が並んでいる。自衛隊関連の記事は一面にはない。

「いや、対空陣地を破壊した事は戦況に大きく影響するだろ。一面に載せとけよ」

そうツツコミつつ、ページをめくる。

次の社会面には、日本の出生率が20年連続で上昇しているとあった。このままでは15年後に、日本の人口は1億3000万人を突破するらしい。

今の日本は人口増加が著しい。子供のいる家庭には給付金を与え、さらには保育園などの施設を充実させたことが出生率の増加に繋がった。だが政府は年々増加する子供に与えられる給付金の額が増加しているのに頭を痛めているらしく、給付金の額を減らすか国会で議論していると記事に書いてある。

ここでもようやく自衛隊関連の記事が出る。いつどこで戦闘があり、こちらの被害などが簡潔に、小さく隅っこに載っている。

それを見る度、太郎は日本人は今戦争が起きているのを忘れているのではないかと考えてしまう。戦争が始まった頃にはどの新聞も戦争関連のことばかり記事にしていたのに、たったの3年ですっかり元に戻り、戦争よりも政治家のスキャンダルを記事にばかりしている。

社説も時折思い出したように戦争を終わらせられないと自衛隊への批判が書かれるが、それだって滅多にないことだ。

続いて国際面を見る。国連が何度目かわからない停戦をアザースに呼び掛けたが、またもや無視されたのだという。意図的に無視しているのが、アザースは戦う気がまだまだあるようだ。

その他世界各国の情勢にも触れられていた。米軍が定員を大幅に増やしたり、ロシアの天然ガスのパイプラインがアザースに破壊されたとある。

異世界との門は世界各地に開いている。そしてそのせいで、世界中の国が戦争状態に突入しているのだ。

アメリカはアラスカに門が開いた。アラスカには石油資源が豊富にあり、そこを押さえられたら米軍の戦略は大きく転換せざるを得なくなる。幸いアメリカはロシアと向かい合う位置にあり、そのおかげで米軍基地がアラスカの各地にあった。米軍は優勢を保っているが、まだ門の向こうにアザースを追い返すことは出来ていない。

ロシアはウラル山脈を防衛線に、アザースのモスクワ侵攻を食い止めている。厳しい気候も味方して、アザース軍の侵攻は停滞気味だという。

ヨーロッパではEU各国が合同でEU軍を結成。駐留米軍の援助を受けつつアザースと激戦を繰り広げている。

アフリカではAUが一致団結して侵略に抵抗することを宣言した。アフリカ連合緒戦では敗退が続き、大陸の5分の一が占領された。だがアメリカを中心とした各国が最新鋭の兵器を給与し、戦況を覆すことに成功している。

南アメリカ各国はブラジルを中心としての抵抗が続いている。

アジアではASEAN加盟国が軍事協定を結ぶ事を決定。軍事力がアジア1、2を争う日本もこれに加わり、兵器の供与や派兵を行っている。

問題は中国だった。最大の貿易都市である上海を失い、経済が急速に悪化し物資不足も目立つようになった中国では共産党への信頼が失墜。アザーズ軍が北京に接近するにつれて共産党幹部が勝手に逃げ出す事例が続出。人民解放軍は連携した作戦行動を行うことが困難になった。

一方台湾には門は開いていなかった。台湾は共産党政府に代わり、国民党が正当な政府を立ち上げること宣言。指揮系統を失った人民解放軍の各部隊がこれに賛同し、国民党指揮のもと作戦を開始し、今の戦況は五分五分といったところだ。

経済面では、最近成長著しい防衛産業関連の特集をやっていた。もともと日本は武器の輸出が制限されていたせいで、防衛産業はとも弱小だった。兵器を作っても、日本で買ってくれるのは自衛隊くらいだったからだ。

だがアザーズとの戦争がそれを変えた。戦争で大量の武器弾薬兵器が必要となり、さらには外国に兵器を供与することもなった。防衛産業界は降って湧いた「異世界戦争特需」で潤った。

潤ったのは大企業だけではなかった。通常、大企業というのは下請けの中小企業と密接な関係にある。大企業で生産が増加すれば、下請け企業に回ってくる仕事も増加する。

今や三津菱^{みつし}、純友^{すみとも}、河先^{かわさき}、日達^{ひたち}といった従来からの防衛産業に参加していた企業は連日株が上昇中。下請けの企業も給料がよくなり、設備投資が増えているらしい。

（戦争さまさま、ってか・・・・・・・・・・？）

そう呆れつつ、新聞を閉じた。戦争で死ぬ自衛隊員達がいる一方、戦争で大儲けする連中がいる。太郎はその事を改めて実感し、虚しくなった。

そんな感傷に浸っていた太郎の頭を、誰かが思いつきりはたいた。

「・・・・・・・・ってえな！？なにすんだよ！？」

そう怒鳴りながら顔を上げると、そこにはBチームの面々がいた。未恵以外は全員揃っている。

太郎の頭をはたいたのは明子だった。

「何たそがれてんのさ、太郎？」

「たそがれちゃいないさ。ただ、社会の不条理に心を痛めていただけだよ」

「？熱でもあんの？」

せつかく格好つけて言ったのに軽くスルーされて、太郎は少しへこんだ。

とそこで太郎は未恵がいないことに気づく。

「あれ、未恵は？」

「次の作戦の概要を説明するって、第1、第2中隊の小隊長と分隊長は全員呼ばれたぜ」

「・・・・・・・・前の任務から、まだ一週間しか経ってない気がする

のは気のせいですか？」

「……………現実だ、諦めろ」「……………」

皆から一斉に言われ、さらにきが沈む太郎。

いくらBチームが懲罰部隊同然とはいえ、このままじゃ過労死するんじゃないか？いくら人手不足と言っても、隊員にはちゃんと休息を取らせないといかんだろ。

そんな事を思いつつ、太郎は話を続ける。

「で、お前らなんで勢揃いして食堂なんかいるんだ？」

「……大富豪」

そう言いつつ、ポケットからトランプを取り出す恒。Bチームの面々は椅子に座ってテーブルを囲む。

「山田さんはやらないんですか？」

「いや、俺は……………」

聡美にきかれ、躊躇する太郎。

実は太郎には、こういった勝負事での運がほとんどない。ババヌキをすれば高確率でジョーカーを引き、ウノをすれば順番を飛ばされまくる。七並べでは手持ちのカードを並べられず、自爆。

そんな太郎だから、勝負事には少し躊躇いが生まれてしまうのだ。

そこを、明子が馬鹿にするような口調で、

「あつれ〜？もしかして負けるのが怖いの〜？」

その言葉で、太郎は吹っ切れた。

「んだとゴルア！やってやらあ！！大貧民になってヒーヒー言わせたらあ！！」

ダン！と椅子に勢いよく座る。その様子を見て皆は苦笑し、いつも通りの恒がトランプを配っていく。

「あ、そうそう。大貧民は皆にジュース奢りね」
「上等だ！俺はコーラだかな！！」

そして数分後。

「ツイてない……………」

そう呟きながら、6人分のジュースを買っている太郎の姿が、売店^{PX}で目撃されたという……………。

一方その頃、体育館には第1、第2中隊の小隊長や分隊長が全員集合していた。窓は遮光カーテンが閉じられ、体育館内は薄暗い。未恵もパイプイスに腰掛け、静かに壇上を見ている。
体育館の中心にはプロジェクターが置かれ、壇上のスクリーンに画

像が映し出される。

壇上にはこの第58連隊の連隊長である原田^{はらだ} 誠一^{まこと}等陸佐が、指揮棒を片手に作戦概要を説明している。

「先日、敵の対空陣地が破壊されたことにより、こちらは航空支援を受けることが可能になった。それに伴い第19旅団が東進し、占領した対空陣地の西約20キロにある街を攻撃した。街に駐屯していた敵部隊はほとんどが撤退したが、いまだに一個中隊程度の部隊が潜んでいると言われている」

スクリーンに中国地方の地図が映し出され、目標の街が赤い円で囲まれる。そこに友軍を表す青い矢印が接近すると、敵を示す赤い矢印が西に向かって後退していく。

「第19旅団は戦闘による死傷者が出ており、また部隊の疲労も溜まっている。そのため先程、我々に増援要請がきた。出撃は明朝0600。急な話で悪いが第1、第2中隊には増援に向かってもらい、残敵の掃討を行ってもらおう」

いきなりの話で、隊長達が顔を見合わせてヒソヒソと言葉を交わす。しかし嫌がるような顔をする者はいない。後で隊員達に詳細を報告するため、メモを取り始める者も多い。

原田が説明を終え、続いて質問の時間に移る。あちこちで手が上がり、一人が指された。

「今回の移動方法は？」

「陸路で向かう。LAVやWAPCを使用する」

「近接航空支援は受けられますか？」

「アパッチ戦闘ヘリが一個飛行隊、常に待機している。さらには迫撃砲中隊も待機している。必要に応じて適宜支援を要請しろ」

その後もいくつか質問が続き、すべての質問に原田が答えた。隊長達の不安を解消したところで、打ち合わせは終了となった。

未恵はパイプ椅子から立ち上がり、隊舎に戻りつつ溜め息を吐いた。

（わたしたち、働きすぎじゃない・・・・・・・・・・？）

山田太郎（18）のたそがれ（後書き）

御意見、御感想お待ちします。

掃討作戦 1（前書き）

作戦内容

市街地に立て籠もるアザース軍の残党約200名を掃討せよ。

掃討作戦 1

4月25日 10:00

鳥取県 あかさた 赤早太市郊外

数十、数百の車両から発せられるエンジン音が空気を震わせ、上空をヘリコプターの編隊が爆音と共にフライパスしていく。

ここには赤早太市を占領していたアザース軍を攻撃する為の部隊が集結していた。一週間前にBチームが対空陣地を無力化し、続いて第58普通科連隊が制圧したことにより、自衛隊側は今までにないほどの攻勢に出ていた。

今までは長距離対空ミサイルのせいでもく航空支援も受けられず、ヘリボーン作戦（ヘリコプターで兵員を一気に送り込み、制圧する作戦）も行えなかった。なのでBチームが（期待されていなかったとはいえ）対空陣地を無力化したことにより、今までの恨みを晴らすかのように自衛隊はアザース軍に攻撃を仕掛けている。

ここ赤早太市にも、一週間前までアザース軍の大部隊が駐屯していた。自衛隊は機甲部隊を中心とした地上軍とヘリ部隊を同時に送り込み、さらには航空自衛隊の支援も得て赤早太市奪還作戦を発動した。

三日三晩続いた激戦により、双方に多大な被害が出た。郊外ではE MWと機甲部隊による地上戦が展開され、上空では戦闘機と空戦型E MWのドッグファイトが繰り広げられた。

最終的に、自衛隊が戦闘に勝利した。空爆と砲撃で街から追い出さ

れたアザーズ軍は、後方の友軍部隊に合流すべく西へと後退を開始した。

だがアザーズ軍の全てが街から撤退したわけではない。撤退命令が行き届いていなかったのか、はたまた命令を拒否して一矢報いるためなのか、1個中隊約200のアザーズ兵が未だに街に立て籠もっている。

いくら投降勧告を出しても、アザーズ兵は一人として街から出て来なかった。自衛隊にはアザーズ兵達が投降してくるのをいつまでも待つ暇はなく、即座にアザーズ軍残党の掃討作戦が開始された。

「うわゝ、見事なまでにボロボロですな」

軽装甲機動車の屋根に取り付けられた機関銃を構えた山田太郎（本名）は、街の惨状を見て素直にそう呟いた。

街に立て籠もるアザーズ兵の掃討作戦には、Bチームの所属する第1中隊も駆り出されている。任務を終えたばかりのBチームも当然出動し、そして今まさに制圧作戦が開始されたばかりだった。

（・・・にしても、相変わらずツイてないよな、俺・・・）

太郎は自分のいる位置を見て、この日何度目かわからない溜息を吐いた。

今、第1中隊第1小隊は十台近い車両で移動している。Bチームの乗る2台のLAVは、車列の一番前を走っていた。

仕掛け爆弾や地雷、さらにはロケット弾攻撃や狙撃を受けた場合、真っ先に攻撃を受ける位置だ。この小隊の皆はBチームに同情的な

ので悪意ある配置とは言えないのだが、それでも太郎は自分の運の無さを嘆くしかない。

そして太郎は車列の一番前を走るLAVにのり、更に機銃手を命じられていた。いくら周囲を防盾で囲まれているとはいえ、どこから銃弾が飛んでくるかわからない状況で身を曝し続けるのは、精神的にキツイ。

太郎は不幸を嘆きつつも、きちんと周囲の警戒をする。油断して死ぬ、それだけは避けたいと太郎は思う。

まだ18歳、まだまだやりたい事が一杯ある太郎には、自殺願望など何もない。

街に近づいていくにつれ、激しい戦いの跡が見えてきた。

爆発で胴体を真っ二つにされ、地面に転がる陸戦型EMW。そして黒焦げになって擱座する10式戦車。

住宅街は砲爆撃でほとんどの家屋が倒壊していた。そして残っていた住宅を押し潰しているのは、撃墜されたらしい戦闘ヘリの残骸だ。他にもあちこちで兵器の残骸が機密保持のため爆破処分されていたり、修理のために牽引されていた。道の脇に墜落していたF-15戦闘機の残骸を横目で眺めつつ、自分達もこの残骸の仲間入りしなければいいが、と太郎は思った。

住宅街を抜けると、いよいよ市街地に入る。

だがいよいよ市街地に入るという時、大きな爆発音が辺りに響いた。小隊長は即座に小隊に停止を命じる。

見れば市街地の中心でもうもつと土煙が立ち昇っていた。どうやら

爆発が起きて建物が倒壊したらしく、土煙が煙幕のように立ちこめていた。すぐに小隊に司令部から命令が下った。爆発が起きた市街地の大通りへ向かい、そこで待機している部隊と合流せよ、この事だった。

第1小隊の隊員達は車両の屋根にマウントされた銃火器をそれぞれ別の方向に構え、襲撃にそなえる。第1小隊の他にも様々な部隊が、街を包囲するようにじりじりと進んでいる。

戦闘に勝利した自衛隊だが、市街地の全ての建物を調べたわけではない。砲爆撃で多くの建物が倒壊しているとは言え、アザーズ兵達にとつてまだまだ隠れる場所はいくらでもある。

だからこそ自衛隊は多くの部隊を投入して、地下鉄構内から下水道に至るまで、残敵を徹底的に搜索するのだ。

『スクール01Aより全車、警戒を厳にせよ』
アルファ

車列の中心を走る96式装輪装甲車に搭乗する、小隊長の榎田 明ごんだ あ
夫三等陸尉きあの声が無線機から流れる。太郎は顔を引き締め、道路の両脇に建ち並ぶ建物に注意の目を光らせる。

ちなみにスクールというのは派遣されてきた第1中隊の符号だ。コードネーム01は第1小隊、Aは分隊を示している。

何故スクールかという点、第58普通科連隊は学生だった召集兵を中心とした部隊だからだ。大人よりも子供の数が多く、第1小隊に至つては総員40名弱のうち、30人以上が未成年である。残った10人程も殆どが20代。経験豊かな30歳以上の陸曹は3人しない。

『にしてもよ、これならまだエイリアンとか未知の宇宙生物の方がマシだな。知恵が無いなら向こうから突撃してきてくれるから、わざわざ市街地での掃討作戦なんかせずに済む』

『そうねって言いたいところだけど、今は作戦中古賀一士。私語は慎んで』

『へいへい』

2号車のLAVの機銃手の孝俊の愚痴を末恵が注意する。

実際、市街戦というのはかなり厄介である。立て籠もる側からしてみれば隠れる場所はいくらでもある。掃討する側はいつゲリラ攻撃を受けるかわからない状況で、大部隊を出して隠れていそうな場所を一つ一つ制圧していかなければならない。

銃弾や砲弾の破片で穴だらけになった雑居ビルの脇を通り過ぎると、車列は大通りに出た。立ち上っていた土煙はようやくおさまり、大通りには第19旅団の89式装甲戦闘車や73式装甲車とともに普通科隊員があちこちに立ち、襲撃に備えて警戒している。

見ると、大通りを大きな灰色の壁が塞いでいる。何かと思って太郎が目を凝らすと、壁の表面にはいくつもガラス窓がある。

そこで太郎はようやく、倒壊したビルが大通りを塞いでいるのだとわかった。綺麗に形を保ったまま根本から横に倒れたビルは、壁のように大通りを分断している。FVなどの装軌車は装輪車と違って瓦礫の山などを軽々と乗り越えることができる。しかしビルは原形を保ったまま大通りを塞いで垂直な壁を作っているので、ここを通ることは出来ないようだ。

FVで砲撃したり爆薬で破壊しようとしたのか、ビルの表面はいくつも穴が開いたり崩れたりしていた。だが通れるのは精々人間一人くらいで、車両が通り抜けるのは不可能だ。

「根っこですよこれ全部！」

「お前は松岡修造かよ」

倒壊したビルの根本を見てそう言った洋二に、冷静に太郎はツツコんだ。

小隊長の権田は車列に停止を命じた。自らも搭乗していたWAPCから下り、大通りに展開している部隊の隊長に会いに行く。

護衛にA分隊の隊員を数名連れ、足早に指揮官らしき男のもとに向かう。

「第58普通科連隊から派遣されてきた権田です！そちらは？」

「第19旅団第2中隊第3小隊の小隊長、原口三等陸尉（はぐろぐち）です！呼び出し符号はフォックス03です」

互いに敬礼し、それから力強く握手権田と原口。どちらも20代半ばで若々しい。二人は何となく、お互いに仲良くなれそうだと感じた。

原口によると03小隊は大通りの搜索を命じられていたのだが、部隊が前進している最中突如ビルで爆発が起こり、進路を塞がれてしまったのだという。司令部に指示を仰いだところ、後から来る01小隊と合流せよとの事だった。なので隊員を下車させ、01小隊の到着を待っていたのだ。

「おそらくアザーズ兵のゲリラ攻撃でしょう。我々を狙ったのかただ単に進攻を遅らせたかったのかはわかりませんが、ビルをあんな状態で倒壊させるなんてよく訓練されている」

志村は倒壊したビルを見てそう呟いた。

これは厄介なことになったな、と権田は思った。ビルを倒壊させたのが時限爆弾でもない限り、アザーズ兵は03小隊が大通りを通るのを見計らって爆破したことになる。つまり、まだ近くに敵がいる

可能性が高い。

01小隊と03小隊に下ってきた司令部からの命令は、「周辺一帯の搜索を行え」というものだった。車両が通行可能な大通りはビルで塞がれて移動出来ないの、ここからは徒歩で行動することとなる。

LAVのドアやWAPCの後部ランプから隊員達が下車し、下りた瞬間にいつもの癖で銃を構え、周囲の警戒をする。だが先んじて到着していた03小隊が大通りを制圧していたので、その動作は無駄となる。

2つの小隊はとりあえず建ち並ぶビルの中の細道を抜け、裏通りの制圧を行う事となった。フォックス03は大通りの左側、スクール

01は右側の裏通りに向かう。

アルファブラボ

チャーリザルタ

エコー

「A、B分隊、前に立て。C、Dはその後ろ。Eは最後尾だ」

権田の指示に従い、素早く隊列を組むスクール小隊。

現在の陸上自衛隊では、8名で1個分隊を組み、分隊が5個集まって1個小隊を構成している。内訳はBチームのような小銃分隊が4個。残りの1個分隊はM240軽機関銃を装備する機関銃班、無反動砲もしくは対戦車ミサイルを装備する対戦車班、そして二人一組で行動するM24対人狙撃銃やM90対物狙撃銃を装備する狙撃班などで構成される武器分隊だ。

ビルの脇道は狭く、車一台通り抜ける隙間もない。高いところから襲撃されるのを防ぐため、銃口を上に向けて一列になって進んでいく。

脇道を出ると裏通りに出た。大通りとは違い、雑居ビルやアパートなどが雑然と並んでいる。戦闘のせいで倒壊している家屋がいくつもあったが、多くの建物は健在だ。

「小隊止まれ。分隊長は集合しろ」

権田の命令で小隊が止まり、未恵は権田のもとへ向かった。その間隊員達は待機の姿勢を取り襲撃を警戒する。

権田は集まった分隊長達に、各隊が搜索する家屋を指示した。分隊ごとに別れて周辺一帯の家屋を搜索し、アザーズ兵が隠れていないか調べる。

Bチームが搜索することになったのは、学習塾が入っていたらしい雑居ビルだった。「らしい」というのは、表に掛かっていた看板が、爆発か何かのせいで吹っ飛んでいたからだった。

権田の指示を受けた未恵はBチームのもとに戻り、早速搜索対象を伝える。

「いい？わたし達が調べるのはあそこにある雑居ビルとその周辺よ」「まずはどこから調べるんですか？」

「デカイビルから調べましょう。ビルの搜索が終わったら、次は隣のアパートを」

聡美の質問に答えた未恵は、それ以外質問がないことを確認するとBチームに前進を命じた。他の分隊もそれぞれ割り当てられた建物に向かっていく。

武器分隊であるE分隊は、このまま裏通りで待機する。軽機関銃の射手が戦闘で炎上して黒焦げになった乗用車のボンネットにM240の二脚を載せ、いつでも撃てる体勢をとり、給弾と弾薬の運搬を受け持つ隊員が89式小銃を構える。

狙撃班は制圧が終わった手近な雑居ビルの屋上に上がり、周囲を警戒する。狙撃手の兵藤二曹はM24の二脚を立てていつでも狙撃出来る体勢をとり、観測手の志村二曹は単眼鏡を三脚に載せ、視野が狭い狙撃手に代わって敵兵がいないか周囲を見回す。

対戦車班はとりあえず、機関銃班と共に周囲の警戒にあたる。

Bチームは指示された雑居ビルに到着した。入口の自動ドアのガラスは粉々に割れ、2年間無人だったせいで中は雨ざらしだ。

「太郎、先頭に立って」

「・・・何度目になるかわからんが、ツイてない・・・・・・・・」

未恵の命令に溜息混じりで応じつつ、太郎は89式小銃を肩に掛け、代わりに今まで背負っていたM870 MCSショットガンを構えた。フォアエンドを引いてシエルを薬室に装填する。ドア破壊用や近接戦闘用として自衛隊が新しく採用した散弾銃だ。

機関部上のマウントレールに取り付けられたC-MORE社製のドットサイトが作動していることを確かめると、太郎は先頭に立ってビルに入っていく。後ろを孝俊、夏男の順に続き、通信士の聡美が最後尾を固める。

ビルは戦闘で損傷しているらしく、どこからか水が滴る音が響く。ところどころにある窓から太陽光が差し込んでいるが、ビルの中は暗い。とつくの昔にこの辺り一帯は停電しているので、照明が点灯していないのだ。

一階には部屋がいくつかある。ドアは全て開けっ放しで、アザース兵は潜んでいなかった。事務机がいくつも並んでいたことから、ここは事務室だったらしい。

一つだけある階段を上がり2階へ向かう。物陰や角には敵兵が潜んでいるかもしれない、先頭に立つ太郎は角を曲がる度に内心ビビりながら前進する。

あまり光が差し込んでこないせいで2階はかび臭かった。廊下の両脇には教室が並んでいる。

まずは扉が開けっ放しだった教室から搜索する。誰もいない教室は埃が舞い上がっていた。やや乱れた状態で教室に並べられた机の上には、筆箱やシャープペン、湿気でヨレヨレになったノートや教科書が置いてある。

この辺りは早期にアザース軍の攻撃を受けていた。開戦時にここにいた塾生達は慌てて逃げ出し、それからずっと戻ることはなかったのだろう。塾生達がその後どうなったのか、Bチームに知る術はない。

4つある教室の内、一部屋だけドアが閉まり鍵が掛かっていた。孝俊がハンドシグナルで「鍵が掛かっている」と知らせると、周囲に緊張が走る。ドアは金属と合板で出来ており、蹴り破るのは難しそうだ。

ドア越しに銃撃された場合被弾しないよう、太郎と孝俊がドアの両脇に並び突入に備える。ドアは蝶番で開くタイプで、ドアに窓はなく教室内部の様子を伺うことは出来ない。

未恵は即座に決断した。

「突入して」

太郎は頷くと、手にしたM870MCSを構えた。銃口をドアの蝶番に向け、引き金を引く。

轟音と共にスラッグ弾が発射され、上の蝶番が吹っ飛んだ。素早くポンプアクションして空のシェルを排出し、続いて下の蝶番も破壊する。

上下両方の蝶番を破壊されたドアはただの板と化した。トドメとばかりに太郎が思いっきり蹴ると、勢いよくドアは教室内へと倒れる。

太郎と孝俊はドアが破壊されるとすぐさま教室に飛び込んだ。視線と一体化させた銃口を上下左右に振り、そして教室内に敵兵がいな
いことを確認する。

「クリア!!」

孝俊が言うと、ほっとした雰囲気はBチームを包んだ。
この雑居ビルにアザース兵は潜んでいなかった。そのことを確認すると、Bチームはすぐに次の搜索対象の建物に向かった。

掃討作戦 1（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

掃討作戦 2

作戦開始から2時間が経過した、12:15。

すでに第1小隊は150軒近い建物を搜索し終えていた。ドアが開いていなければ蹴破り、ショットガンで破壊し、しまいには爆薬をセットして倒壊すらさせていたが、一向にアザース兵達を発見出来なかった。4000名を超える自衛隊員が市内の制圧に投入されていたが、いまだにどの部隊も敵と遭遇していない。

Bチームはこの日17軒目の建物の搜索を行っていた。搜索対象は2階建てのごく一般的な民家。2年以上放置された庭は草が荒れ放題、小さな駐車場に停められていた乗用車は爆発の衝撃で窓ガラスが粉々になっていた。

「突入！」

末恵の命令で、一斉に隊員達が民家に突入する。玄関や勝手口から二手に別れて、アザース兵が逃げ出せないように恒と聡美が外で待機している。

玄関から突入した太郎は、M870MCSショットガンを構えつつ民家の中に乗り込んで行った。戦闘靴^{土足}で家に上がり込んでいるが、家主はとつくの昔にここを引き払っているので問題ない。

居間や風呂場、洗面所等を次々と調べていく。家のあちこちで「クリア！」の音が響く。

「結局、ここもシロね」

未恵は地図に描かれている民家にバツ印をつけつつ、疲れたように溜息を吐いた。

「いるならさつさと出て来て欲しいよな。そうなりやこつちから探す手間が省ける」

そう言いつつ、洋二が89式小銃の銃口で居間に敷かれた布団をめくる。その横では夏男と明子が畳を引つpegし、下に敵がいなかったかを確かめていた。

2階から太郎と孝俊が下りてきた。二人は2階の子供部屋などの捜索を任されていた。むろん、誰もいない。

「敵は？」

「いないぜ。クローゼットからベッドの下まで探したけど、いたのはネズミだけだった」

「そう。ならいつまでもここにいても無駄ね」

未恵は皆に家から出るよう命じ、自分も居間から出て行こうとしたふと床に視線を落とすと、そこにはアルバムやそこから飛び出た写真が散らばっていた。何の気無しにしゃがみ、落ちていたアルバムを拾う。

アルバムは保存状態が悪かったため何枚もダメになっていた。ページをめくる度に、くつついていた写真と写真が剥がれる音がある。アルバムには家族写真のようなものが挟まっていた。色あせてはいたが、幸せそうに笑顔を見せている女の子の姿が写っている。

「どうかしたか、未恵？」

孝俊がその声をかけると、未恵は、

「いえ………、なんでもないわ」

そう言つてアルバムを閉じ、居間にあつた棚に戻しておく。

アザーズはこんな幸せな日常を奪つたのだ。ありきたりなささいな幸せさえ、2年以上前にアザーズが進攻してきては無くなつてしまつた。

（だからこそ、わたし達はアザーズを門の向こうに追い返して、皆の幸せを取り戻すんだ………!!）

未恵は誰にも悟られないよう、そう固く決心した。

住宅街を制圧したのち、第1小隊は赤早汰駅のある北側へと向かう。途中、自衛隊による砲爆撃で多くの建物が倒壊していたので、それらを搜索する手間が省けた。

A分隊とBチームは部隊の先頭に立ち、シャッターが閉まつたままの商店街を進んでいく。この辺りは戦闘による被害が最も多く、撃墜された空戦型EMWの残骸がビルに突き刺さっていたりとシュールな光景が広がっている。

例によつて太郎とA分隊の少年隊員が先頭に立ち、二列になつて商店街の狭い路地を進んでいく。その商店街の狭い道は残骸などでさらに狭くなつていた。

商店街の建物のほとんどは爆撃や戦闘によつて倒壊していた。なの

でこのあたりの搜索はフォックス03小隊に任せ、第1小隊は赤早汰駅の制圧に向かう。

「こんな中途半端に建物残しておくくらいなら、さっさと爆撃で更地にすればいいのに。そうすりゃ復興する時にも楽でしょ」

「アホか明子。この街をまるごと更地に変えるにはどんだけ爆弾が必要だと思ってるんだ？核ミサイルでもなきゃ無理だ。しかも、放射能汚染のオマケつき」

緊張を紛らわせるためなのか、洋二と明子が小声で言葉を交わす。だがその視線はしっかり銃口の向きと一体化しており、周囲わずかな異変も見逃さない構えだ。

太郎も89式小銃をしっかりと握りしめ、緊張しながら進んで行く。交差点を曲がる度にアザーズ兵が飛び出してきて銃を乱射してこないか、物陰からこちらを伺って攻撃するチャンスを狙っているのではないかと、いやな想像ばかりが頭を満たしていた。

皆瓦礫が崩れるわずかな音にも神経を尖らせていた。いくら戦場に何度も出ているとはいえ、油断は命取り。皆若いので、誰も死にたくはないからだ。

だが攻撃を一度も受けることなく、第1小隊は市街地の中心へと近づきつつあった。市街地の中心にそびえる赤早汰駅の駅ビルが、自衛隊が最後に搜索する建物となる。

駅ビルは10階建てで、第1小隊のいる場所からもよく見える。無論数日前の戦闘で駅ビルも被害を受け、壁の所々に大穴が空いていた。

第1小隊はいよいよ商店街を抜けるところだった。小隊長の権田は、「もしかしたら敵はもういないのではないか」とすら思ってしまうほど、何事もなく小隊は前進していた。

上空は絶えず陸自のOH-1観測ヘリが飛び回っていて、そのさらに上空では無人偵察機が電子の目で赤早汰市を見下ろしている。どちらにも建物の壁くらいなら透化するFLIR前方赤外線暗視装置を備えていて、仮にアザーズ兵がビルに立て籠もっていても簡単に発見できるはずだ。なのに一向にその知らせが来ないということは、既にその搜索対象が市内から脱出しているからでは。

そこまで考えて、権田はいかにかんと頭を振った。

油断大敵、注意一秒怪我一生、そんな言葉で雑念を追いつぶす。部下に注意を喚起しようと携帯無線機に手をかけた時だった。

小隊の最前列を進むA分隊の隊員が、突如頭から血を流して倒れた。

太郎は道路の左側を警戒しながら進んでいたとき、空気を切る音と共にゴツと何かが硬いものに当たる音を聞いた。その音がした方、つまり道路の右側を見ると、一緒に先頭を進んでいたA分隊の隊員が地面に俯せに倒れているのが見えた。

その時太郎は場違いなことに、何か石にでもつまづいたのかなと考えた。だが、それは倒れた隊員の被っていた鉄帽ヘルメットの後部に、大きな穴が空いているのを見るまでだった。

一秒ほど後、ターンと間延びした銃声が遠くから響いてきた。この作戦始まって以来初めて鳴った銃声に、未恵は何が起きたのかを瞬時に理解した。

「スナイパーッ!!」

いち早く事態に気づいた未恵がそう叫び、わけがわからずぼけっと突っ立っていた太郎の肩を掴む。他の隊員達が小さな悲鳴を上げて手近な物陰に飛び込むなか、太郎は自分の目の前を空気を切る音と共に何か熱いものが高速で横切っていくのを感じた。

未恵と共に爆撃で崩壊した民家の陰に隠れた時、ようやく太郎は何が起きたのかわかった。

狙撃されたのだ。

「大原、大原ア ツ!!」

A分隊の少年隊員が、叫びながら斃れた仲間ところに駆け寄ろうとする。そして同じ分隊の仲間が、彼を物陰から出さないよう必死に抑えていた。

「被害報告！急げ!!」

権田が怒鳴り、各分隊が次々と被害を報告する。今のところ負傷者はおらず、死者は今狙撃された一人だけだった。

「オオトリ、オオトリ、こちらスクール01、スクール01。攻撃を受けた！繰り返す、攻撃を受けた！作戦行動中死亡KIA1名、大原二士！オクレ!!」

権田は道端に放置されていた乗用車に隠れつつ、無線で司令部を呼び出す。オオトリというのは司令部の呼び出し符号だ。コードネーム

『スクール01、スクール01、こちらオオトリ。どんな攻撃か？敵の位置はわかるか？オクレ』

「狙撃だ！敵の位置は不明！航空支援を要請する、オクレ！」

『オオトリ了解。現在アパッチが2機向かっている、到着をまで。オワリ』

「了解、オワリ！」

権田はそう言つて通信を終えた。

その頃、太郎と未恵、そしてBチームは家屋の瓦礫の陰に隠れ、ひたすらアパッチが到着するのを待っていた。ネズミのように身を縮め、瓦礫から身を乗り出さないように気をつける。

「今の狙撃手、少し焦ってるわね」

「なんでだ？」

「松本くん、太郎に説明してあげて」

未恵がそういうと、いつもは口数が少ない恒が話しはじめた。

「……スナイパーの任務は敵の脅威となる人物、例えば指揮官、無線手、機関銃手などを排除して敵の戦闘能力を下げることだ。そして他にも敵を狙撃して、その進攻を阻止する。ベトナム戦争じゃたった米軍のたった二人の狙撃チームが、数千名の北ベトナム軍の進行を遅らせた」

どこから銃弾が飛んでくるかわからない状況では、必然的に移動には慎重になる。いや、敵の狙撃を恐れて後退することもあるだろう。つまり、狙撃手は一人で数百人と渡り合う戦力にもなりえるのだ。

「だが、それが何で、今の奴が慎重じゃないって話になる？」

「・・・狙撃手はまず一人を負傷させて、負傷者を救助しようとした兵士も撃つ。そうやってどんどん被害を拡大させるのに、今の奴は一撃で頭を撃ち抜いた。たまたま当たったのかもしれないが、同じ場所から第二射を放つなんて無用心過ぎる。太郎、お前殺されかけたろ？」

狙撃手は発砲炎や銃声で、どこにいいのか突き止められる恐れがある。まず一人を殺して部隊の動きを止めたのに、第二射を放つてもう一人殺そうとするのは、自分の発見される確率を上げるようなものだ。冷静な狙撃手なら、一発撃つたらずぐ移動する　というのが恒が武に語ったことだった。

さすが恒、分隊選抜射手のことだけある。太郎はそう内心想った。分隊選抜射手というのは、狙撃手と小銃手の中間の存在だ。分隊に最低一名はおり、正確な狙撃で部隊を援護するのが任務だ。

更に訓練を積みれば本格的な狙撃手になることが出来る。なので恒は狙撃に関しての知識を深いところまで吸収しているのだ。

「で、これからどうするんです？わたし達身動き取れませんよ？」

「大丈夫よ十条さん。すぐにアパッチが建物ごと狙撃手、を・・・」

末恵が最後まで言う前に、何かが空気を切る音が周囲に響いた。皆が怪訝な表情を浮かべ、思わず空を見上げる。

直後、ひゅるるとフルートを吹くような音と共に、Bチームがいる場所から10数メートル離れた場所で爆発が起きた。

爆発で放置されていた乗用車が爆発し、金属片や土埃が周囲に飛び散る。再び空気を切る音がして、爆発炎上する乗用車の周囲で爆発が起こった。

「迫撃砲だーッー!!」

そう誰かが叫び、再び爆発。迫撃弾が着弾し、周囲に破片を撒き散らす。

最初の狙いは大雑把で、着弾地点は小隊からかなり離れていた。だがアザーズ兵達は着弾地点を見て撃ちながら狙いを調整しているらしく、徐々に迫撃弾の調整地点は住宅に隠れている第1小隊に近づいていく。

「小隊長、指示を!!」

未恵が爆発音に負けずに大声で叫び、すぐさま権田は命令を下す。

「ここにいてはまずい! 煙幕を張りながら前進だ!!」

その言葉で各分隊は即座に動いた。各々発煙手榴弾を前方に投擲し、擲弾手はグレネードランチャーからスモーク弾を連発する。

道路のあちこちに転がった発煙弾から煙が吹き出し、砲撃でボロボロになりつつある商店街を白煙が包み込んでいく。充分に煙幕が展開されたと判断した権田は、分隊ごとに前進するように命じた。同時に自らも隠れていた乗用車の陰から飛び出す。直後、権田が今まで隠れていた乗用車に迫撃弾が着弾し、爆発で破片を撒き散らした。砲撃であちこちで爆発が起きている中、敵へ向かって前進するのは正気の沙汰ではない。だがいつまでも隠れていたらいつかは砲撃でやられる。権田はそう判断し、小隊に前進命令を出したのだ。

一方Bチームも、隠れていた家屋の残骸から飛び出し、赤早汰駅向けて駆けていく。飛び出すタイミングが遅れてしまった太郎は、Bチームの最後尾を走っていた。

道路のあちこちで迫撃弾による爆発が起き、アスファルトやコンク

リートの破片が撒き散らされる。

あちこちで、至近距離で起きる爆発をかくくぐるように走る太郎は、思わず叫んでいた。

「クレイジーだ！クレイジーだよクソッタレッ！」

絶叫しつつ半ばヤケクソに走り、ひたすら煙幕の中を進んでいく。濃密な煙幕の中では、前を走る夏男の背中しか見えない。

一番前を走る洋二は、爆発でテンションが上がっていた。普通なら気が狂ったのかと思われるところだが、彼は爆発マニアなのでテンションが上がるのは仕方がない。場違いに笑顔を見せつつ、ひらひらと動いて爆発から逃れながら走る。

「ヒヤッハーツ！戦場は地獄だぜ、フウハハア　　ッ！」

後ろの方から、「どこのフルメタルジャケットだよッ！？」とツツコミが入ったが、洋二は一切気にせず走る。

アホな洋二に代わって一番前を走るようになった末恵は、前方の十字路の先に頑丈そうなコンクリートで出来たビルを見つけた。あそこなら中に入れば砲撃で負傷せずにすむ。迫撃砲弾は主に人間を殺傷する兵器であり、頑丈な建物を破壊するほどの威力はない。

「皆！あそこのビルに入って！！」

末恵の言葉で皆が走る方向を変え、十字路を渡ってビルに入っていく。最後尾の太郎が十字路を渡りきった直後、背後で迫撃弾が爆発した。

爆風に押されるようにして、太郎はビルに滑り込んだ。アザース兵

達はなおも砲撃を続け、ビルの入口付近が破片でスタボロになってきたので慌てて太郎は奥へと向かった。

ビルに逃げ込んだのはBチームと、仲間とはぐれたE分隊の機関銃班2名だけだった。どうやら他の分隊は砲撃で分断され、分隊ごとに手近な建物に逃げ込んだらしい。このビルは証券会社が入っていたらしく、ロビーには観葉植物やベンチ、そしてパンフレットが並べられた棚が置いてある。

とりあえず今ここにいる最上級者は未恵なので、未恵は皆の状態を確かめた。幸い負傷者はおらず、その旨を権田に無線で報告する。権田によると、今の砲撃で3人が戦死したという。最初に狙撃されたのも含め、合計4人が戦死したことになる。

『各隊、現在いる場所から動くな。今アパッチがこちらに向かってる。アパッチが敵の狙撃兵と迫撃砲を潰したら再び集合する。オワリ』

通信を終えた未恵は、その場に座り込んだ。

狙撃され、砲撃の中を駆け抜け、今生きているのが不思議なくらいだった。もしかしたら自分も負傷、いや戦死していたかもしれず、未恵は改めてその事を考えてぞっとした。

「ん？太郎、ちょっと動くなよ」

ビルのロビーのソファーに腰掛けていた太郎は、突然洋二にそう言われた。言われた通り動かないでいると、洋二は背後に回って太郎の着ている防弾チョッキから何かを引き抜いた。

「……太郎、お前防弾チョッキ着てて良かったな」

洋二はそう言つて、引き抜いた物を床に放った。金属音を立てて太郎の前に転がったそれは、まるでナイフのような鋭い形をした、長さ５センチほどの金属片だった。迫撃砲弾の破片が防弾チョッキに突き刺さっていたのだ。

太郎はそれをつまみ上げ、「うわあ・・・」と呟きつつ眺めた。金属片の先端は防弾チョッキ内に挿入された抗弾プレートにぶつかつたせいでひしゃげている。

「・・・ツイてたわ、俺」

この破片が刺さっていたら、確実に死んでいた。太郎は自分が結構ヤバい状況だったことに、今更ながら気づいた。

普段は防弾チョッキは重いだの何だのと不評ではあるが、こういう時だけはありがたさを感じる。やはり防弾チョッキは、ないよりはあつた方がいい。

既に砲撃は止んでいた。長い間砲撃をしていると自分達の位置がばれるので、今頃は大慌てで迫撃砲を片付けている頃だろう。だが狙撃手がどこにいるのかわからないので、まだ建物から外に出ることは出来ない。

遠くからヘリのローター音が近づいてくる。権田が要請したアパッチ攻撃ヘリコプターが近づきつつあるのだ。

さつさと終わらせてくれ。太郎はそうアパッチのパイロットに願った。

掃討作戦 2（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

掃討作戦 3

その頃、地上部隊から近接航空支援の要請を受けた2機のAH-64D「アパッチ」戦闘ヘリコプターは、赤沙太市の上空を飛行していた。

「ハニービー01よりハニービー02、もうすぐ目標地点に到達する。気をつける」

「02了解」

アパッチの前部ガンナー席に座る稲田^{いなだ} 徹^{とあ}三等陸尉は、僚機の通信にそう答えた。

陸上自衛隊第一ヘリコプター団に所属する稲田達の編隊は、ここ3ヶ月間鳥取戦線に派遣されていた。ちなみに蜜蜂^{ハニービー}というのは、彼らの編隊名である。

だが蜜蜂というかわいい編隊名とは裏腹に、アパッチの武装は強力だ。機首にマウントされた射手の視線と連動して目標を照準できる30mmチェーングンを始めとして、胴体の補助翼^{スタブウイング}には対人・対軟目標用の70mmロケット弾を納めたロケット弾ポッドと、一撃で戦車も破壊可能なヘルファイア対戦車ミサイルが8発ぶら下がっている。

さらに対空目標用のステインガー空対空ミサイルも4発装備しているその様は、蜜蜂というよりスズメバチと言った方が正しい。

「あと1分で目標上空に到達するわ。稲田、火器管制はちゃんとできてる？」

ICS
そう機内通話装置越しに放しかけてきたのは、後席に座るパイロットの柿崎^{かきざき} 雅美^{まみ}だ。階級は徹と同じ三等陸尉である。

「大丈夫だ、問題ない。いつも通り元気な機体だよ」
『そう。じゃあいつも通り、さつさと終わらせましょう』

雅美はそう言つて、アパッチの飛行速度を上げた。ローター音とエンジン音が大きくなり、徹は慣性で座席に身体が押し付けられるのを感じた。

今回ハニービー編隊に与えられた任務は、敵の狙撃兵^{アサース}および迫撃砲の破壊だった。どうやら砲撃で味方かなりの被害が出ているらしく、さつさと片付けなければならない。

狙撃兵はもつと厄介だ。野戦でなら狙撃兵のだいたいの位置を割り出したのちに砲撃や空爆でエリアごと排除するのだが、障害物の多い市街地ではそれらの攻撃は効力を発揮しない。隠れている狙撃兵を排除するには歩兵を多数繰り出して一つ一つ家屋を調べていくか、ヘリのような低速で低空を飛行できる機体を使うしかないのだ。

「02よりオオトリ、敵の位置を味方は把握しているのか？」

『狙撃兵の位置は特定出来ていないらしいが、迫撃砲の位置はOH-1が捕捉した。これより座標を送る』

オオトリ 司令部の呼び出し符号だ がそう言うと、目の前にコンソールに取り付けられている多機能ディスプレイに映っている地図に、敵の迫撃砲を示す記号が追加された。距離は1000メートルもない。

『02、お前達は迫撃砲の排除に向かえ。我々は狙撃兵の搜索を続ける』

『02了解。編隊を解きます』

編隊長の乗るハニービー01の命令に従い、機長の雅美は編隊を解

き、迫撃砲の破壊に向かう。機首を北に向け、速度を上げて飛行する。

ヘルメットマウントディスプレイ

徹はHMD越しに、目標であるビルの屋上を見た。バイザーに映し出される高度や包囲の表示の向こうに、確かにいくつか人影が見える。

「目標を肉眼で確認。攻撃許可は下りてるんだよな？」

『もちろんよ。好きにやっていいわ』

「よし。では攻撃を開始する」

あっという間にアパッチは目標のビルの手前まで接近した。3日3晩続いた戦闘で奇跡的に無傷のまま残っていた5階建てのビルの屋上に、10名近い人影が見えた。アザーズ兵達だ。

アザーズ兵達は迫撃砲を片付けて撤収しようとしていた最中にアパッチに近づかれたのか、慌てて砲の片付けを諦めて逃げ出そうとした。だが彼らがビル内部に入る直前、徹はジョイスティックの引き金を引いていた。

小銃とは比べものにならないほど大きな銃声が響き、30mmチェインガンから機関砲弾が吐き出される。30mm弾はらくらく装甲車の装甲板を貫通し、当たり前どころによつては戦車すら撃破できる威力を持つ。そんなモノを生身の人間が食らったらどうなるか。

答えは簡単、バラバラに弾け飛ぶだけである。

狙いを外した機関砲弾が屋上のコンクリートをえぐり、破片と土埃が舞い上がる中、運悪く直撃を食らったアザーズ兵の身体がバラバラに弾け、血煙が現れる。さっきまで味方を傷つけていた迫撃砲が木の枝のように真つ二つに割れ、近くに置いてあった砲弾が爆発し

た。

何度見てもグロい光景で、徹はいまだになれていなかった。

これが正体不明の宇宙人とか宇宙生物だったらまだよかった。相手が人の形をしていなければ、多分黒いアレを叩き潰すような感覚でトリガーを引いていただろう。

だが異世界からやってきたくせに、敵は人間そのものだった。撃てば赤い血が出るし悲鳴も上げる。

胸糞悪いが、それでも任務は放棄しない。今戦わなければ、アザース軍はさらに日本を侵略するからだ。

アパッチはビルに機首を向けつつ、ゆっくりと旋回する。勇敢にも立ち向かおうとしたアザース兵が、ロケット弾の発射器を担ぎ上げる。

「ロケット弾、注意しろッ！」

徹が警告を発すると同時に、アザース兵がロケット弾を発射した。雅美が操縦桿を倒して機体を傾け、すんでのところで飛翔するロケット弾を回避する。

「こんにやろう、ナメやがって！」

罵りつつ、徹はHMDの中心に表示される十字線をロケット弾を担いだアザース兵に合わせ、トリガーを引く。風防に遮られてくぐもった銃声が操縦席に響き、わずかに機体が振動する。

アパッチにロケット弾を発射したアザース兵は肉片となって周囲に飛散したが、残りの数名がビル内に逃げ込んでしまった。

前方赤外線監視装置

すかさずHMDの表示を通常からFLIRに変更すると、バイザー越しに見える風景が一気に黒くなった。そしてビル内部にぼんやりと、下へ駆け降りていく白い人影が表示される。

FLIRはその名の通り赤外線暗視装置であり、赤外線を発する物体、つまり人間など熱をもつものを白く、熱を発していないものを黒く表示する。夜間の戦闘に用いられることが多いが、こうやって隠れている人間の搜索や捕捉に用いられる事も多い。航空機に搭載するほど大型なので歩兵が装備する小型の暗視装置とは違って性能が高く、ある程度なら建物の外壁を透過して内部の様子を把握することもできる。

「敵は下に向かってている。逃げられたら厄介だな」

『そうね。ロケット弾を使って』

「了解」

アパッチを始めとする戦闘ヘリコプターは、大抵二人乗りだ。火器管制を担当し副操縦士を兼ねる前席と、操縦を担当する後席だ。どちらかが負傷した場合に備えて射手は操縦法を、操縦士は武器の用法を学んでいる。

徹は使用兵器をチェーングンからロケット弾に切り換えた。すると機関砲の照準を示す十字線が、Iの形をしたIビーム・シンボルと呼ばれる照準に変更される。

雅美がゆっくり高度を下げつつ、機首をビルに向けたままビルを中心に機体を旋回させる。徹はIビーム・シンボルが白い人影に重なった瞬間、トリガーを引く。

発射された数発の70mmロケット弾はビルの窓を突き破り、内部で爆発した。高速で飛翔するロケット弾の破片がビル内に飛び散り、アザーズ兵を貫いていく。

念を押すように更に数発ロケット弾を発射した。数秒後、徹のHMDにはバラバラになった白い物体がビル内に散乱している光景が映し出されていた。

「目標を制圧。敵の生存者はなし」

『上出来ね。じゃ、わたし達も狙撃兵の搜索に合流しましょう』

オオトリに迫撃砲とその操作員を破壊したことを報告し、徹と雅美の搭乗するアパッチは市街地の中心部へと向かった。徹がMFDに表示されている赤沙太市の地図を見ると、味方を示す緑の記号が続々と市内に侵入していた。狙撃兵はまだ排除出来ていないが、ヘリなどの支援を受ければ問題ないと判断したのだろう。

この街を制圧出来なければ、自衛隊は安心してこの付近に拠点を設けることが出来ない。いつゲリラ攻撃を受けるかわからないからだ。だからといって時間をかけてゆつくりと制圧していくわけにもいかない。先日の戦闘に敗北したアザーズ軍は、後方の味方部隊との合流を目指して撤退中である。今追撃すればかなりの被害を与えられるだろうし、撤退した部隊が味方と合流し街の奪還を図ろうとする可能性もある。そうなった場合ここに拠点を設けていなければ、自衛隊は準備不足のまま再び戦闘に突入することになるからだ。だからなんとしても早いうちに赤沙太市を制圧し、ここを橋頭堡として占領された地域の奪還を進めていかなければならない。

ハニービー02がそろそろ市の中心部に到達しようかという頃、いきなり通信が入った。地上部隊からの通信だった。

『こちらフォックス01、フォックス01！現在敵の砲撃を受けている！近接航空支援を要請する！』

『こちらハニービー02。フォックス01、どこから砲撃を受けているのか？』

雅美が少し驚いたようにきいた。アザーズ軍の残は党先程潰した1

基だけでなく、まだまだ迫撃砲を装備しているらしい。まあ迫撃砲は軽量小型で持ち運びや隠匿がしやすいのが利点であり、当然まだある可能性は想定されていたが。

『駅ビルからだ！敵は駅ビルから多数の迫撃砲を撃ち込んでいる！市内に展開する他の部隊も攻撃を受けている！』！

耳を澄ませば、フォックス01の通信の背後で爆発音や銃声、そして怒鳴り声や悲鳴が聞こえていた。かなり激しく攻撃を受けているようだ。

徹が地上を見ると、あちこちで爆発が起こっていた。一方向だけではなく、駅ビルを中心とした全方向が攻撃されている。

徹はMFDの表示を一目標捕捉／照準兼用レーザー照射装置《TADS》に切り換え、駅ビルをズームした。TADSはアパッチの縦席の前方に設置されたセンサーの複合体で、高感度のテレビジョンシステムやFLIRが備わっている。なので昼夜問わずに目標の捕捉と照準が可能だ。

そしてズームされた駅ビルの映像が左側のMFDに映し出される。レーザー測距機も備わっているので、同時に駅ビルまでの距離も表示された。距離は3000メートル程度だ。

駅ビルは先日の戦闘で攻撃を受けていた。ミサイルや爆弾、砲弾を食らってところどころに大穴が開き、駅舎は半分崩落していた。そして駅ビルの割れた窓ガラスから、いくつかの人影が見えた、長い金属の筒に彼らが取り付くと、続いて砲弾が発射された。迫撃砲を撃っているのだ。

迫撃砲は一基だけでなく、いくつもビルの窓際に並べられている。その全てにアザース兵が取り付け、全方位に迫撃砲弾を発射している。

「なんだ、あんなに隠れてたのかよ……？　　いったいどこから湧いて出た！？」

『あいつら、わざと今まで隠れてたのね。それでわたし達が市内に侵入するのを待って、一斉に砲撃した』

「クソッ！　今までのちまちました攻撃は、さらに部隊を市内に引き入れるためか！」

徹はそう罵り、ヘルファイア対戦車ミサイルに武器を変更した。駅ビルに照準用レーザーを照射し、ロックオンしようとした時だった。

機内に警報が鳴り響き、続いてMFDに警告の表示が大映しになった。

『ミサイル接近！回避、回避ッ！！』

雅美が叫び、操縦桿を大きく倒す。同時にチャフとフレアを放出し、接近してくる対空ミサイルから回避運動を取る。

一気に高度を落としたアパッチの斜め上に、放出されたチャフとフレアに引き寄せられた対空ミサイルが突っ込んでいく。一瞬の後、ミサイルの信管が作動し爆発する。

爆発の衝撃で機体が大きく揺れ、機体に破片が当たる。乾いた金属音が機内に響く。

『……ッ！！損害はない！？』

雅美はそう言い、素早くHMDに目をやる。HMDの片隅にはアップッチの簡単な図が表示されており、損傷の具合と場所が一目でわかる。

幸い機体図は緑色のまま、つまりどこにも損傷を受けていない。

念のため徹は座席から火器管制システムの様子を確かめた。チェーングンも視野と連動し、他の火器も異常を示していない。

徹が目凝らすと、崩壊しかけた駅舎から線路に何かが出てきていた。装軌式の車両の上部に4連装の機関砲とミサイルの発射筒が並び、目標捕捉用のレーダーが回転している。

それはいわゆる対空車両というものだった。アザース軍の主力兵器は人型兵器のEMWだが、ああいった地球の兵器に酷似、というか同様な兵器もある。

対空車両はミサイルに続いて4連装の機関砲をアップッチに向けて発射した。再び雅美が回避運動をとり、アップッチが今までいたいた地点を無数の砲弾が通り過ぎていく。

『連中、あんないつ壊れてもおかしくない場所に兵器を隠してたの……！？』

そう雅美が驚愕の声を上げた。

駅舎は攻撃を受けていつ崩壊してもおかしくない状態だ。だからそこだけ警戒の度合いが下がり、そしてアザース軍はそこにつけ込んで兵器や人員を隠匿していたのだろう。

線路上に出てきた対空車両は約8両。それらの全てが、駅ビルの付近を飛行する航空機に機関砲弾やミサイルを発射している。徹と雅美が搭乗するアップッチは機関砲弾の弾幕に追いつてられるようにして、低空を飛行して駅ビルから離れていく。

「こちらハニービー02！ 駅周辺に対空車両が多数存在している！ 制空権なし！ 待避する！！」

掃討作戦 3（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

掃討作戦 4

頼みの綱のアパッチは、駅周辺に現れた対空車両によって航空支援が行えなくなった。とりあえず頑丈そうなビルに待避していたBチームは、近接航空支援が不能になったことで気分が落ち込んでいた。先程からビルの中に隠れていたアザーズ兵達が迫撃砲を使い、残敵掃討のために市内に突入した自衛隊に砲撃を加えていた。自衛隊は砲撃のために動くことが出来ず、頑丈な建物に隠れることを余儀なくされた。

「……はい、了解しました」

通信士の聡美が背負う無線機で司令部からの命令を受け取った末恵は、そう言って通信を終えた。そして集まってきたBチーム＋分隊からはぐれた機関銃班の二名に、たった今下された命令を伝える。

「前進するわよ、皆。わたし達はこのまま駅に向かい、敵の対空車両を破壊せよとのことだわ」

「ちよつと待て、末恵。確か対空車両は線路上に8両展開しているんだよな？ 俺達に対戦車火器はないぞ、せいぜいグレネードランチャーと島松の持つC4爆弾くらいだ。これで攻撃を仕掛けるのは自殺行為だ」

夏男がすかさず尋ねる。今回の作戦は小隊単位で行われる予定だったし、歩兵相手の掃討戦のはずだったので、BチームはLAMなどの対戦車火器を携行していない。E分隊の対戦車班が84mm無反動砲「カールグスタフ」を装備しているが、それにしだって1門し

かない。

「安心して大宮くん、別に司令部はわたし達が破壊しろと言ってるんじゃないわ。今郊外に特科部隊が展開中よ。わたし達は対空車両を捕捉して、砲撃を要請すると共に弾着観測をしろって言ってる」

迫撃砲や榴弾砲といった野砲は射程は長いが、離れた場所から砲撃するので目標に命中しているかどうかかわからず、常に友軍による弾着観測（砲弾が命中しているか報告し、外れている場合は弾着地点を修正させること）が必要となる。通常弾着観測にはヘリコプターなどが用いられるのだが、駅周辺に展開している対空車両がヘリなどの航空機を追いつまっている。

なので今回は弾着観測をBチームが行い、対空車両を破壊するのだ。幸い対空車両は線路上に展開している。線路は地面にあり広いので、十分榴弾砲で攻撃可能だ。

ただし線路は駅ビルのすぐ側にある。それはつまり、敵の本拠地のと真ん中と言っている場所にあるということだ。しかも対空車両はアザーズ軍にとって重要なので、多数の歩兵が周囲を固めているのは間違いない。

「無人偵察機は？」

「撃墜されたわ。対空車両にはミサイルも装備されていて、遠距離の敵にはミサイル、近距離の敵は機関砲で攻撃してくるそうよ」

孝俊がきくと、未恵はそう答えた。今現在付近に航空自衛隊の攻撃機は展開しておらず、仮に飛行していても対空ミサイルの脅威に晒される。

なので対空車両を砲撃で破壊した後、改めてアパッチ攻撃ヘリにより駅ビルへの攻撃が行われるとのことだった。

(……にしても、まんまと敵の罠にはまったな。俺ら)

太郎はそう思った。

最初の狙撃で部隊を多数市内に引き寄せ、続いて迫撃砲でアパッチなどの航空機をおびき寄せる。そして市内に十分部隊が侵入したのち砲撃を加えて損害を出させ、ついでは対空車両で航空機を撃墜する。

アパッチを撃墜するという敵の目論みは外れたが、それでも対空車両のせいで航空機は市内に侵入出来ない。自衛隊は砲撃で被害を出し、動くことも出来なくなった。

「……予測される敵の数は？」

恒がきくと、未恵はため息混じりに、「500名以上つてところね」と答えた。

「なんだよ、最初の予想の倍以上じゃないか」

「マヌケなんじゃない、司令部？」

「仕方ないだろう。まさかあんな倒壊寸前の建物に隠れているなんて、誰も思わない」

「司令部だらしねえな。でも仕方ないね」

Bチームの面々が口々に言う中、未恵は手を叩いて皆を静かにさせた。

「ハイハイ静かに。とにかく、わたし達の任務は前進して対空車両を捕捉し、特科の砲撃を支援することよ。何か質問は？」

そう尋ねたが、誰も何も言わなかった。それぞれ銃に弾倉を嵌め、ボルトハンドルを引いて薬室に初弾を装填する。がちゃっという金属音が、ビルのロビーに響く。

先程からずっと砲撃は続いている。このビルに裏口は一つあったが、砲撃で破壊されていた。ビルの真正面の道路は、先程からずっと迫撃砲弾が着弾し、爆発があちこちで起きている。この砲撃の嵐の中に突っ込んで行くのは、正直自殺行為以外の何物でもない。

だが敵の拠点である駅に一番近いのはBチームだけであり、今Bチームが行かなければ他の部隊がさらに被害を受ける。自殺行為であっても、命令を受けたものとして、そして仲間達のため、Bチームは突っ込んでいくしかないのだ。

太郎もやれやれ……と思いつつ、89式小銃にささっている30発弾を見た。側面に設けられた残弾確認用の穴から、弾がまだ弾倉に残っている事を確認する。まだ交換しなくていいだろうと判断し、未恵に向き合った。

未恵は皆の戦闘準備が整ったことを確認し、言った。

「よし、行くわよ!!」

威勢よく雄叫びを上げながら、Bチームがビルから飛び出していく。ビルの前の道路は先程から続く砲撃により、あちこちに大穴が開いて土が剥き出しになっていた。すぐにBチームを砲撃が襲う。駅ビルの上階からの見晴らしはよく、たちまちアザーズ兵は近づいてくるBチームを発見した。そして正確な砲撃を行ってくる。

「うおおおおおおおおあああッ!! ツイてねぞこんちくしよおおおおおッ!!」

そう叫びながら、太郎は砲弾が降り注ぐ道路の上を走る。他の隊員も（無口な恒を除いて）口々に何か喚きながら走る。何か叫んでいないと、恐怖で足が止まってしまいそうだからだ。

ひゅるるとフルートのような音を立てて、駅ビルから発射された迫撃砲弾が道路に着弾する。爆発で土埃や小石が舞い上がり、砲弾の破片が高速で飛散する。立ち止まったら、いや立ち止まらなくても、運が悪ければ砲弾が直撃するか、あるいは飛散する金属片に身体を貫かれてあつという間にあの世行きだ。

「止まらないで！ 走ってッ！！」

E分隊からはぐれた機関銃斑の隊員が、至近距離で起きた爆発で思わず足を止めてしまいそうになる。未恵は叫び、自ら先頭に立つて砲撃が降り注ぐ中を走り続ける。

放置車が木っ端みじんになり、商店に大穴が開き、街路樹が爆風でその葉を散らす。戦争映画ならいい画が撮れているだろうが、生憎これは現実だ。使用している銃は偽物プロップではないし、爆発は火薬を仕掛けて起こしているわけでもない。一瞬でも立ち止まれば身体がズタズタに引き裂かれるか、木っ端みじんになってしまう。

爆発音に混じり、大きな銃声が響く。アザース軍の狙撃手が発砲したのだ。

太郎は走りながら、駅ビルの窓の一つからカメラのフラッシュを焚いたような光が発せられるのを見た。直後、空気を切る音と共に、太郎は自分の頭のすぐ横を何かが飛んでいくのを感じた。

「狙撃兵だ、駅ビルにいる！！」

太郎がそう叫ぶと、すぐに皆は対応した。狙いを定めづらくするために道路をジグザグに走り、物陰から物陰へと走る。

駅ビルに近づくにつれ、砲撃が少なくなってきた。一度集合し、それから前進する。

「多分敵の位置が近いのよ。同士討ちを避けるために、わたし達への砲撃を止めたのね」

未恵はそう語る。だがBチームは砲撃の恐怖から逃れたが、その他の部隊に対する砲撃が増えている。さつさと対空車両の脅威を取り除かなければならない。

孝俊と太郎が先頭に立ち、駅へ進んで行く。駅までの距離は500メートルもない。

爆音が響いている事を除けば、周囲は異様に静かだった。敵なんていないんじゃないかというほどだったが、油断せずに銃を構えたまま、Bチームは進んでいく。周囲には商店やビルが並び、駅ビルの狙撃手からは死角になっている。

やがてBチームは大通りのT字路に出た。Tの字の、上の横棒の部分にあたる位置だ。

一番先頭に立つ孝俊は角に建つ雑居ビルの前で立ち止まり、そーつと曲がり角から顔を突き出した。縦棒にあたる道路に敵がいないかどうかを確かめるためだった。

だが孝俊が顔を突き出した瞬間、何事か叫ぶ声が通りに響いた。直後、道路に積み上げてあった土嚢の陰から、ビルの角から、商店の二階の窓や屋上から、わらわらとアザース兵が現れた。そして二階建ての雑居ビルの屋上に立つ一人のアザース兵が、太い金属の筒を肩に担いで自分に向けるのを孝俊は見た。

「ロケット弾ッ！ 下がれ下がれッ！！」

慌てて顔を引つ込め、ビルの角から離れた直後、シューッという音がしてビルの角が爆音した。アザーズ兵が携帯式ロケット弾を発射したのだ。

幸い十分な距離を取っていたためBチームに被害はなかったが、ロケット弾が直撃したビルの一階には大穴が開いた。舞い上がった土埃がBチームを包み込む。

続けて連続したいくつもの銃声が通りに響き渡る。ガンガンガン！と音を立てて、射線上にあった商店の閉まったままのシャッターに穴がいくつも開いた。

「応戦して！ ここしか道はない、突破するわよ！！」

未恵が叫び、早速Bチームも応射する。恒がビルの陰から少しだけ身体を出し、ロケット弾の射手を狙撃する。再装填中に胸に7・62mm弾を食らったアザーズ兵は、悲鳴を上げて屋上に倒れた。

とりあえずロケット弾の脅威は排除したが、まだまだ敵はたくさんいる。通りに積み重ねられた土嚢を遮蔽物にしてアザーズ兵が軽機関銃を連射し、ビルの窓からも小銃を撃ってくる。

夏男と機関銃斑の一士と二士は地面に伏せ、それぞれミニミとM240機関銃の二脚を立てた。そして敵がいる場所を片端から撃っていく。倒すことが目的ではなく、牽制して敵の射撃を中断させるのが仕事だ。

「いい！？ 次に敵の機関銃の射撃が中断したら一気に通りの向こうまで走るわよ！ 太郎、島松くん、板妻さん、あと前川一士に羽島^{しま}二士。あなた達は、わたし達が通りの向こうまでたどり着いたらついて来て！」

そう未恵が叫ぶと、「了解！」と皆が答えた。E分隊の機関銃手である前川と、彼のサポートを行う羽島も頷く。

通りを挟んだ向こうにあるビルまでは、直線距離で30メートル以上ある。どんな駿足な奴でも、少なくとも3秒は敵に姿を晒さなくてはならない。

前川の撃つM240から吐き出された銃弾が、アザース軍の機関銃座の土嚢に突き刺さる。軽機関銃を連射していたアザース兵が、至近距離に着弾した7.62mm弾に怯んで土嚢の向こうに姿を隠す。

「今よッ！ 走って走ってッ！」

未恵はそう言うなり、通りの反対側まで走る。その後を夏男、聡美、恒、孝俊が続く。

すぐにアザース兵達が彼らを狙おうとしていたが、待機していた太郎達が銃撃で敵の頭を抑える。M240が次々銃弾を吐き出し、孝俊の持つMGL140ランチャーからグレネード弾が発射された。太郎もビルの窓から未恵を狙おうとしていたアザース兵を見つけ、銃を構える。89式に取り付けられたACOG低倍率スコープを覗き、レンズの中央に浮かび上がる照準補助用の赤い光点をアザース兵に合わせて撃つ。高低差があったので命中しなかったものの、自分のすぐ脇に銃弾を撃ち込まれたアザース兵は、慌てて後退して窓から姿を消した。

その間に未恵達は通りを渡り終えていた。次は太郎達の番である。道路のど真ん中に設けられたアザース軍の機関銃座が再び火を噴く。先に通りを渡っていた恒が64式小銃改で狙撃し、機関銃の射手が頭を撃ち抜かれて崩れ落ち、銃座が沈黙する。

「よし、来て！」

末恵の言葉でまず洋二が走り出す。続いて明子が駆け出し、その後に太郎も続こうとした時だった。

別のアザース兵が機関銃座に取り付き、再び射撃を開始した。今まさにビルの陰から飛び出そうとしていた太郎は、いきなり銃撃されて慌てて戻る。走る明子を追うように次々と銃撃が彼女の足元に突き刺さったが、幸い一発も披弾することなく明子は通りを渡った

一方通りを渡り損ねた太郎と前川、羽島は、応戦しつつチャンス^{セミオート}を伺っていた。ACOGスコープを覗き、単発で89式を発砲する。アザース兵が一人、胴体に銃弾を食らって倒れた。

「いいか、前川一士、羽島二士。次に銃座の射撃が止んだら、まずお前達が飛び出せ。お前達は俺と違って装備が重いからな。その間俺が援護する」

太郎がそう言うと、二人は「了解」と答えた。そして再び射撃を再開する。

「装填します、援護お願いします！」

前川が叫び、太郎はビルの陰から身を乗り出して小銃を撃つ。銃弾の嵐が止んだことでアザース兵が顔を出し、再び銃撃を開始する。前川はM240機関銃の給弾力バーと今まで弾が入っていた弾倉を外した。代わりに羽島が予備の大きな箱弾倉をM240の機関部下に取り付け、中からメタルリンクで繋がれた7.62mm弾のベルトリンクを取り出す。弾を機関部に押し込み、給弾力バーを元に戻した。前川がボルトを引き、再びM240は射撃が可能になる。

一方、アザース軍の銃座に据え付けられた軽機関銃も弾切れを起こ

した。射手が慌てて再装填を開始し、他の歩兵が突撃銃でカバーする。だが機関銃と突撃銃では明らかに突撃銃の方が火力不足で、あつという間に先程までBチームを動けなくしていた弾幕は消滅した。

「ほら今だ！ 走れッ！！」

太郎が叫び、今まで伏せ撃ちの体勢だった前川と羽島が立ち上がり、通りの向こうへ走り出す。太郎も一発撃ってから、二人の後に続く。銃声と共に身体のすぐそばを銃弾が飛んでいく。だが太郎は足を止めない。今恐怖に駆られて足を止めたら、次の瞬間にはたちまち蜂の巣にされてしまうからだ。

後15メートルで通りを渡り切るところまで太郎は到達した。先に行った前川と羽島は、すでに他のメンバーが待機しているビルの陰に飛び込んでいた。

50メートル走は7秒ほどのタイムだった太郎にとって、その距離はあと3秒も掛からずに渡り切れるはずだった、のだが……。

「ロケット弾だ！！」

先程まで太郎を呼んでいた洋二が、物凄い形相で叫んだ。ぎょっとした太郎の耳に、独特のシューッという音が聞こえた。

「WHAT?」

なぜか英語で発音してしまいつつも、太郎は後ろを振り返った。そして顔から血の気が引く。

太郎向けて、白煙の尾を引きつつ何かが飛んでいた。そしてその何かの後ろには、金属の筒を肩に担いでいるアザース兵の姿が見える。

（どう見てもロケット弾の弾頭です、本当にありがとうございまして。……ってか、なんで俺ばっかこういう目にあうの？）

そう頭の片隅で考えた直後、太郎の背後にロケット弾が着弾した。同時に爆発し、爆風と葉へが太郎に襲いかかる。

まるでドリフかなんかのギャグみたいに、太郎は爆風の勢いで皆がいるビルの陰まで吹き飛ばされた。ずちゃっという鈍い音を立てながら、顔面から着地する。

「太郎ッ！ 大丈夫？ しっかりして！！」

すでに未恵が駆け付け、頬を叩いて気絶した太郎を目覚めさせる。顔面は擦り傷だらけだったが、太郎に目立った外傷はなかった。ロケット弾の破片はほとんどが外れたか、仮に身体に当たっていても防弾チョッキとヘルメットに弾かれていた。至近距離でロケット弾が爆発したにしては、奇跡的と言っていいほど怪我が酷くない。普通だったら死んでいるところだ。

ややあって、太郎が目を覚ました。

「大丈夫太郎！？ わたしよ、未恵よ！ わたしのことわかる！？」

「……おばあちゃんが川の向こうで手を振ってた。回りはお花畑で……」

「なら大丈夫ね。じゃあ皆、さっさと行くわよ」

「ちょっと待った！　なんか俺の扱い酷くねえ？　一日に二回もコントみたく爆風で吹っ飛ばされてるのに、少しは心配してくれよ！」

口に入った土を吐き出しつつ、太郎は立ち上がった。そして全身隈なく調べ、重傷を負っていない事を確かめる。

防弾チョッキの表面やヘルメットのカバーは破片でズタズタに引き裂かれていた。左上腕の迷彩服の生地が裂け、血が滲んでいる。だが皮膚を少し裂かれた程度で、命に関わる怪我ではない。そして洋二が口を挟んでくる。

「まあまあ太郎、未恵はツンデレなんだから許してやれよ」

「誰がツンデレよ誰がッ！？　……まあいいわ、太郎も無事だったことだしさっさと行くわよ。わたし達がこうしてる間にも、味方はどんどん傷ついてるんだから」

最後の一言で、皆真剣な表情に戻った。「了解」と答え、再び駅へ向けて進んでいく。

掃討作戦 4（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

掃討作戦 5

Bチームが駅に近づくにつれ、アザーズ軍の抵抗が激しくなっていく。Bチームだけではなく、行動が可能な全ての部隊が駅周辺の制圧のために市の中心へと向かっていた。

Bチームは駅に隣接する駅ビルのすぐ側まで来ていた。線路は目と鼻の先なのだが、先程から続く激しい銃撃戦のせいでBチームは身動きが取れなくなっていた。

赤早汰市の駅ビルは、この地方有数の規模を誇る店舗を構えていた。休日には多くの客で賑わっていただろう10階建てのそのビルの入口には、今やガラスの自動ドアに変わってアザーズ軍の銃座が設けられている。出迎えてくれるのは制服を着た店員ではなく、都市迷彩の戦闘服を着たアザーズ兵達だ。こちらに銃口を向け、「いらっしやいませ」の変わりに激しい銃声を辺りに響かせる。

駅ビルにはいくつか入口があり、Bチームは南側から接近していた。駅ビルの前を通り抜ければすぐそこに線路があり、そして線路上に展開するアザーズ軍の対空車両も見えるはずなのだが、駅ビルの入口の銃座がBチームの移動を妨げていた。

駅ビルの入口には、二基の重機関銃が設置してあった。駅前の大通りに死角がなくなるようにそれぞれ距離をあけ、周囲に土嚢を積み上げて盾にしている。さらに重機関銃自体にも金属製の防盾が取り付けてあり、鉄壁の防衛ラインを敷いていた。

「こっちの手持ちの火器じゃどうしようもないよ！ どうするの末恵！？」

飛んでくる銃弾に当たらないよう姿勢を低くした明子が怒鳴る。

Bチームは駅ビルから50メートルほどの距離で足止めされていた。

出来るだけ敵を避けて移動していたら、いつの間にか重機関銃の銃口の前にたどり着いてしまっていたのだ。敵はわざとBチームを追い込み、防衛ラインまで誘導したらしい。

細い路地や他の通りは爆破された建物や車両の残骸でふさがれており、銃座の前を通る以外に線路に近づく道はない。かといって後退しようにも、後ろからは別の敵兵達が接近してくる。つまり、挟み撃ちにされてしまっていた。

Bチームは迫撃砲弾の爆発によって出来た道路の窪みを塹壕代わりにして、前後から攻めて来るアザーズ兵に応戦していた。隠れている窪みはどうやら迫撃砲弾によって下水道が破壊されて出来たものらしく、10メートル以上に渡って直接的に深く陥没している。格好の塹壕だった。

「誰かスモークグレネード持ってない!？」

「さっき迫撃砲から逃げる時に、全部使っちゃったよ!」

洋二はそう答えつつ、MGL140の銃口だけを窪みから突き出し、少し角度をつけて駅ビルへと撃った。先程から機銃弾が窪みの淵を削り、下手に顔を出せばその瞬間に顔を粉碎される恐れがあった。洋二が発射したグレネード弾は弧を描いて飛翔し、駅ビルの銃座付近に着弾する。正確に狙いをつけて撃っているわけではないので数発は外れたが、一発だけ銃座の向こうに飛び込んで爆発した。高速で飛散した破片に機銃手が身体を貫かれ、射撃が一時中断する。

未恵はすかさず前進を命じようとしたが、射手が無事だったもう一基の機銃が火を噴くのを見て断念せざるを得なかった。先程グレネード弾が爆発した機銃も損傷はなかったのか、すぐさま駅ビルの中から別の兵士がやって来て射撃を再開する。

先程からずっとこの繰り返しだった。仮に一基を潰しても、無事なもう一基が射撃を継続する。そのうち潰した機銃も修理されるか別の兵士がやって来て、弾幕を張ってBチームを釘付けにしている。

「勝田二曹、迫撃砲の火力支援の準備が整ったと本部から連絡が来ました！ 座標を送ればいつでも砲撃を開始できるとのことです！」

通信手の聡美が、無線機の受話器を握りながら言った。自衛隊も迫撃砲中隊を展開させていたが、他の部隊への砲撃支援や陣地移動に大忙しで、今までBチームへの支援を行えなかったのだ。こちらの砲弾が届くということは敵の砲弾もこちらに届くということであり、一回砲撃をしたら敵の反撃を避けるためにすぐさま移動する必要がある。そのため迫撃砲や榴弾砲は陣地転換といって、一発撃ったら敵に撃たれる前にさっさと移動しなければならず、それに時間がかかっていたのだ。

聡美の言葉に、未恵はすぐさま砲撃支援を要請する。

マルヒトラボー

「こちらスクール01B、スクール01B、砲撃支援を要請します！ 座標はグリッド14A-25C、駅ビル南側の入口付近です」

「こちら第二迫撃砲小隊。了解した、何発撃つか指示を求む」

「最初に4発榴弾を撃ってください。弾着修正の後、今度は榴弾を2発撃った後、同地点に発煙弾を4発お願いします」

「了解した。砲撃を開始する」

一端通信を終えた未恵は、皆に頭を下げるよう命じた。しばらくすると、空気を切る音とともに空から黒い物が落ちてきた。迫撃砲弾だ。

迫撃砲弾は銃座から少し離れた場所に着弾した。迫撃砲は短い間に多数の砲弾を発射することが可能であり、10数発の砲弾が駅ビルの南側入口付近に降り注ぐ。

運悪く土囊の陰から身を乗り出していたアザース兵達が砲弾の破片で身体をズタズタに引き裂かれたが、多くのアザース兵は土囊の陰や機銃の防盾、そして駅ビルの中に隠れて無事だった。銃座には砲

弾は着弾していない。

「弾着修正をお願いします。今の場所から北々西に10メートルの地点に砲撃してください」

『了解した。この砲撃を終えたら陣地転換を行うので、しばらく支援は出来なくなる。オワリ』

「了解しました。オワリ」

通信を終えてすぐに、再び空から砲弾が降ってきた。今度は二つの銃座に砲弾が直撃し、機銃手が爆炎に飲み込まれる。

そして爆発の後、着弾した地点の周囲に白煙が広がり始めた。榴弾の後に発射された発煙弾が着弾し、弾頭の化学薬品が空気と反応して白煙を発生させているのだ。

機銃が破壊されたので小銃で応戦するアザース兵達を白煙が包み込んでいく。

「前進！！」

未恵が叫び、次々と隊員が窪みからはい出て線路の方へ走る。アザース兵が小銃を発砲する銃声が辺りに轟くが、白煙が通りを満たしている状態なので狙いは無いに等しかった。下手すればどこを走っているかわからなくなる恐れがあるので、隊員達はそれぞれ前を走る奴が見える距離を保って線路へと走る。

先頭を走る未恵は煙幕の中から出た直後、目の前に線路の侵入防止の金網があるのがわかった。続いて煙幕から抜け出た夏男にペンチで金網に穴を開けさせる間、未恵は周囲の状況を確認する。

線路上には4台の対空車両が並んでいた。残りの4台は恐らく駅舎を挟んだ反対側にある。

近くを砲撃されたせいか対空車両は移動の準備を始めていた。いつまでも同じ場所に留まっていたら砲撃を食らうと判断したのだろうが、かといってあまり駅から離れるわけにもいかない。さらに建物に射線を遮られず広範囲を攻撃できる位置となると、移動できる場所はありません。

対空車両の周囲には、一個小隊ほどのアザース兵達が展開していた。突撃銃を構えて周囲を警戒しているが、未恵達に気づいてはいないようだった。

「板妻さん、レーザー照準機で対空車両を狙って」
「りょーかい！」

Bチームは破った金網から線路に侵入し、線路脇で横転していた電車の陰に隠れる。恐らく線路上に対空車両を展開する際に邪魔になると判断して、乗り捨てられていた電車をどかしたのだろう。電車は3年間放置されていたせいであちこちが錆びており、横転した時の衝撃のせいか窓ガラスが割れていた。

明子は電車の陰から少し身乗り出すと、背囊からレーザー照準機を取り出した。以前に太郎が航空自衛隊の攻撃機に爆撃目標を指示した時のそれと同じ型をしている。

レーザー照準機を起動し、一台の対空車両にレーザーを照射する。対空車両は今にも現在の位置から移動しそうだった。

今明子が手にしているレーザー照準機は爆弾の誘導だけでなく、GPSを併用することで目標の正確な座標を計ることが出来る。レーザーを照射して測定した目標との距離を、照準機本体に取り付けられたGPS発信機で計った自分の位置と計算して目標の位置を割り出すのだ。

望遠鏡に様々なレンズが突き出た筐体を取り付けたといった体のレ

レーザー照準機から、距離測定用のレーザーが照射される。すぐさま、目標の位置が割り出される。以前はわざわざ特科部隊（自衛隊用語で砲兵隊のこと）からの距離や方角を計算しなければならなかったのだが、技術の進歩は偉大だ。戦場に展開する全ての部隊がGPS発信機を装備し、司令部ではまるでゲームをしているかのように画面に映し出された戦場の様子を見て部隊に指示を出すことが出来る。部隊間でのデータリンクも可能であり、砲弾や爆撃の要請も以前より簡単に出来るようになった。

「オオトリ、オオトリ、こちらスクール01B。敵対空車両を発見した。目標の座標はそちらに届いているか？」

『こちらオオトリ。目標の座標を確認した、これより砲撃を開始する。そちらは弾着観測を行え』

「スクール01B、了解した」

未恵は一端通信を終えた。そしてBチームと軽機関銃班の二人に、戦闘に備えるよう指示する。砲撃が始まればたちまちBチームの居場所もわかるだろう。一度の砲撃で敵が全員片づけば問題ないのだが、確実という言葉が戦場に存在しない以上、備えることは必要だった。

対空車両は先程の位置から離れ、Bチームの隠れる横転した電車の方へと向かって来る。砲弾はミサイルと違って目標を追尾したりはせず、目標が着弾地点から移動してしまえば発射された砲弾は地面を耕すだけになってしまう。それだけでなく、近づいてきた対空車両に発見される恐れもある。対空車両はヘリコプターや戦闘機を攻撃するための車両だが、その武装が対人射撃に用いられた時はオーバーキルと言ってもいいほどの威力を発揮する。

早く、早くと皆が祈るなか、空から黒い物がいくつも降ってきた。数十キロ彼方に展開する特科部隊が砲撃を開始したのだ。

移動を始めた四両の内、レーザーを照準した地点のちょうど真上を通過した三両の対空車両に砲弾が直撃した。榴弾砲は迫撃砲と比べて口径の大きさや砲身長、そして砲弾の重さや射程などが桁外れに大きい。その分展開などに時間がかかるが、火力では迫撃砲を圧倒する。

対空車両の砲塔に砲弾が直撃し、あっさりと装甲板を貫通した。対空車両は戦車と違って撃ち合いを想定していないので装甲は薄く、さらにあらゆる戦闘車両に共通することだが、車両の上部の装甲は薄い。重力の力も借りて物凄い勢いで落下してきた155mmの砲弾は、対空車両の屋根を貫通して車内で爆発した。

内部に搭載してあった機関砲弾やミサイルが誘爆し、派手な爆発が起きる。四両の内後方を走っていた三両に着弾し、爆発炎上した。二両は内部から破裂したように砲塔がバラバラになり、もう一両は車体から吹き飛んだ砲塔が空中高く舞い上がっていた。車体の今まで砲塔が収まっていた場所から炎が吹き出し、離れた場所に吹き飛んだ砲塔が落下して派手に線路に敷き詰められた小石を撒き散らす。

「ヤバイ、まだ一両残ってるぞ！」

孝俊が焦ったように叫んだ直後、生き残っていたアザース兵の一人がBチームの隠れる電車を指差す。どうやら発見されてしまったらしい。

対空車両の砲塔がぐるりと回転し、四連装の機関砲の砲口がBチームを向く。

「たっ、待避ーッ……！」

末恵が叫び、慌ててBチームが電車から離れた直後、対空車両の機関砲が火を噴いた。突撃銃のそれとは比べものにならない大きさの銃声が轟き、ガンガンガン！　と音を立てて電車にいくつも大穴が開く。

アザーズ軍の対空砲の口径は28mmであり、自動車二台を並べても普通に貫通する程の威力である。さらに対空砲は短時間で大量の砲弾を発射して弾幕を張るために連射速度が早く、あっという間に電車はスクラップになってしまった。

幸いなことに対空砲は俯角は高く取れるものの、砲口はあまり下まで下がない。伏せればどうにか砲弾をかわせるが、代わりに対空車両の護衛であるアザーズ兵達が突撃銃を発砲し、Bチームが一箇所に留まることを許さない。

地面をごろごろと頃がって飛んでくる砲弾と銃弾を避けつつ、小銃を構えてアザーズ兵を撃つ。対戦車火器がない以上、対空車両の破壊は後回しだ。

どうにか線路脇の側溝に飛び込んだBチームは、そこから身を乗り出して発砲した。側溝はかなり深くて幅があるので、またしても簡単な塹壕代わりになった。

夏男のミニミと前川のM240が火を噴き、銃弾を周囲にばらまく。一人のアザーズ兵が頭を撃ち抜かれ、慌てて他の兵士が対空車両の陰に隠れた。対空車両はいくら装甲が薄いといっても、小銃弾くらいなら普通に弾き返す。アザーズ兵は対空車両を盾代わりに、負けじと銃弾を浴びせ掛けてくる。流れ弾が線路に敷き詰められた小石に辺り、小石が弾き飛ばされる。Bチームの隠れた側溝のコンクリートが銃弾で削られた。

「どうすんだよ！？　まだ一両残ってるぞ！　まさか俺達ごと砲撃を要請したりしないよな！？」

「やってみる？」

「それは止めてください！！」

未恵が本気で砲撃を要請しそうだったので、慌てて太郎は止めた。まだまだこんな戦場で死ぬつもりがない太郎にとって、至近距離で砲撃されるのは悪夢以外の何物でもない。映画やドラマなら涙を誘う展開だろうが、そんなのはまっぴらごめんだと太郎は思った。最後には死んでしまふ、戦争ものの映画やドラマの主人公にはなりたくない。

だが状況はBチームにとって不利になっていく一方だった。時間が経つにつれて砲撃を受けたショックから立ち直ったアザーズ兵達が銃撃戦に加わり、さらに対空車両が破壊した電車な上に乗り上げ、対空機関砲の射角を下げてきた。砲弾が狂ったように撃ち込まれ、たちまち側溝の淵が削れてなくなっていく。

MGL140を撃ち尽くした洋二は89式小銃に持ち替え、側溝からわずかに顔を突き出して撃つ。こちらが一発撃つごとに、その数倍の銃弾が帰ってくる。

M870MCS散弾銃に新たなシエルを装填していた太郎は、ころころと何か丸いものが側溝の中に転がってくるのを見た。そしてその正体を確認した瞬間、顔から血の気が引く。

人間の握りこぶしほどの大きさのそれは、いわゆる手榴弾というものだった。安全ピンは抜かれ、安全レバーも外れている。

つまり、爆発寸前である。

「手榴弾ッ!!」

洋二が叫び、その手榴弾を掴む。そして手近なところにあった、側溝から下水道に水を排水するサッカーボールが入りそうな大きな穴に手榴弾を放り込んだ。

太郎と洋二が慌てて排水口から離れた直後、ボン!! と音を立て

て排水口から煙と金属片が吹き出した。排水管の中で手榴弾が爆発したのだ。

狭い排水管内で爆発したことにより、壁で反射された爆風は通常よりも高速で外に吹き出した。爆風に乗って破片も排水口から撒き散らされるが、幸いなことに誰にも被害はなかった。排水口の真上に立っていたら、爆風と破片で身体をズタズタに引き裂かれていただろう。

だが至近距離で爆発音を聞いた二人は、耳がおかしくなり頭がおかしくなった。頭がふらふらしている状態で、洋二は、

「俺、この戦争が終わったら結婚するんだ……」

と呟いた。それを聞いた太郎は、同じくうまく働かない頭で、

「死亡フラグを立てるなよ。てか、お前彼女いない歴〃年齢だったろ……」

とツツコミを入れた。

「ちなみに彼女いない歴〃年齢〃童ㇰ」

「やかましい太郎！！そこに触れるな！！」

「あつ、元気になった」

頭を振って頬を叩き、意識をはっきりさせる。そうして二人は、再び銃撃戦に加わる。

太郎は未恵を見た。未恵は89式小銃を一発撃った後、個人携行式の無線機を使って誰かと連絡を取りはじめた。対空車両の陰に隠れているアザース兵に牽制の銃弾を浴びせ、89式の弾倉内の弾を撃ち尽くした太郎はすぐに側溝の中にしゃがみ、新たな弾倉と交換する。

「つーか未恵、このままじゃ洒落じゃなく島松の死亡フラグが回収されそうなんだが」

「大丈夫よ。もうじきあの対空車両も撃破されるから」

「おいおいまさか俺達ごと砲撃」

太郎がそう言った直後、シューツという音と共に何かが側溝の上を飛び越え、対空車両に命中した。直後、太郎達の頭上を飛び越えた物が直撃した対空車両が、周囲のアザース兵を巻き込んで派手な爆発を起こした。

「……？」

今まででこずっていた対空車両があつさり撃破されたことに、未恵を除いた全員の脳内に「？」が浮かんた。そしてその疑問を掻き消すかのように、一際大きな声が周囲に響き渡る。

「ハッハアーツ！！ 主人公は遅れてやってくるつてなア！！」

そう言つて颯爽とBチームの面々の前に現れたのは、今まで砲撃で分断されていた第一小隊の小隊長である権田だった。振り返れば、砲口から発射煙を立ち上らせるカールグスタフ無反動砲を担いだE分隊の隊員の姿が見える。ようやくBチームに合流できた権田達が、Bチームを追い詰めていた対空車両を破壊したのだ。未恵がさつき連絡を取っていたのは、今まさに合流しようとしていた権田に対空車両を破壊するよう要請していたのだ。

赤早太市に来る時よりも隊員が減った第一小隊が線路上に展開し、残ったアザース兵を掃討していく。駅ビルから第一小隊を攻撃しようとしたアザース兵は、恒を始めとした選拔射手や、狙撃手の兵藤

の正確な射撃を受けて絶命した。

アザース軍は迫撃砲の俯角を高く取って第一小隊を攻撃しようとしたが、砲を発射する直前に対戦車ミサイルの直撃を食らって迫撃砲は破壊された。別の部隊が線路の反対側に展開していた対空車両を砲撃で破壊し、再びアパッチが航空支援に現れたのだ。

ハニービー編隊の四機のアパッチはまずヘルファイア対戦車ミサイルで駅ビル上階に展開する迫撃砲を破壊した後、一気に接近してチーニングガンやロケット弾による攻撃を浴びせた。駅ビルの周囲を旋回し、上から下までどこも撃ち漏らすまいというかのよう to 攻撃する。

チーニングガンの30mm機関砲弾が窓ガラスを割って鉄筋コンクリートの外壁をえぐり、発射されたロケット弾がビル内で爆発して炎がアザース兵達を包み込んでいく。

アパッチの編隊が搭載していた兵器を撃ち尽くした時、駅ビルは文字通り蜂の巣状態になっていた。いや、駅ビルの形をした蜂の巣と言われた方がまだわかりやすい。

外壁は大穴だらけ、ロケット弾の爆発やビル内にあった迫撃砲弾の誘爆で火災が発生し、赤い炎と黒煙が立ち上っている。

そして炎で熱せられた銃弾の火薬が爆ぜる音に混じり、狂ったような叫び声がビルの中から聞こえて来る。運悪く生き残ってしまったアザース兵が、炎に巻かれて断末魔を上げているのだ。

ビルの窓から何かが落ちてくる。89式小銃のACOGスコープを除いた太郎は、それが人の形をしていることに気づいた。逃げ場を無くしたアザース兵が、窓から逃げ出そうとして飛び降りているのだとわかった。中には炎に包まれながら落下するアザース兵もいて、太郎は思わず目を背けてしまった。

弾薬を使いきったアパッチの編隊が、前線基地の方向へと飛び去っていく。先程までの銃撃戦とはうってかわって、静寂が周囲を満たしていた。

「……っ、くっ、うっ……」

A分隊の少年隊員が地面に膝をつき、涙を流していた。狙撃を受けた時、戦死した大原二士の名前を呼んでいた隊員だ。おそらく、大原二士と仲がよかったのだらう。

太郎はそこで、自分があまり仲間の死を悲しんでいないことに気づいた。大原二士や他の隊員の死を残念だと思っではいるのだが、それだけなのだ。泣いたり悲しんだりはしていない。

それもこれも、長く戦場にすぎたせいなのだろう。戦場で人が死ぬことは当たり前であり、太郎も目の前で人が死ぬのを数え切れないほど見てきた。訓練生の時からの仲間が死んだこともある。

最初の頃は仲間の死を受け止めきれず、いつまでも泣いていた。だがいつの間にか心が慣れたのか麻痺してしまったのか、仲間が死んでも泣くことはなくなった。元々徴兵されたされないに関わらず戦死者は多く、死んだり負傷したりで部隊での隊員の入替わりも激しい。名前と顔を覚えないうまま同じ部隊の仲間が死ぬことも珍しくない。

大原二士と彼の友人も、補充員として最近やってきたばかりだった。戦場で死ぬのは経験が浅い者ばかりだ。

太郎はそつと、今日戦死した隊員達の冥福を祈った。

アザーズ軍の残党部隊の拠点だった駅ビルは破壊されたが、戦闘はそれだけでは終わらなかった。どうにか逃げ延びたアザーズ兵達は下水道や地下街に隠れ、ゲリラ戦を挑んだ。

これに対して自衛隊は、かつて太平洋戦争中の沖縄戦で米軍が行った「馬乗り攻撃」という戦術を取った。地下に繋がるマンホールや地下鉄の入口を見つけたら、すぐに手榴弾や爆薬、そしてロケットランチャーなどを叩き込む戦術だ。地下に隠れている敵は爆死するか、出入口を塞がれて生き埋めにされてしまう。仮に死ななくても、攻撃を恐れて地下からでて来てしまう。アザーズ兵を倒せる確率は低い、それでも彼らが隠れることができる場所はどんどん減っていった。

一週間の激しい掃討戦の後、生き残ったアザーズ兵10人が投稿した。ここに、赤早太市の占領は完了した。以降自衛隊は、赤早太市を拠点に大規模な反攻作戦を展開していくことになる。

掃討作戦 5（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

戦う意味

特別自衛官の給料は安い。太郎は今月の給与明細を見て思った。

徴兵されたとはいえ、特別自衛官にも給料は出る。そもそも特別自衛官は通常の自衛官の数が少なく、さらに戦時だというのに誰も自衛官なろうとする者がいないために仕方なく徴兵された者だ。だから通常の自衛官と同じように給料を支払わなければならない。

さらに過酷な戦場にいるのに、給料も無しに戦わされたら士気がガタ落ちになる。脱走する者も後を絶たないだろう。そのため、給料は月一回は必ず支払われる。

だがその給料の額は、太郎が思ったように少ない。

まず、基本給は11万円ほど。ここから税金やら何やらを天引きされて、手取りは9万円。これは自衛隊の幹部となるべき人員を養成する防衛大学の学生が受け取る給料とほぼ同じ額である。これは一般入隊した隊員の基本給が16万円程度であることから考えるとかなりの安さである。通常自衛官と特別自衛官の任務に差はほとんどないのに、不公平という声があちこちから上がっている（だったら一般入隊してくれ、と自衛隊上層部は考えているのだが、そもそも戦場に行きたくないから一般入隊する隊員の数が少ないのだ。そして徴兵制度が今でも続いている）。

無論こんな会社員よりも安い給料では反乱が起きかねないので、きちんとボーナスも出る。それに加えて、特別手当というものも出る。これは災害派遣で死体処理をしたら3200円、潜水艦の乗員は一日1750円、空挺隊員が一回降下するたび6650円という、危険もしくはキツイ任務を与えられた場合に支給される手当だ。ちなみに爆弾や毒ガスを処理するのは一時間あたり110円と、全く危

険性と釣り合っていないものもあるが。

だが隊員達が派遣されるのは戦場であり、いつどこで誰が死んでもおかしくない状況に放り込まれることとなる。そのため防衛省は、自衛隊のイラク派遣時の特別手当を参考にして、「危険任務手当」なるものを作った。

イラクに派遣されていた陸自隊員の、一番危険な任務での特別手当は一日24000円だった。それを参考にして、危険任務手当は一日20000円となった。

ちなみに危険任務とは前線での戦闘を伴う任務の事である。後方支援部隊の隊員は文字通り後方から戦闘部隊の支援をするが、時々アザーズ軍のコマンド部隊の襲撃を受ける事もある。そういった際に戦闘になった時にも危険任務手当は支給される。つまり、敵地に入るか一発でも敵に撃たれれば、その時点で危険任務手当が支給されるのだ。

それに加えて以前からあった特別手当なども合わせる。そうするとようやく大体の隊員が納得するであろう額になる。

太郎の今月の給料は、40万円近くに上っていた。基本給の9万円に加え、今月上旬のアザーズ軍との戦闘、Bチームに入ってから対空ミサイル陣地への潜入、そして先日 of 赤早汰市での残敵掃討作戦で、実に半月ほど戦場に出ていたからだ。いくら懲罰部隊同然といってもきちんと給料を与えなければ、士気に関わると判断しているらしい。

（でも、命の対価としては全然釣り合っていないよね……）

そんなことを考えつつ、明細を机の引き出しにしまう太郎。

太郎は徴兵されてからの3年間で、すでに300万円近くを貯めて

いた。太郎は金遣いが荒い方ではなく、さらに前線に配置された月なんか給料の使い道すらない。しかも駐屯地で暮らしているので、衣食住光熱水道費は当然タダ（ただし設備が充実しているかどうかは除く）。

趣味はいたって平凡な太郎は月に数千円、よくて数万円しか使わない。なので給料は貯まっていくな一方だった。飲み代や趣味代に大量に給料をつぎ込む隊員もいるが、太郎は未成年で酒は飲めないし、趣味も読書くらいである。

これなら動員が解除された後、奨学金や親に頼らずとも大学に通うことが出来るだろう。特別自衛官は兵役（名目上軍隊ではないので「兵士」はいないというツツコミは除く）期間を終えたのちには様々な恩恵を受けることが出来る。

大学の進学費用を援助してもらえたり、国公立大学に「特別枠」を設けて召集されていた隊員を優先的に入学させたり。他にも病気や怪我の際に格安の費用で自衛隊病院に診察してもらえたり、「コイツは自衛官だったので規律を遵守し、色々役に立っているいい人材です」と自衛隊から太鼓判を押されて就職に有利になったり。

しかし、それもこれも、生きて兵役期間を乗り切らなければ意味がない特典だ。大抵の場合徴兵された隊員は覚える専門的な技能が比較的少ない普通科に配属される。そして普通科隊員は、全職種の中で一番死亡率が高いとも言われている。

さらに後方の安全な場所でのんびり日々を過ごす国会議員やマスコミは、日々自衛官の給料を減らせと喚んでいる。彼らにしてみれば自衛官の月給50万円というのは高すぎる。衣食住光熱水道費無料なのだから、もっと減らせ云々。

もっと酷い意見だと、徴兵された隊員に給料は不要なのなんだから、っている者もいる。兵役は新たに法律で定められた義務なのだから、

無償で国家に奉仕しろ。

（だったらテメエらが戦えってんだ）

太郎は心の中でそう罵りながら、今度は手にした茶封筒の封を切った。

それは太郎の家族から送られてきた手紙だった。表面の住所や名前、切手の上から、でかでかと「検閲済」の赤いハンコが押されていた。戦争の勃発は、それまでの生活を一変させてしまった。自衛官が家族と連絡を取るには、各基地や駐屯地に設けられたテレビ電話を使用するしかない。

携帯電話の持ち込みは禁止されていた。これは隊員の中にアザーズ軍のスパイが混じっているかもしれないという判断からだ。3年前のアザーズ軍の境港上陸時に、避難民の中にアザーズ兵が混ざって日本中に散らばっている可能性があったからだ。上陸してきたのは戦闘服を着て自動小銃を持ったアザーズ兵ではなく、普通の服を着て避難民に紛れるために大荷物を抱えていた奴がいたかもしれない。アザーズ兵の人種はバラバラで、アジア人のような外見の者もいるらしい。

そんな奴らのスパイがいれば、もしくは裏切り者がいれば、あつという間に携帯電話はコミュニケーション機器からスパイ道具に早変わりする。今やデジタル並の高性能なカメラが搭載されているカメラは珍しくなく、また録音機能もついている。さらに近頃の携帯電話は異様に薄く、小さい。

もしカメラで駐屯地や基地内の重要区画の写真を撮り、メールで送ったら。もし作戦の説明をこっそり持ち込んだ携帯電話で録音し、外部に流したら。それらは隊員達の生命を脅かしかねない。

事実、前線だけでなく後方の駐屯地や基地でもアザーズ軍の特殊部

隊による攻撃が行われたことがあった。そして事件の後に隊員達の携帯電話を調べてみると、大抵の場合、一人か二人不審な画像データや録音データを不審な宛先に送った後に削除していた。

でもって、それから駐屯地への携帯電話の持ち込みは大きく制限された。持ち込む場合も登録してあるメールアドレスは全て自衛隊側に調べられ、そして非使用時には警務隊が預かり、駐屯地内で持ち歩く事は禁止された。「携帯」電話という名称にも関わらずである。そして携帯電話を使用する際にも、使用が可能な場所は大きく制限される。通話やメールが終わったら、即座に返却しなければならぬ。メールの内容や通話内容、そしてやり取りしたデータについても、機密がやり取りされていないかサイバー専門の部隊が監視している。

もつとも、元々作戦行動中に携帯電話を所持することは厳禁であり（不用意に電波を発すると自らの位置が特定されかねないため）、さらに前線では基地局が壊滅しているため携帯電話そのものが使えないので大して問題はなかったが。

ただし、第二次世界大戦な時のように、検閲制度は復活した。といっても自衛隊員が外に手紙を出す時だけであり、一般人には携帯電話の制限も検閲も何もない。

メールがほとんど使えないので、手紙を使って家族と連絡を取る隊員が増えた。だが封筒に手紙を入れて送っても必ず一回は封を開けられて中身を確認され、そして不都合な点があつたら送り返されて来る。

不都合な点とは、手紙に自分が参加した作戦の内容や現在の居場所、そしてこれからどんな作戦があるかなどだ。特に一番最後の点については、手紙に書いたら確実に呼び出される。場合によっては情報漏洩の疑いがかかってしまう。

家族からの手紙も検閲がかかることがある。特に最前線にいる隊員に送られた手紙は必ずと言っていいほど検閲される。これは実は隊

員の家族がアザース軍のスパイ、もしくは日本国内の過激派で、手紙で破壊工作などを行うよう指示をするかもしれない、という点からだった。

太郎は封筒とペンを持って、元は寮の四人部屋だった自室を出た。館津駐屯地は全寮制の高校を接收したもので、隊舎などには寮がそのまま転用されている。鉄筋コンクリート製なのでテントやプレハブ、コンテナなどで作られた隊舎よりも頑丈であり、攻撃を受けても幾分かマシであることが取り柄である。

すでに夕食後ということもあって、隊舎のあちこちに隊員の姿が見られた。作戦前などでもない限り訓練などは午後5時半に終わり、その後風呂や夕食を終えたら自由時間なのである。無論、駐屯地を警備する隊員や非常事態に備えて完全武装で待機している中隊は別だが。

廊下を歩いてみると、「娯楽室」とのプレートが下がった部屋の前に来た。この部屋はテレビやDVD、ゲームや漫画その他様々なものが揃っている。戦闘ばかりではストレスが溜まり、駐屯地でもやることがないという事態になったら、確実に精神を病んで味方に銃を乱射する者が出て来る（太郎の聞いた限り、実際にいたらしい。事件の死者は戦死者の中に紛れさせ、事件は揉み消されたらしい）。そうならないために、隊員達に様々な娯楽を提供する娯楽室が作られたのだ。娯楽室はもともと視聴覚室だった広い部屋にテレビやソファを運び込んだものだ。自由時間にはいつでも、誰でも利用する事が出来る。

その娯楽室の中から、男達の押し殺された歓声が響いて来るのを太

郎は聞いた。何だと思つて娯楽室を覗いてみると、部屋の中には何十人も男性隊員が集まり、テレビを食い入るように見ていた。全員の頬の筋肉はだらし無く弛緩し、皆ニヤニヤしている。

「……何やつてるんだ？」

思わずそう呟くと、いきなり視聴覚室の中から迷彩服に包まれた手が伸びてきて、太郎を中に引っ張り込んだ。

腕の主は恒だった。視聴覚には恒の他にも、洋二や孝俊、夏男といったBチームの男子メンバーが全員揃っていた。皆他の男性隊員と同じようにだらし無くニタニタと気味が悪い表情で、テレビに釘付けになっている。

「なんだ恒か。皆何を見てるんだ？」

「……ストライクウィッチーズ」

「何？ ストライク……何だつて？」

太郎がテレビの画面に目を向けると、そこにはいわゆる「アニメ」が映し出されていた。

「なんだありゃ？　なんでパンツ丸出しで女の子が空を飛んでるんだ？」

「……あれはパンツではない。ズボンだ」

「いやどう見たってパンツだろ」

「……太郎、こういう言葉を知ってるか？　『パンツじゃないから恥ずかしくないもん！』」

「いや知らん」

読書という一般的な趣味しか持たない太郎は、アニメやゲームなどに関してあまり詳しくない。ゲームはよくやるが、いわゆる「萌え

系」のゲームは一度もやったことはない。

「恒、なんでこんなに人が集まってんだ？　それほどこのアニメが面白いのか？」

「……それもある。だが、もっと別の理由がある」

「なんだその別の理由って？」

「……まあ見ている。すぐにわかる」

恒はそう言うと、テレビ画面を見つめた。何事かと思いつつも、太郎も画面を見る。

そして　　。

太郎は思いっきり吹き出した。それと同時に、室内の隊員達が押し殺した歓声を上げた。

「なっ　　。これって、いわゆる１８禁アニメ？」

太郎は思わずそう言ってしまっていた。画面には、女の子達の入浴シーンが映し出されていた。そして、色々なところが見えてしまっている。

胸とか、胸とか、胸とか。

「おい恒、これっていわゆる１８禁アニメなのか！？」

「……いやいや、一般アニメで視聴制限はかかっていなかった。普通に地上波で放送してた、深夜帯だけだ」

「いやいや、色んなところが見えてるぞ。青少年の目の毒になるんじゃないか？」

「……大丈夫だ、問題ない。地上波放送の時は、光とか湯気とか不自然なまでに画面に展開していて隠していたから」

「今、まる見えじゃね？」

「……DVD、ブルーレイを購入したら修正は全部取れる」

「そうですか……」

「……今のアニメじゃこんなのは普通さ。サービスシーンを一度でも入れておかないと、大きなお友達に売れないからな」

太郎はあらためて画面を眺めた。隊員達は女の子の裸が画面に映る度に、拳を突き上げて歓声を上げている。

まあ、仕方がないのかもしれない。太郎はそう思った。

自衛隊に限らず、軍隊というのはとにかく禁欲を強いられるものである。隊に女性は少なく、一般人の彼女がいても自由に会えるわけでもない。最近は徴兵制度によって男女比の差が縮まってきたが、女性隊員は体力や力の関係で後方職種に配属される場合が多いので、相変わらず隊に女性は少ない。たとえ男女比が1:1になったとしても、全ての男性隊員が女性隊員と付き合えるわけでもない。色々な理由で。

なので自衛隊や各国の軍隊ではよく、18禁なDVDや雑誌がよく貸し借りされ、連れ立って18歳未満立入禁止な店に行く隊員が多い。ドキッ！男だらけの集団生活、ポロリもあるよ、みたいな生活を送っている若い未婚や彼女がいない隊員は、欲求が溜まりまくっている。古今東西戦場で女性の捕虜や民間人を強姦する兵士が後を絶たないのは、そういう事情がある。

だからここにいる隊員達はこうやってアニメを見て、女の子への欲

求を解消しているのだ。

イラクやアフガニスタンで米兵達に日本のアニメが人気だったのも、手早くかわいい女の子のキャラに会えることが原因だったらしい。
二次元なら三次元と違って様々なキャラがいて、自分好みのキャラがいる。そういった理由で、イラクやアフガニスタンの米兵達はアニメを愛好していたのだ。

そしてそのアニメの発信源である日本の自衛隊では、二次元の浸透がかなりのところまで進んでいた。元からいた20代や30代の隊員の中にはオタクが多かったし、そこに加えて徴兵で外部から放り込まれてきた10代の隊員の多くはオタクだった。今や隊員の多くはオタクであり、8月末や年末には休暇願いが大量に出されるとまで言われている。

太郎は他人の趣味をどうこう言うつもりはないので、そーっと娯楽室から出ていこうとした。が、廊下に出る直前にガツ！と肩を恒に掴まれる。

「……最後まで見て行かないのか？」

「いや、最後まで見たら何かに目覚めそうな気がするから」

「……お前も目覚める！　そして二次元の世界へ行こう！！」

「お前オタクだったのか！？」

驚愕する太郎。普段無口な恒がこういったアニメが大好きな奴だとは思ひもしなかったからだ。

「……もうちょっといれば、もっとエロいのも見れるぞ。大丈夫だ、18禁じゃなくて一般アニメだ」

「どこが大丈夫！？　てかハアハア興奮すんな恒、どんだけエロい

んだよそのアニメ！？」

「……兄と妹がやつちゃうくらいだ。たいしたことはない」

「いやいや大したことあるよ！　なんだよそのアニメ、都知事やアグネスちゃんが飛んで来そうな内容じゃないか！」

「……来いよ石原！　条例なんて捨ててかかってこい！！」

「どこの元コマンドー部隊の大佐だよ！？」

そうツツコミを入れて、太郎スタコラ娯楽室から逃げ出した。背後で再び男達の歓声が上がるとを聞きながら。

娯楽室から脱出した太郎は、食堂へと向かった。とつくに夕食の間を過ぎていたので人影は疎らだったが、暇らしい隊員達が椅子に座って談笑していた。もともとこの高校がマンモス校で生徒数が多く食堂が広がったこともあって、よりいっそうがらんとした雰囲気漂わせている。

自販機でペットボトル入りのお茶を買った後、手近な場所にあった椅子に腰掛けて手紙と筆記用具を並べる。食堂は夕食と就寝時間中以外は開放されており、隊員が集まることができる。

太郎は封筒から便箋を取り出し、読みはじめた。親からの手紙だった。

内容はいつも太郎が受け取るようなものだった。怪我してないか、友達は無事か、飯はきちんと食べているか等々……。

太郎が平凡な少年であるように、太郎の家族も平凡だった。父親は商社の課長、母親はパートタイマー、妹は中学二年生だ。絵に書いたような平凡な家族である。

息子が徴兵され、戦場にいること以外は。

太郎は何も書いていない便箋を取り出すと、さっそく返事を書きはじめた。といつてもどうせ検閲にかけられるので、大したことは書けない。せいぜい無事だ、とか、心配すんな、程度の事くらいだ。

「おつ、太郎じゃん。なにやってんの？」

家族への手紙を書き終わったちようどその時声をかけてきたのは、Bチームのリーダーである勝田 未恵だった。風呂上がりなのか髪が湿っている。服は非常時に備え、いつもの迷彩服だ。

「ん、手紙だよ。お前一人か？」

「そうよ。十条さんと板妻さんは家族とテレビ電話で話してるわ」

「ふゝん、お前は親父さんに電話しないの？」

太郎が何気なく言ったその一言に、場の空気が固まった。未恵の表情が強張り、何か悪いこと質問したかなと少し太郎は心配した。アザーズ軍の対空ミサイル陣地を破壊する際に未恵の父親のことを聞いた際、少し険悪そうだったことも思い出した。ややあつて、未恵が口を開く。

「……しないわ。父さん、忙しいだろうし」

深く尋ねない方がいいと判断した太郎は、「そうか」と言って手紙を書く。未恵の父親は陸上自衛隊の陸将なので、未恵の言う通り忙しいのも事実であると判断したのもある。

するといきなり未恵は太郎の書いた手紙に手を伸ばした。

「見ていい？」

「好きにしる。どうせ一度は検閲されるんだ、大したことは書いてねえよ」

投げやりにそう言って、ペットボトルのお茶に口をつける。未恵は手紙をざっと読み、一言言った。

「つまらないわね」

「最初にそう警告しただろ。つたく、なんで検閲なんてあるんだろうな？ 日本国憲法で保障されている『基本的人権の尊重』はどこに行っただ。検閲の禁止と通信の自由がなけりゃ、まるで第二次世界大戦中の日本軍じゃねえか」

「人権？ そんなもの無いわよわたしたち自衛隊員には」

未恵はそう言うと、何か秘密の話をするかのように身を乗り出し顔を太郎に近づけた。太郎は何となく、化粧してなくても女の子はいい香りがするんだな、と頭の片隅で思った。

「この前十条さんが防衛省にハッキングして調べただけ……」

「待て。防衛省にハッキング？ あいつそんなことやってんのか？」

「大丈夫よ、バレてないし」

「そういう問題じゃないと思うんだが……。まあいい、で？」

未恵は周囲を見回して近くに人がいないのを確かめたのち、続けた。

「この戦争、政治家や防衛省幹部、そして大企業の社長達は終わらせるつもりはないらしいわよ」

「どういうことだよそれ？ 人がバンバン死んでいつてるのに、終わらせるつもりはないだって？ 予算の問題とか隊員の数とか色々

問題があるのに？」

「隊員の数についてだけど、この戦争は口減らしも兼ねているらしいわ。だから上としては、どんどん死んでもらった方がいいってわけ」

今から20年前、日本はいわゆる高齢化社会を迎えようとしていた。老人の数が子供を上回り、少子化の心配がされていた時期に、時の政権はある政策を打ち出した。

子供がいる家庭には補助金を出し、さらに一人子供が生まれる度に祝い金を付与する。こうやって子育てにかかる費用を減らすことで、より多く子供を産んでもらおうというのだった。

無論金だけ出しても育てられなければ意味がないので、保育園などの整備も進められた。その結果、落ち込み続けていた日本の出生率は、政策後回復を始めた。

人口ピラミッドという物を知っているだろうか？ 小学校でならう、どの世代がどれだけ多いかを棒グラフで示したものだ。

医療技術が発達していない発展途上国は、多産多死なので富士山型。生まれてくる子供の数は多いが、歳を取るにつれて大人の数が減っていく。その様子がまるで富士山のような形をしているからだ。

そして医療技術が進歩し、先進国の仲間入りをし始めた国は坪型。生まれてくる子供の数が徐々に少なくなり、逆に大人の数が増えていく。

先進国になると、どこもかしこもつりがね型になる。医療技術の発達で寿命が伸びて老人の数が増え、逆に子供の出生率が落ちて少子高齢化社会になった様だ。老人や定年退職寸前の労働者が多く、歳が若ければ若いほど人口が少ないというアンバランスなグラフだ。

だが政府の少子化対策は成功し、出生率は徐々に伸びはじめた。その結果、新たな「砂時計型」なるグラフまで作られたほどだ。老人の数が多く、20代程で最小だが、そこから下に行くにつれ子供の人口が増えている、という砂時計のような形の人口グラフだ。

「でも少子高齢化を解決した代わりに、国の財政赤字はともでもないことになった。当然よね。老人には年金払って、子供には補助金を払ってるんだもの。いくら子供がたくさん生まれたからって、彼らがすぐに働いて税金を納められるわけじゃない。20歳にならないければ納税の義務は生じない」

で、日本は現在数百兆円の赤字赤字を抱える国家になってしまったわけだ。

さらに言うなら、少子化対策がもたらしたのは財政赤字だけではない。人口過密や将来予想される就職難までもたらしてしまった。

この館津駐屯地は、戦争前には5000人を越える生徒を抱える高校だった。そして太郎が（一日だけ）通っていた高校も、一学年500人というトンデモな生徒数だった。

「太郎、いきなり人口が増えたら、就職はどうなると思う？ 戦争前は不況の上に技術の発達で人がいらない仕事ばかり増えていったんだよ。就職口が減ることはあっても、増えることはない。もしそこにこのベビーブームで生まれた若者達が、就労年齢に達したら、いったいどうなる？」

「……そりゃ空前の就職難と、さらなる財政赤字だな。職につけない若者のために生活保護をしなきゃならないが、かといって就職口が増えるわけでもない。就職出来ないから当然税金も納められない」

雪だるま式に赤字が増えていくだろうな」

「そう、その通り。日本じゃ一端始まった事を止めるのは難しい。これまで何度も当時の与党がこれ以上の人口増加を止めるために子供への補助金の廃止をしようって案が出たけど、そんなことを言ったら支持率が急落した。だから誰も、将来の破綻が目に見えてるのに止めようとしなかった。消費税率引き上げの問題と同じだよ」

「さて。まさか、この戦争はそのために関引き起こされたのか!？」

太郎がそう聞くと、末恵は笑って答えた。

「そんな訳無いでしょ。だいたい、異世界への門を作る技術が出来たんなら、こっちから侵略してるでしょ。普通は増えすぎた人口を、異世界に移住させるとか何とか考えるわよ」

「そうか……。じゃあこの戦争はアザーズの方から吹っかけてきたんだな？」

「ええ。でも原因がどうであろうと、結果は変わらない。政治家連中はこの戦争を利用して、将来訪れるであろう様々な問題を解決しようとしている。大体未成年を自衛隊員にするなんて最初からおかしいと思わない？体力だつて大人に劣るし、本来徴兵されるべき大人達はまだまだたくさん生きている。」

これはね、戦争を利用した口減らしなのよ。今のうちに子供を戦場に送ってどんどん死なせておけば、就職する若者が減って将来の就職難を回避出来る。結婚して子供を産む若者の数も減るから補助金も増えなくなる」

「待った。それじゃ、もし若者がたくさん死んで逆に人口の維持が難しくなったらどうなるんだ？」

「ならないわよ。上は適当な数まで若者が減ったら、アメリカにでも頼んで門に核ミサイルでも撃ち込むでしょ。どうせ門の向こうで起きたことは、こっちに関係ないんだろっし」

「マジかよ？　じゃあなんで今までほったらかしにしてたんだ？」

どうせ門がある島後にもう島民はいないんだし、さつさと巡航ミサイルでも何でも撃ち込めばいいのに」

「下手に門を攻撃したら何が起きるかわからないってことも一因だけど、さつきも言ったようにまだまだ戦争を終えて欲しくない人達がたくさんいるのよ。特に防衛産業に関わりをもつ企業の社会とかね」

日本の防衛産業は、アザーズ侵攻以降急激に発展した。それまでは武器輸出三原則に従って輸出禁止状態と言ってもよく、少ない防衛省の受注を分け合っていた企業に降って湧いたのが、アザーズ軍との戦争による特需景気だった。

それまで戦車は月一両、装甲戦闘車は年に数両のペースでしか作られていなかった。戦闘機は財務省が予算削減だなんだと調達数を削ったせいで単価が何兆円も値上がりし、小銃は他の先進国と比べて5倍以上高かった。国産の航空機なんて防衛省くらいしか買ってくれないので、いくつもの会社が分け合って機体を製造していたほどだ。

それが戦争に伴って損耗する兵器や消費された弾薬の量が急激に増えた。今までの生産ペースでは間に合わず、あちこちの会社が生産ラインを増やしたほどだ。

しかも徴兵による自衛隊員の増加が、さらに大量の武器弾薬兵器を必要とした。小銃はそれまで一年で製造していた数を一ヶ月で製造したことがあったし、弾薬の消費も激しかった。

で、防衛企業はこの好機を逃さなかった。戦争中なら政府が確実に製品を買い取ってくれるし、外国から兵器の受注を受けた事もあった。防衛産業に関係する企業の株は連日上昇、投資しても失敗しな

いとまで言われるようになった。

「防衛産業ってのはね、いくつもの中小企業が連なって作ってるものなの。例えば戦車にしても、車体の装甲板、砲、射撃統制装置の精密部品、エンジンエトセトラよ。中小企業なんて、今までで一番仕事の受注を受けたといってもいいわね」

「だから、戦争を終わらせたくないのか」

「そうよ。今はリーマンショック以降空前の好景気よ。仕事が増えてどこの企業も収益が黒字になり、法人税の額はとんでもないことになってる。企業の業績が上がってるから社員への給料もいい。政府が税を引き上げても、まだまだ余裕なほどね。」

しかも日本を代表する大企業はどれも大なり小なり防衛産業に関わっている。今戦争を終わらせたら、バブル崩壊よりも最悪な不況になるわね。それまでの受注が途絶える。兵器ってのは作り方が特殊だから、簡単に生産ラインを転用することは出来ない。企業は確実にどこも買ってくれない在庫と何にも使えない生産ラインを抱えて、どんどん倒産するかもね」

未恵は吐き捨てるように言った。

「だから誰もが戦争を終わらせたくないの。いくら自衛隊員が戦場で死んでいても、人権が無視されても、当事者じゃないから関係ない。しかも国民投票で徴兵されるのは確実に自分達ではなく子供。大多数の国民にとって、戦争は金儲けの道具ではないの」

「だが戦死者の遺族だっているだろう。彼らが黙っているはずがない」

「そりゃ最初は黙ってないで、抗議するでしょうね。でも戦死者の遺族には保険やら弔慰金やら遺族年金が支給される。」

それに戦争で人が死ぬのは当然でしょ？　きっと周りの人達にこう言われる、『あなたのお子さんは、私達を守るために立派に戦って

戦死されました。私達も頑張りましたよ」ってね。そうすれば自分の子供は立派に戦って死んだって思ってた納得するわ」

去る者日々に疎し。未恵はそう呟いた。

自衛隊の奮戦によって、戦場は中国地方に限定されている。東京など多くの人が住んでいる地方は、ほとんど戦争の影響を受けていない。

それがこの戦争を長引かせている一因にもなっているのだろう。多くの大人にとって戦争は身近なものではなく、遠い外国の事がテレビの中のこのようにしか思えないのだ。

アザース軍が侵攻してきて自衛隊がクーデターで政権を奪取し、その後選挙で公正に選ばれた与党が最初にやったことが徴兵制度の施行の国民投票だった。大人達は自分達が戦場に行きたくないから反対票を投じて否決した。だが自衛隊員の数はどんどん減っている。なのに大人達は戦おうとしない。

早い話しが、子供達にババを押し付けたのだ。大人達にとって子供は自分の家族ではなく、自分の従属物のような扱いだっただ。

子供はいくらでもいる。しかも子供は選挙権を持っていないから、国民投票で徴兵制度の施行が決まっても文句の言いようがないので、必要な数の自衛隊員を確保出来る。自分達には何の影響もない、ラッキー！！

これがほとんどの大人の考えだと未恵は言った。適度な人口調整もできる、景気は浮揚する。子供達が前線で死んでいくなか、大人達は後方で株を売買するだけでいい。

子供の人権？ なにそれおいしいの？ 子供が法律で人権が保障されているとかなんだと言ったところで、国会でそれを書き換えてしまえば問題はない。

そもそも「公共の福祉」という便利な言葉がある。個人の権利を正當な保障と引き換えに制限できるこの言葉は、従来は財産権などにしか適用されなかった。だが今は戦時、この言葉を拡大解釈すればいい。

「旧ソ連で、『兵士は畑から生えてくるもの』って言葉があつたけど、今の日本が正にそれよね。国を守ろうって気持ちで戦ってくれる大人の隊員もいるけど、それ以外はほとんどがクズよ。大人は自分達のことしか考えてない」

「じゃあ、テレビとかで戦争反対って言ってる国会議員はどうなんだ？ 与野党問わずたくさんいたはずだが」

「あれはあくまでポーズよ、ポーズ。『戦争万歳』なんて言ってる見るからに危なそうな奴に投票する人いる？ 仮に戦争が終結しても、『自分は最初から反対していた』って正義の側に立つための方便よ。皆思ってるわ、今戦争が終わったら日本は潰れるってね。」

わたし達はゴミみたいな大人達のゴミみたいな欲望のためにゴミみたいな戦場に送られて、ゴミみたいに死んでいくのを義務づけられてるようなもんだわ。だからわたし達はこのゴミみたいな戦場から五体満足で生還して、ゴミみたいな大人達に復讐しなくちゃならない。だから太郎、あんたも死んじゃダメよ」

末恵は散々ゴミゴミと女の子が本来言うべきではない言葉を口にした後、スッキリしたのか帰って行った。

太郎は視線を今書いたばかりの手紙に落とした。

もしかして、自分の親も戦争がらみで儲けているんじゃないか？

そんな考えが頭をよぎると、急に今まで唯一の味方だと思っていた両親が色褪せて見えた。

「……俺達は何のために戦ってるんだよ」

そう呟くとペットボトルのお茶を一気に飲み干し、食堂の隅に置いてあるごみ箱にボトルを投げた。

投げられたペットボトルは綺麗な音を立てて、ごみ箱の中に入った。人影がまばらな食堂に、渴いた音が響いた。

戦う意味（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

砲兵基地制圧作戦 1（前書き）

久しぶりの更新のせいか、元々低いクオリティが落ちてる気がします。御容赦下さい。

砲兵基地制圧作戦 1

いくつものヘリコプターのローターが回転する空気を震わせる音が、東の方が明るくなりはじめた空に響いていた。

「……なんつーか、ベトナム戦争みたいだな……」

そう呟いたのは、迷彩服に鉄帽^{ヘルメット}、防弾チョッキを着用して手には小銃を握る山田太郎（本名）だった。

「まったくもってその通りね。適当に撃つてもどれかにあたるんじゃないかしら」

そう呟いたのは、太郎の（一応）上官である勝田未恵だった。

未恵と太郎、そしてその他のBチームの面々はアイドリング状態のUH-1J改ヘリコプターの兵員室に乗り込み、スキッドを足場にした兵員室の床に座っている。操縦席では操縦士と副操縦士の二人が離陸前の最終チェックを行っており、機上整備員は外に出て搭載された兵器の点検をしている。

離陸の準備をしているのは、Bチームの乗ったヘリコプターだけではない。元々高校だった館津駐屯地のグラウンドにはCH-47JA大型輸送ヘリが駐機して後部ハッチから隊員や車両が乗り込み、駐屯地のすぐ脇にある片側2車線の国道の電柱やガードレールなどは取り払われ、攻撃ヘリコプターや汎用ヘリコプターが猛然とローターを回転させいつでも離陸出来る態勢を整えていた。

太郎が「ベトナム戦争みたい」と言ったのは、駐屯地内外に着陸しているヘリコプターの数が尋常ではなかったからだ。

観測（偵察）ヘリコプター4機。

攻撃ヘリコプター8機。

汎用ヘリコプター24機。

大型輸送ヘリコプター8機。

合計44機ものヘリコプターが地上でアイドリングしているのだ。空気を震わせるローター音のせいで会話するには顔を寄せるか大声で怒鳴らなければならず、ヘリに乗り込んだ隊員達は無線機を兼ねた機内通話装置ICSを使わなければ互いの意思疎通すらできない。

こんなに多数のヘリコプターが離陸準備をしているのは、別に陸上自衛隊の総合火力演習が行われるからではない。演習のためでもない。二週間前から始まった、アザーズ軍の占領地域に対する攻勢作戦のためである。

自衛隊が赤早汰市を占領していたアザーズ軍を掃討した後、さらなる攻勢作戦が発動された。アザーズ軍が占領した中国地方を奪還する事が目的の作戦は、当然激しい戦闘を伴っていた。連日連夜戦闘が続き、自衛隊はゆっくりと、しかし着実に占領された地域の奪還を進めていた。

今回の攻撃目標は鳥取県西部にある敵の砲兵基地だった。

この砲兵基地はアザーズ軍が異世界から現れ、日本に侵攻してきた初期に作られたものだった。

平野に作られたこの砲兵基地には榴弾砲やロケット砲などが多数配備され、アザーズ軍の戦闘が行われる際の火力支援拠点となってい

た。欧米や日本が保有する155mm榴弾砲の通常弾の射程は約30から40キロメートル、鳥取県の大半が射程内に入る。アザーズ軍の兵器は地球側のもので大差ないため、アザーズ軍が装備する榴弾砲の射程も同じくらいである。噴進弾を使用すれば射程は60キロほどまで延長されるため、この砲兵基地が残っている限り、アザーズ軍は鳥取県の大半をカバー出来る。

鳥取県の各地を占領するアザーズ軍は自衛隊との戦闘が始まると、この砲兵基地からの支援を要請していた。そのため自衛隊側も少なからぬ損害を受けていたため、この砲兵基地の制圧は急務とされていた。

そして二日前、自衛隊はようやく砲兵基地に一番近いアザーズ軍の占領地域を制圧する事に成功した。都市を占領していた敵は砲兵基地まで後退し、さらに島根の本州におけるアザーズ軍の拠点からも基地の防備を固めるためとおぼしき部隊が砲兵基地に向けて出発した。

増援部隊が砲兵基地に到着しては、基地の制圧は難しくなる。それどころか砲撃による支援を受けて一気に反転攻勢に出てくるかもしれない、即座に砲兵基地に対して攻撃命令が下された。

Bチームの所属する連隊はこの作戦に投入された。地上を車両で移動しては時間がかかるし敵の砲撃を受ける。アザーズ軍が占領地域から撤退した後も砲撃は行われ、どこに砲弾が飛んで来るかわからない状況だった。弾着観測を行う航空機や地上部隊がいなかったため照準は目茶苦茶だったが、それでも砲撃は脅威となっている。よって今回はヘリボーン作戦が行われる事になっていた。ヘリボーンとはヘリコプターによって、大量の兵員を一気に送り込んで制圧するという作戦である。

第58連隊は志願隊員によって構成される陸自正規部隊の空中機動旅団（アメリカ軍の空中騎兵部隊のようなもの）と目標地点の手前

で合流し、空自の攻撃機と海自の護衛艦のトマホーク巡航ミサイルによる爆撃で敵の対空兵器を無力化した後、着陸して制圧する。これが今回の作戦である。ヘリコプターというのは固定翼機に比べて速度が遅く、対空火器の影響を多大に受ける。そのためあらかじめ対空兵器を破壊しなければ、着陸はおろか飛行すら困難になるのだ。幸い砲兵基地には、Bチームが破壊したような長距離対空ミサイルは配備されていない。なので攻撃機による射程外からの爆撃が可能である。

代わりに砲兵基地には多数の空戦型E M Wが配備されている。激しい空中戦が行われる事が予想される。空戦型E M Wは地球の戦闘機に比べて速度や航続距離の面で劣るが、燃料補給施設などがあれば大抵の場所からの離着陸が可能である。地球側の垂直離着陸戦闘機VTOLよりも配備出来る環境が幅広い。

今回アザース軍の砲兵基地を制圧すれば、敵の本州における本拠地の米子空港までは目と鼻の先である。アザース軍も地球側的大型輸送機のような航空機を保有しており、門のある島後から直に大量の物資や兵員を空港まで運んでいる。輸送船も保有しているが、今までに出現した回数は少なく、また海上自衛隊の潜水艦に撃沈される事があるので物資輸送には航空機が使われる事が多い。

なので空港を制圧すれば、敵は補給手段を失うことに等しくなる。アザース軍は占領中、最初に上陸した境港に駆逐艦や輸送艦が出入り出来る環境を作り上げた。米子空港からの距離はそう離れてはおらず、空港を押さえればそのまま境港にまで侵攻することも出来る。つまり米子空港を押さえれば、アザース軍は拠点を失って隠岐諸島の島後に退却せざるをえなくなるのだ。逆に敵の増援が砲兵基地に到着した場合、アザース軍は砲撃支援を得て自衛隊が奪還した地域の再占領に踏み出すだろう。なので今回の砲兵基地制圧作戦は、今後の趨勢を決める上で重要になってくる。

全てのヘリへの燃料や弾薬の補給が終わり、管制塔から離陸許可が下りる。一機、また一機とグラウンドやヘリポートとなっている国道から離陸していき、西に向かって飛行する。

Bチームの乗ったUH-1J改もメインローターの回転数を上げ、離陸する。総勢40機以上のヘリコプターは途中で編隊を組むと、敵のリーダーに見えないよう低空を飛んで西に向かう。

今回Bチームが乗っているUH-1J改「ヒューイ」のパイロットは、何の因果か太郎を館津駐屯地に運んできたり対空ミサイル陣地制圧作戦の際にBチームを輸送した、鎌田達だった。なんだか腐れ縁みたいなものを感じるな、と太郎は頭の片隅で思った。

UH-1J改ヘリコプターは、傑作汎用ヘリコプターであるUH-1を日本が改良して使用していたUH-1Jヘリコプターを更に改良した物だ。度重なる改良によって内部構造は原形機から大分掛け離れている。

UH-1の原形機が初飛行したのは、朝鮮戦争が集結して間もない1956年だ。それから半世紀以上に渡って、アメリカを始めとする各国の軍隊や警察、民間で使用されている傑作機である。構造が簡単で量産性に優れ、すでに各バリエーションを合わせて16000機以上が生産された。

ベトナム戦争は初めてヘリコプターが大々的に運用された戦争であり、UH-1は大活躍した。ベトナムの地上はジャングルで移動が困難なため、空中から兵士を送り込む必要があり、固定翼機と違って離着陸するのにそれほど広いスペースを必要としないヘリコプターは兵員輸送にもってこいだったのだ。

ベトナム戦争中にアメリカ軍はUH-1を、まるで空を覆うほど大

量に使用した。戦争中に撃墜された機体が数千機という数字から見ても、UH-1が大量に生産されていた事がわかるだろう。

UH-1J改は、それまで陸上自衛隊が保有していたUH-1Jの欠点を改良した機体だ。リーダー等の電子機器を最新の物に更新し、対空ミサイルから機体を守るチャフやフレアを装備した。更に、今までは単発だったエンジンが双発になった。

エンジンが一基しかないという事は、何らかの原因でエンジンが停止したら即座に着陸するかエンジンリスタートを試みなければならぬということだ。実際に一基しかないエンジンが停止したせいで墜落事故などが起きていたし、そもそも戦場で使用する以上被弾してもおかしくない。

なのでエンジンが二基に増えた。これで片方のエンジンが停止してももう片方で飛行を継続出来る。エンジンは小型化されながらも出力は十分あり、改良前と搭載可能な重量はほとんど変わらない。

今回機長の鎌田と副操縦士の大谷、そして機上整備員の早田が操縦する呼び出し符号「モスキー02」には胴体下に補助翼スタブウイングが取り付けられ、そこにミニガンやロケット弾ポッドをぶら下げていた。これはBチームを着陸地点 LZまで送り届けた後、そのまま地上部隊に近接航空支援を行うためである。

第58連隊を空輸する編隊の中にはエンジンを双発にしたAH-1S改「コブラ」攻撃ヘリコプターも加わっているし、目標地点手前で合流する空中機動旅団の部隊にもAH-64D「アパッチ」攻撃ヘリコプターが護衛についている。だが攻撃ヘリコプターは陸戦型や地上掃射型のEMWの撃破に主に投入される事になっているので、地上の隊員達を支援する余裕があるかはわからない。ということで輸送ヘリを武装させ、地上部隊の直援に当たらせるのだ。

ヒューイは「汎用」ヘリコプターなので、機関銃から対戦車ミサイルまで搭載しての戦闘が行える。戦闘専門の攻撃ヘリコプターに比

べて武装搭載量や機動性、防御の面で劣るが、いざという時に大量にヒューイを武装させて軽攻撃ヘリコプターとして使用する事が可能だ。

館津駐屯地を離陸したヘリコプターの編隊は、OH-6D「カイユース」観測ヘリを先頭にして、低空を敵の砲兵基地に向けて飛行していく。開かれたままのスライディングドアからヘリコプターの大編隊を見た太郎は、何となく昔見た「チャーリーは波に乗らん！」とか、「朝のナパームの香りは格別だ！」とか台詞を吐く、サーフィンをするために村を爆撃する中佐が出て来るベトナム戦争中の映画を思い出した。

「『ワルキューレの騎行』でも流す？」

まるで頭の中を覗いたかのように言った末恵に、太郎の心臓は飛び上がった。

「なんでわかった？ お前は超能力者か？」

「いや、わたしだってあの映画の事を思い出してたのよ。まあわたし達の相手はベトコンじゃなくて、異世界の最新兵器で武装した軍隊だけだ」

「なんか、この光景を見ると本当にあの映画を思い出すな。というか、本当に自衛隊は人手不足なのかと思っちゃまう」

「一系纏わぬ、よく訓練された見事な変態の飛行ね」

「それはただの露出狂だろ」

「噛んだのよ。一系乱れぬ、よく訓練された見事な編隊飛行ね」

一体どうやったら「一系乱れぬ」を「一系纏わぬ」に、「編隊」を

「変態」に噛むのか。太郎は物凄くツツコミを入れたくなった。が、我慢する。Bチームでツツコミのポジションにいる常識人は太郎くらいしかない、一々皆の放つボケにツツコミを入れたら戦闘前に疲れてしまう。

「にしてもコールサインが蚊モスキートとはね……」

『対空砲には気をつけなきゃな。ま、安心しろ。しっかり送り届けてやるから』

末恵の呟きをICS越しに聞いた機長の鎌田が笑いながら言った。鎌田達は何だかんだでBチームと接点があり、しかも歳も近いという事でかなり親しくなっている。安心して任せようと太郎は思い、高速で真下を流れていく地面を眺める。

敵のレーダーに引つ掛からないためには、機体をステルス化するか超低空を飛ぶしかない。

ヘリコプターの編隊は地上から15メートル付近の高度を地形に沿って、一系乱れず編隊を組んで飛んでいる。その事実が過酷な戦場を生き残れたパイロット達の技量を表している。

自衛隊ではパイロット不足も深刻化していたので、徴兵された者の中から素質がある者を集め、最初からパイロットとして教育することで訓練期間を短縮していた。通常陸上自衛隊のパイロットは地上部隊を経験した後隊内から選抜された志願者が訓練学校に送られるのだが、それではヘリコプターがあっても数年は飛ばせる者がいなくなるので緊急の措置だった。

そのため正規部隊に比べて未熟なパイロットが多く、多数の機体が撃墜された。まるで数千機のヘリコプターが撃墜されたベトナム戦争のように。

しかし生き残ったパイロット達の技量は必然的に高くなった。いや、素質と技量があったからこそ生き残れたと言うべきか。とにかくパ

イロット達は他の徴兵された隊員達と同じく「実戦は最高の訓練」を地で行き、今では正規部隊に負けない程の技量を身につけている。

第58連隊の隊員達を乗せたヘリコプターの編隊は、目標の敵砲兵基地から20キロ程離れた場所で一旦前進を止めた。正規部隊の空中機動旅団と合流するためだ。幸い敵砲兵基地は標高1700メートルの山を隔てた反対側にあるので、山の陰に留まっている限り敵に発見される事はない。

『おお……。すごいな……。』

開いたままのドアから外を見た洋二が、馬鹿みたいに口を開けて呟いた。

南の方角からゴマ粒程の大きさの飛行物体がいくつも飛んできていた。それらは山と山の間を通る自動車道に沿って低空を飛行し、ホバリングする第58連隊の編隊に近づいて来る。

数分もしない内に、太郎はその飛行物体がヘリコプターである事はつきり視認した。ヘリコプターの数はこちらとさほど変わらない、空中機動旅団の編隊だ。

空中機動旅団とは、ヘリコプターによる空中機動作戦を主目的とした部隊だ。ヘリにより素早く、様々な場所へ部隊を展開させる、米軍で言うところの空中騎兵旅団である。

元々陸上自衛隊ではこういった部隊を創設すべきだという意見が何度も出ていたのだが、予算の問題や専門に使用出来る程のヘリが確保出来ないという事で何度も断念されていた。

だが戦争が始まりヘリコプターが増産され徴兵で隊員が増加した事

により、ようやく空中機動旅団は設立された。隊員のほとんどがレンジャー徽章を持ち、高い機動性と戦闘能力を誇っている。

あつという間に、空中機動旅団の編隊は第58連隊の編隊と合流した。

第58連隊を乗せているヘリがカイユースやヒューイ、コブラと改修はしてあるものの旧式であるのに対し、空中機動旅団の編隊はその全てが最新鋭の機体だった。

観測ヘリはまるで攻撃ヘリのような外見のOH-1「ニンジャ」。汎用ヘリコプターはUH-60JA「ブラックホーク」。そして護衛の戦闘ヘリは赤早汰市の戦闘でも活躍したAH-64D「アパッチ」。唯一同じなのは、機体の前後にローターがある大型輸送ヘリのCH-47JA「チヌーク」くらいだった。

これは正規部隊に優先的に新型の機体や兵器が配備されているからの構成だった。いくら防衛予算が増えたからと言って、徴兵された隊員で構成される部隊にまで最新鋭の高価な機体を配備しては数が足りなくなる。そのため旧式装備を改修した物は特別自衛官の部隊に、新しい装備は正規部隊に優先して配備されているのだ。新型装備が正規部隊に配備完了し次第、特別自衛官の部隊にも回って来るという事である。

ヒューイとブラックホークでは、構造が簡単で量産性に優れたヒューイの方が安価である。生存性や航続距離等の面で性能はブラックホークの上だが、それゆえ高価だ。ヒューイを徹底的に改修してブラックホーク並の性能を持たせる事も可能だが、それにも限度があるし余計に費用もかかる。

という訳で高性能かつ高価な装備と、性能はそこそこだが安価な装備を混用する「ハイ・ロー・ミックス」という編成が取られているのだ。

『わーお。西側ヘリコプターの博覧会みたいだな』

『俺もブラックホーク操縦してえなあ……』

等という呟きが、操縦席から聞こえてきて太郎は苦笑した。やはり男子はメカに興味があるし、誰でも新しい装備を使いたいと思うのは当然の事だろう。

今回の作戦の流れは、まず夜明けと同時に空自のステルス機が砲兵基地のレーダーをミサイル攻撃した後、海自の護衛艦が巡航ミサイルで基地の主要な施設を破壊する。その後空自の攻撃機の航空支援を受けつつ、第58連隊と空中機動旅団は基地の近くに着陸して基地を制圧するという予定だ。基地を制圧し砲撃の脅威が無くなった後は、他の部隊が基地の警備を固めるため増援として車両で来る。ヘリは運べる人数が少ないので、人員を運ぶには地上をトラックなどで輸送するのが一番なのである。

砲兵基地には警備の部隊の他、先日の戦闘に敗北して撤退してきた部隊などが合流し、今では一個大隊程の戦力が駐留しているという。EMWも陸戦型、地上掃射型、空戦型と多数配備しているとのことだ。他にも基地防空用の短距離地对空ミサイルなどの対空兵器が多数あるのは間違いない。

それらの兵器は巡航ミサイルや爆撃で破壊される手筈になっているが、完全に破壊されなかった場合こちらの損害は増えるだろう。今まで地球で行われてきた、先進国対発展途上国という図式ではない。第二次世界大戦後行われる事はほとんど無かった、先進国対先進国の構図になっているのだ。

例を挙げると、湾岸戦争やイラク戦争では多国籍軍の損害は少なく一方的とも言える戦果をあげた。それは敵の兵器が旧式だったり、

補給が確率されていなかったためだ。だが今日本に侵攻してきているのは、地球の最新兵器に負けず劣らずの異世界の兵器で武装した軍隊だ。戦闘は激しくなり、一方的な勝利を上げる事は出来ない可能性が高い。

（死んでも代わりはいる、か……）

太郎はふと、先日末恵に言われた事を思い出した。この戦争は人口抑制政策に加え、低迷が続いていた日本経済を浮揚させるために利用されていると末恵は言っていた。

しかも人が死ねば死ぬほど経済は浮揚し将来の財政危機を回避出来るという構図だ。今回の作戦で何人が死に、そしてどれだけの大人が笑うのか。太郎はそれを考えると胸糞悪くなり、そして絶対死んでたまるかという気持ちになった。ここで死ねば、将来ある若者を戦場に送って自分達だけのうのうと安全な場所で金儲けに走っている大人達の思惑通りになってしまう。太郎はそれが許せなかった。

思えば、こういった大規模な攻勢作戦に参加するのは久しぶりである。一ヶ月前の街の奪還作戦時は川の対岸から銃撃するだけで、被害が出て先に撤収している最中に待ち伏せ攻撃を受けて散々な目にあった。その後の長距離対空ミサイル陣地への攻撃も、捨て駒同然の少数潜入だった。赤早汰市での戦闘は、既に友軍が敵を街から追い出した後の残敵掃討任務だった。

『何か聞こえないか？』

恒の言葉に、太郎は耳を澄ませた。すると数十機のヘリのローター音に混じり、遠くから花火が鳴るような音が聞こえてくる。

しかしここは戦場だ。花火を打ち上げる酔狂な奴なんていないので、

聞こえてくるのは爆弾やミサイルが炸裂する爆発音に違いない。既に空自や海自が、ヘリ部隊の到着前のミサイル攻撃を行っているのだ。

砲兵基地制圧作戦 1（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

砲兵基地制圧作戦 2

アザース軍砲兵基地へのヘリボーン作戦が開始される30分程前、二機の戦闘機が航空自衛隊岐阜基地を飛び立った。

二機の戦闘機は南に飛行して一端太平洋上に出、それから北々西方向に針路を取った。

アメリカ軍や航空自衛隊で採用されているF-15戦闘機に似つつもどこか違う印象を与えるシルエットを持つその戦闘機は、F-15SE「サイレントイーグル」と呼ばれるステルス戦闘機だった。

航空自衛隊は老朽化したF-4EJ改「ファントム」戦闘機の後継機となる機体としてアメリカのF-22「ラプター」を導入しようとしていたが、イージス艦の機密漏洩事件や生産価格の高騰などによってラプターの導入は困難である事が確定になった。ラプターより安価なF-35「ライトニング？」を導入するという話もあったが、ライトニング？は国際共同開発の機体であり、各国の異なる運用思想がぶつかり合って生産と配備が遅れていた。そもそも日本は開発に出資していないので、日本への輸出が認められたとしてもかなり後になる事が予想された。

そのため航空自衛隊は現在の主力戦闘機であるF-15の発展型であるF-15E「ストライクイーグル」を導入する事を決定した。戦闘爆撃機であるF-15EはF-15と機体構造が60パーセント以上異なり、また最新の電子機器にアップグレードしていたためもはや別物と言ってもいい機体だった。しかし格納庫などの施設はF-15の物がほとんどそのまま利用出来、しかもF-15がベースであるため全く別の機体を導入するよりは生産や、パイロットと

整備士の教育が容易であるとの判断が下されたのだ。

ちょうどその頃、食料や燃料の援助を求めて恫喝の弾道ミサイルを撃ちまくる某国のおかげで、自衛隊が敵基地攻撃能力を保有する事についての議論が深まっていた。自衛隊は憲法上先制攻撃と国外での戦闘を禁じられているが、日本を攻撃しようとしている、もしくは攻撃を受けている状況で増援を送ろうとしている敵の基地を攻撃する事は問題ないとの政府見解が下された。

しかし保有しているF-2は対艦攻撃を主目的としており地上攻撃には兵器搭載量が足らず、F-4EJ改は半世紀近く前に原型機が飛行した機体で老朽化が進んでおり、その点でも長距離飛行が可能で兵器搭載量が戦闘爆撃機の中でも最大のF-15Eに白羽の矢が立ったのだ。

異世界戦争が勃発した時には、F-15EJ（日本向けの機体なので末尾にJが付いていた）が実戦配備されてから2年が経過していた。地球の戦闘機に相当する空戦型EMWを保有し、大規模な攻撃を仕掛けて来るアザーズ軍に対し、自衛隊はステルス戦闘機を保有することが必要だと判断した。実際に北アメリカ戦線でも最新鋭のF-22が戦果を上げていた。

前述の理由から本格的なステルス戦闘機は導入出来ず、そのためF-15Eが原形であるF-15SEの導入が決まった。

F-15Eと内部構造はほとんど同じであり、原型機のF-15などと操縦方法もほとんど変わらないので、F-15SEのパイロットと整備士の育成は短期間で済んだ。今では一個飛行隊程度のF-15SEが、パイロットと共に実戦配置されている。

ただ生産数が少なく特殊な機体であるため、所属は航空開発実験集団隷下の飛行開発実験団となった。本格的とは言えないもののステ

ルス戦闘機であるため、それまでの航空機とは異なる運用方法が必要だと考えられたからでもあった。

飛行開発実験団とはその名の通り、急上昇や急降下、最大速度での飛行や限界高度までの上昇が機体にどのような影響を与えるかなどの実験を行う部隊である。また、新たに開発されたり導入された機体や兵装の試験を行う事もあり、全国から技術の高いパイロット達が集まっていた。

今回飛行開発実験団に所属する二機のF-15SEに与えられた任務は、ヘリボーン部隊に先だってアザーズ軍砲兵基地のレーダーを攻撃する事だった。砲兵基地に配置されたレーダーはかなり遠くまで探知することが可能であり、低空飛行するヘリコプターでも接近すればたちまち発見される恐れもあった。しかも砲兵基地には拠点防空用とはいえ対空兵器がいくつも配備されており、それらはヘリコプターにとって十分な脅威だった。

そこでF-15SEがステルス性を活かして砲兵基地まで接近し、対レーダーミサイルを発射する。レーダーを破壊した後海上自衛隊のイージス艦がトマホーク巡航ミサイルで砲兵基地の対空兵器や駐機中のEMWを破壊し、そしてヘリボーン部隊が空自の支援を受けつつ基地の制圧にかかるという三段構えの作戦だった。

飛行速度がジェット戦闘機並しくないトマホークは、発見されればそれこそ肩撃ち式の対空ミサイルでも撃墜されてしまう。なので対空レーダーを破壊してトマホークの接近を感知させない、感知したとしても手遅れにさせる必要があるのだ。

対空兵器を搭載した車両にも照準用のレーダーが搭載されているだろうが、あくまで車載レーダーなので精度も探知可能範囲も、地上に設置してある大型レーダーほどの性能はないと思われた。

岐阜基地を飛び立つた二機のF-15SEは太平洋上に出ると、針路を北々西に取って紀伊水道上を飛行し、淡路島を通過して岡山県上空に侵入した。岡山自動車道に差し掛かると、パイロット達は機体を降下させた。

わざわざ太平洋上に出たのは、アザーズ軍にレーダーで探知される事を警戒したためだ。レーダー波は物体を透過出来ないのも、山や水平線の向こうを探知は出来ない。そのため広範囲までレーダー波を飛ばすため山頂など高い場所に設置したり、さらには航空機に搭載する必要があった。

しかしアザーズ軍が中国山地の山頂のあちこちに設置したレーダーは最近の戦闘で破壊もしくは修理中であり、アザーズ軍は広範囲を探知する事が難しくなっていた。だが念には念を入れ、遠回りで目標に接近する事になった。

ただし日本海沿岸は島後に設置されたレーダーや艦船、航空機によって常時監視されており、空自の小松基地の機体は出撃される度に探知される羽目になってはいるが。

それでも青森の三沢基地から出撃した第3航空団のF-2支援戦闘機が対艦ミサイルを搭載し、陽動の為に北から島後に向かっている。アザーズ軍のレーダーや航空機の注意はそちらに向かっているはずで、より侵入しやすくなる事が予想された。

敵に接近を気づかれぬために無線が封鎖されているのではるか後方を飛行している早期警戒管制機AWACSの支援は受けられず、パイロット達はブリーフィング時に頭に叩き込んだいつ、どこで降下するかという情報に頼るしかなかった。だが飛行開発実験団という部隊に集まっているパイロット達にとって、その事はあまり問題にならなかった。

低空を飛行するのもレーダーに引掛からない為の措置だ。F-15SEはエアインタークの形状変更や、垂直尾翼を外に傾けたりしてステルス化を計っており、正面限定ならF-22並のステルス性を発揮する事が出来た。

しかしステルス戦闘機といってもレーダー波を反射すれば大きな鳥程度の大きさでレーダーに映ってしまう。あちこちのレーダーを破壊されているアザーズ軍が、接近してくる大きな鳥のような物体を見逃してくれる保障もない。見つからない一番の方法は、レーダー波が飛んで来ない低空を、地面に沿って飛行することだった。ステルス性は、その補助のようなものだった。

やがて、ブリーフィング時に頭に叩き込まれたミサイル発射地点に近づいてきた。胴体側面の兵装庫ウェポンベイを開き、中からアームでぶら下げられたAGM-88HARM対レーダーミサイルが現れる。

従来戦闘機に武装を搭載するには、胴体や翼にハードポイントを設けてそこにぶら下げるといふ方法しか取れなかった。しかし機体の外側にゴテゴテと武装を搭載しては機体の凹凸が多くなり、レーダー波をより反射しやすってしまう。

そのためステルス戦闘機では、胴体内部に兵装庫を設けて外に武装

を搭載できるようにしている。狭い機内スペースに搭載するので通常よりも搭載可能な兵器の数は少なくなるが、ステルス性は格段に上がる。アメリカが開発したF-22やF-35には、開閉式の兵装庫が備わっていた。

しかしF-15SEの原型機であるF-15が開発された時代にはステルス機概念すらなかったため、当然兵装庫なんて搭載されていない。機内に作るうにもスペースがなく、そこで出された案が機外固定増槽を兵装庫として転用する案だった。

コンフォーマルタンクとはエンジン側面にぴったり張り付くように取り付けられる燃料タンクの事であり、通常のラグビーボールを細長くしたような増槽と比べて空気抵抗が少なく、またハードポイントを消費する事もない。それどころかタンクにハードポイントを取り付ける事も可能で、兵装搭載量を増やせる利点もあった。

基となっているF-15Eには標準でコンフォーマルタンクが取り付けられており、ステルス化改修を行ったF-15SEにもタンクは残されていた。ただしタンクの内部には燃料ではなく、各種兵装が収納されることとなった。タンクはステルス性を保つためにやや角張っていて、兵装を直接機外に搭載するよりもステルス性が高い。

AGM-88 HARMはアメリカで開発された対レーダーミサイルだ。対レーダーミサイルとはその名の通り、敵のレーダーが発するレーダー波を辿って行って破壊するミサイルの事である。レーダー波だけでなく通常の無線交信や妨害電波すら、その発信源を突き止めて破壊してしまう。

その性質上、HARMは敵の防空能力を奪うのに最も効果的な兵器だった。レーダーを破壊されては敵機の位置がわからず、対空兵器の照準もつけられない。

HARMはステルス機の兵装庫に搭載するには大きすぎるサイズだったので、防衛省技術研究本部ではミサイルの小型化と兵装庫の大型化が両方進められていた。そしてつい数ヶ月前に改良型のHARMが完成し、実戦で使われるのは今回が始めてになる。ちなみに協定に基づき、改良HARMの技術情報はアメリカに提供される事となる。

数日前からこの辺り一帯を飛行している対レーダー警戒機によって、アザース軍砲兵基地のレーダーの位置及び周波数は判明していた。HARMはその性質上、レーダー波や無線なら敵味方関係なく発信源に向かって飛んで行ってしまう。そのため味方が使用するレーダーや無線の周波数を設定する必要がある。

しかしこのままでは味方の周波数以外の発信源へと向かっていつてしまうので、敵のレーダー波や無線の周波数突き止めなければならない。敵が偽の電波を流し、HARMがそれをレーダーだと認識してしまう恐れがあるからだ。

そのため対レーダー警戒機と呼ばれる電子戦機を飛ばし、敵のレーダーに使われている周波数突き止める必要がある。ここ数日自衛隊はF-15Jを改修した電子戦機を飛ばしており、アザース軍の対空レーダーに使用されている周波数突き止めていた。

機体に搭載されているレーダー警戒装置が敵のレーダー波を感知したことを操縦士に伝え、低空を飛行しつつ二機のF-15SEは二発ずつHARMを発射した。HARMは事前に入力してあった敵レーダーの大体の位置及び周波数の情報に基づき、四発のHARMが放たれた猟犬の如く北西方向へと飛んでいく。二機のF-15SEは敵に発見される事を警戒してか、発射後も機体を上昇させて旋回する事なく、速度を落としてそのまま飛行していく。

発射されたHARMはすぐに、微弱なレーダー波を感知した。それがアザーズ軍の使用している周波数だと判明すると、すぐさまレーダー波の発信源に向けて低空飛行で近づいていく。

鳥取県西部に設けられた砲兵基地のレーダー担当官であるシグル「ナカト軍曹は、目の前で緑色の光を放つレーダー画面を眺めながらコップに入った水を飲んだ。彼の任務はレーダー画面を見つめて敵の接近を警戒し、レーダーが敵の接近を感知したら即座に報告することである。」

いつものように、画面を見るだけの仕事。しかしそれは重要な仕事だった。シグルが気を抜いたりよそ見をしていたら、いつの間にか基地が全滅している、なんてことがあるかもしれない。

先程から北部方面を主に警戒しているレーダーの担当官達の動きが慌ただしい。北から敵航空機が、門のある島に向けて飛行中だとシグルは同僚からちらつと聞いた。

いい加減、こんな仕事辞めたいとシグルは考えていた。

「門」を通じて「チキユウ」と呼ばれる異世界に侵攻してから、既に2年半以上が経過していた。シグルの所属する連邦軍第一軍団は「ニホン」と呼ばれる島国に派遣されていたが、狭い島国なのに今だに制圧出来ていない。

門を通じて侵攻した当初は勢いがあつた。この島国の「ジエイタイ」と呼ばれる軍隊は最初は積極的に戦闘を行う事はなく、後退と自衛行動しか取っていなかった。ジエイタイは腰抜けだと皆は感じ、一時はニホンの国土を構成する諸島の中でも一番大きい「ホンシュウ」

の半分を制圧する勢いだっただ、ある日を境にジエイタイは攻勢に出て、第一軍団は「トットリ」と呼ばれる地方にまで押し込まれてしまった。

それからはダラダラと人命を消費するだけの戦闘が続き、2年半が経過した。ジエイタイはこのところ積極的な攻勢に出ており、このままでは第一軍団はホンシュウから追い出されてしまう。

それもこれも、対空ミサイル陣地の連中がヘマしたせいだ。シグルはそう口の中に罵った。

対空ミサイル陣地の連中が気を抜いて肝心要のミサイルとレーダーを破壊されたせいで、ここ最近ジエイタイは航空機の支援を受けて積極的な攻勢に出ている。

しかもミサイルとレーダーを破壊したのはまだ子供の兵士だったという。ジエイタイは戦力不足なのか最近では少年兵も使っているらしい。

戦力不足はこっちも変わらんか。シグルはそう呟いた。

無駄に戦争が長引いているせいで兵士は次々と死に、連邦政府は徴兵制度を敷いて次々少年兵を投入してくる。地球側ではE M Wと称される人型兵器のアウル操縦士は、超能力適性のせいで元々子供と女が主体だったが、今ではちゃんと訓練されたのかすら疑わしい少年兵ばかりが送り込まれて来る。

未来を担うべき子供ばかりがいる軍隊というのは傍目から見たら末期的だが、連邦政府は取り立てて慌てるような様子はない。元々ガキは有り余っているから、多少死んでも問題ないと思っているのか。

連邦政府が異世界への出兵を決断したのは、人口増加で少なくなっ

て来ている資源や土地を獲得するためだとシグルは聞いたことがある。しかし出兵した先は連邦と同じくらいの高度な技術を持った世界であり、チキユウ各地で激しい戦闘が繰り広げられる羽目になった。

連邦が異世界への門を開く技術を持っているとは知らなかったが、開くならもつと時代や技術力が遅れた世界にすればよかった。そうすれば、激しい抵抗に手を煩わせられる事なく土地と資源が手に入ったのに。

連邦がこんな世界に出兵したのは、門が制御不能な代物だとシグルは兵士達の間で流れている噂で聞いた事がある。仲間達（それにしたって随分減ってしまったが）かつて噂していたのだが、門は連邦政府の技術で開いた物ではなく、ある日突然現れた物らしい。

だったら出兵準備をする前にチキユウ側から侵攻してくるだろう、という意見にその噂は一蹴された。確かに自然に門が開いたのなら、戦争の準備なんて呑気にしている暇はなかったはずだ。

だがそんな事はどうでもいい。どうせシグル達下端の兵士には詳しい情報なんて入って来ないし、門について詳しく知っているのも連邦軍参謀本部に勤める高級将校と政府のお偉いさんだけだと聞いている。そもそも兵士は政治家の道具、命令に従うしかない。余計な事を考える権利はない。

なんで俺はこんなところで、こんな戦争をやっているのだろうか。異世界に侵攻なんかしなければ、今頃家族との時間を楽しんでいたのに。自分と関係のない戦争で、毎日命の危険に曝される必要もないのに。

連邦軍に入ったのは、単に家計を支えるためだった。他の大多数の連中が思っているように、戦争がしたくて軍に入った訳ではない。今頃、家族は何をやっているだろうか？ つい三年前に結婚した妻

とは数ヶ月しか平穏な結婚生活を送ることしか出来ず、二年前に生まれたという子供の顔も写真でしか見たことがない。
子供は健康に育っているだろうか……？

その一瞬の考えが、シグルの視線をレーダー画面から外した。すぐに視線を戻すと、先程まで何も映っていなかったはずの画面に、4つの光点が映っていた。

哨戒飛行中のチキウウの戦闘機か？ そう考えたのも一瞬で、4つの光点は南東方向からまっすぐレーダーの中心　　つまりここに向かってきている。

「南東から高速小型物体が4基接近中！　ミサイルだと思われる！
！」

あちこちのレーダー担当官から叫び声が上がった。今までミサイルの接近を感知出来なかったのは彼らがサボっていたのではなく、レーダーに探知されない地表スレスレにHARMが接近しHARMもレーダー波を発信していなかったからなのだが、今の彼らには関係なかった。ミサイル接近中という事実だけが、彼らにとって重要だった。

基地の防空を担当する連邦空軍大佐は、即座にレーダー波の送信を停止するよう命じた。HARMは電波の発信源に向かって飛行するのだが、電波の発信が止まったら目隠しされたも同然の状態になってしまうのだ。

しかしレーダー波が停止した時には、既に4発のHARMはレーダーから10キロの地点にまで接近していた。基地に配備された対空砲が弾幕を張り、緊急発信した空戦型EMWがHARMを撃破しよ

うと手にしたガトリング砲を連射する。

だが改良HARMは大きいといっても全長4メートル弱、直径は20センチ少々なので、正面から弾丸を命中させるのは難しい。しかもHARMは音速以上で飛行しているので、当てるのは奇跡でも起きない限り困難だった。

弾幕をすり抜けたHARMはそれぞれ、事前に感知していたレーダー波の方向と強さから、基地に設置された四基のレーダーの位置を正確に捕捉していた。レーダー波が停止しても、他の手段で目標を捕捉し続ける事がHARMには重要なのだ。

対空兵器が火を噴き、曳光弾が夜明けの空にレーザーのような軌跡を描く。頭のどこかで無駄だとわかっていながらも、対空兵器の操作用員やEMWの操縦士は射撃を止めなかった。しかしHARMは忠実な猟犬の如くレーダーに狙いを定め、そして。

一方その少し前、瀬戸内海上にて。

まだ夜が完全に明けず、海面は墨汁を垂らしたかのように黒い。

大小様々な島が浮かぶ瀬戸内の中に、鋼鉄で作られた船が浮かんでいた。その名前は『あたご』。海上自衛隊の護衛艦である。

あたごの他にも4隻の護衛艦が、アザールズ軍砲兵基地の攻撃に加わる事になっていた。

『対地戦闘用意。繰り返す、対地戦闘用意。トマホーク発射用意!』

総員配置の合図である鐘が打ち鳴らされ、青い作業服に救命胴衣と鉄帽を被った乗組員達が艦内で決められた配置につく。訓練通り素早いその行動によって、総員が配置につくまで1分もかからない。

『発射弾数6発。トマホーク、1番から6番まで発射用意』

『目標位置、北緯35・XX、東経133・XX』

あたこの艦内にある戦闘指揮所^{CIC}では、トマホークへの目標位置の入力が行われていた。暗い中、レーダーの画面やランプが乗組員達の顔を照らしている。

今回あたごと3隻の護衛艦は、砲兵基地へミサイル攻撃を行う事となっていた。使用されるのはトマホークという、アメリカが開発した巡航ミサイルである。

度重なる隣国の弾道ミサイル発射実験に危機を感じていた日本では、戦闘爆撃機であるF-15Eと並行してトマホークの導入が行われた。ターボファンエンジンで飛行するトマホークの射程は、他のミサイルと比べて桁外れに長い。

湾岸戦争やイラク戦争でも米軍によって使用されたので、性能は折り紙付きだ。

『ちようかい、たかなみ、さざなみとも発射用意完了。いつでもいけます』

あたこの艦橋でCICからの報告を聞いたこの特別艦隊の司令である宮崎三郎海将補は、即座に各艦にトマホークの発射を命じた。

『一番発射用意……てーッ!』

直後、各艦の前部甲板に埋め込まれたMk・41^{VLS}垂直発射システムの蓋が開き、炎が噴射した。そしてその炎を突き破って、トマホークが発射される。

4隻の護衛艦から6発ずつ、数秒の間をおいて次々発射されたトマホークは発射用の固体エンジンを切り離し、ターボファンエンジンで推進を始める。哨戒中の空戦型EMWや破壊されていない山に設置されたレーダーに引っ掛からないよう、入力されたプログラム通りに低空まで降下する。

^{TERCOM}地形照合誘導方式で進行ルート上の地形と事前に入力された経路の地形を照合しつつ、マッハ1前後の速度で砲兵基地に接近していく。^{テルコム}TERCOMは、プログラムされた飛行ルート上の地形と実際の地形を照合し、正確に目標地点まで飛行していくシステムである。TERCOMを使用するには事前に飛行ルート上の地形データを入力する必要があるが、幸いな（？）事に戦場は日本だ。国土交通省と気象庁が地震や火山活動が発生した際に地形が変化した事を調べるために、あらかじめ日本全土の地形データを調査してデータベース化してあった。今回のミサイル攻撃にはそのデータを利用して飛行経路をしている。

24発のトマホークは正確に入力された通りの経路を飛行していく。地形に沿って上昇と下降を繰り返し、地上から一定の高度を保ったまま、砲兵基地へと接近していく。

接近してくるトマホークに最初に気づいたのは、二機編隊で哨戒飛行中の空戦型EMWだった。

空戦型 E M W は地球の戦闘機に相当する兵器であり、形状は他のタイプの E M W と同じく人型である。しかし空気抵抗を減らすために表面の凹凸は少なく、重量も陸戦型や地上掃射型よりも格段に軽い。そして背中や腰に装備された大きな推進機と背中の推進機から伸びる長く幅の広い可変翼の外見から、いつの間にか「天職」^{エンジン} というあだ名が付けられていた。最初はヨーロッパ戦線のパイロット達と呼んでいたあだ名だが、今や世界中の戦場で呼称されている。

空戦型の操縦士は即座に基地に一報を入れると上昇し、E M W が手にしている 18 m m ガトリング砲をトマホークに向けて連射した。毎秒数十発の連射速度を誇るガトリング砲から機関砲弾が吹き出され、トマホークを掠めて放棄された自動車道のアスファルトをえぐる。しかしトマホークと E M W の双方が音速で飛行しているので、機関砲弾が命中することはなかった。

2機の E M W は姿勢を変更して再び上昇してホバリングし、再びガトリング砲を連射する。空戦型 E M W は戦闘機よりも飛行速度や航続距離は劣るが、ホバリング出来るなど機動性は高く、戦闘機には出来ない機動を簡単にやってのける。

操縦士はガトリング砲を連射しつつ、背中の可変翼の付け根に装備された空対空ミサイルの照準をトマホークに合わせた。ホバリングしている状態では自機が移動せず相手機のみが移動しているので、双方が移動している状態よりも照準がつけやすいのだ。

頭に E M W がホバリングするイメージを思い浮かべながら、先頭を飛行するトマホークに狙いを定める。数秒後、ロックオンを知らせる警告音と共にトリガーを引こうとしたが、その瞬間、海の彼方から飛来したミサイルが 2機の E M W に命中した。

あたごから発射されたスタンダード S M 2 艦対空ミサイルが直撃し

ただ。あたごに搭載された高性能のレーダーが、トマホークを撃破しようとするあまり、すっかり高度を上げてしまったE M Wを補足し、長射程のS M 2を発射した。イージス艦であるあたごは艦隊防空用や弾道ミサイル迎撃用のイージスシステムを搭載しており、簡単にE M Wを捕捉出来た。

あたごを始めとしたイージス艦は弾道ミサイルの脅威が盛んだった頃には弾道ミサイル迎撃用のS M 3ミサイルを搭載していたが、異世界との戦争が始まってからは航空機迎撃用のS M 2ミサイルに大半が置き換えられた。S M 2の射程は100キロ以上あり、瀬戸内海からなら陸地の上空の大半を照準に収められる。

空戦型が撃墜されたことに惑わされることなく、トマホークは機械の徹底さで定められた経路を外れることなく砲兵基地へと近づいていく。

一方、目標となっている砲兵基地は大混乱に陥っていた。H A R Mにレーダーを破壊され、大規模な攻勢を受けると判断した指揮官は基地中に警報を出した。

兵士達がそれぞれの持ち場につき、バンカーからE M Wが引き出されて出撃準備が整えられる。

すると緊急発進した空戦型のレーダーが、山を迂回して24発のトマホークが接近してくるのを感知した。今まで接近に気づかなかったのは、先程飛来したH A R Mに警戒管制用のレーダーを破壊され、残っていたのが対空兵器に搭載された照準用のレーダーだけだったからだ。

対空砲が火を噴き、ミサイルが発射される。陸戦型E M Wも手にした突撃機関砲を撃ち放ち、砲弾が次々と空中で炸裂する。

巡航ミサイルは固体燃料を使用する通常のみサイルとは違い、外気を取り入れて液体燃料で飛行する。そのためコントロールが容易で

長距離の飛行が可能なのだが、速度はマッハ1前後しか出ない。しかも本体が通常のミサイルに比べて大きいので、戦闘機や対空ミサイルに撃墜されてしまう可能性も高い。

戦闘機すら撃墜可能なミサイルに迎撃され、数発が目標に到達する事なく空中で爆発四散する。だが残った20発近いトマホークは、事前に定められていた目標 基地のあちこちに配備された対空兵器や兵舎、EMWの格納庫 へと突っ込んでいった。

砲兵基地制圧作戦 2（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

砲兵基地制圧作戦 3

作戦が始まった。

ステルス機によるレーダーの破壊と、それに続いて行われた護衛艦による巡航ミサイルの爆撃により、アザーズ軍砲兵基地のほとんどの防空能力は一瞬にして喪失した。その後も絶え間無く航空自衛隊のF15Eによる空爆が行われ、緊急発進した空戦型EMWとF15戦闘機との激しい空中戦が繰り広げられる。

そしてその中を、ヘリコプターの編隊は低空を飛行し、基地に近づいていく。

「おっと……！」

搭乗しているUH1J改の機体が激しく揺れ、太郎はとつさに機体の手がかりを掴んだ。兵員室の端に座っているのも、何かあったら開きつ放しのスライドドアから放り出されかねない。命綱をつけているものの、何が起きるかわからないのが戦闘だ。

隣に座る末恵もドア枠を掴み、外に放り出されないようにしている。ただしその目は、ずっと前方を見ていた。

末恵を見ていた太郎の耳に、ヘリのローター音とは違う、甲高い音が聞こえてきた。するといきなり、上方から1機のF15E戦闘爆撃機が降下してきて、ヘリコプターの編隊と平行して飛ぶような形となった。

2名のパイロットの姿がはっきり見える距離までF15Eの

姿が近づき、思わず身をのけ反らせる。

F15Eは翼下にぶら下げていたマーベリック対戦車ミサイルを発射すると、機体を旋回させて編隊から離れていった。放たれたミサイルは前方に見える砲兵基地の、空爆を生き残ったらしき機関砲を連射していた対空車両に直撃して爆発する。

「なんか、すごいな……。こんな戦闘に参加するのは初めてだ」

『わたしだってそうそうないわよ。まあ、今まではズルズル戦闘を引き延ばそうとしてたんだから、大規模な反攻作戦なんて行われなくて当然よね』

そう末恵は呟いた。直後、分隊メンバーと共に兵員室にいる機上整備員の早川が、『あと2分！』と声を張り上げる。つまり、目標地点に着陸するまであと2分という事だ。

その言葉を聞き、皆が武器や装備の最終チェックをする。鉄帽の顎紐や防弾チョッキの具合を確かめた。コツコツと弾倉を鉄帽で叩いて内部の弾丸の並びを整えてから、小銃や機関銃に弾倉を装着する。弾詰まりの半分以上の原因は弾倉にあると言われ、いざという時に発砲出来なければ死にかなない。死にたい奴は誰一人いないので、念入りに準備を行った。

爆発したら大変な事になるので、まだ装填はしない。

『さて、と……』

太郎の隣に座っている洋二が、今確かめたばかりの鉄帽を脱ぎ、股の下に置いた。

「何をやってるんだ？」

『タマを守るのさ！』

「……あー、そうですか」

敢えて、「『地獄の黙示録』かよ！」とツッコまない太郎である。
これから体力を使うのに、一タツツコミを入れていたら保たないからだ。

砲兵基地に向かって低空飛行するヘリコプターの編隊の上空では緊急発進した空戦型E M Wと航空自衛隊の戦闘機が格闘戦を繰り広げ、その間に戦闘爆撃機が基地を空爆する。クラスター爆弾から撒き散らされた子弹が地上で爆発の花を広げ、投下されたナバーム弾が広範囲を一気に焼き尽くす。爆撃の合間を縫って出撃しようとしたらしい、仰向けの状態からリフトで持ち上げられていた陸戦型E M Wが、コブラ攻撃ヘリコプターのミサイル攻撃を食らって爆発する。
戦場。

この光景を言い表す言葉は、それ以外にはなかった。

『ッ！？ 皆掴まれ！！』

操縦士の鎌田が叫び、直後、編隊に向かって基地から地対空ミサイルが白い軌跡を描いて接近してくる。

ミサイルの接近を感じたヘリの防御装置が作動し、瞬時にチャフとフレアが放出される。チャフは細長いアルミ箔、フレアは火の玉であり、前者はレーダー探知式、後者は赤外線探知式のミサイルを妨害する。チャフで機体の反応を空中で撒かれた金属片の中に紛れさせ、フレアでエンジンの放熱にミサイルが向かわないようにするための欺瞞装置だ。

放たれたミサイルの大半はチャフやフレアに引き寄せられたが、何発かはまっすぐ編隊に突っ込んできた。直後、空中で爆発の花が咲き、ミサイルの直撃を食らった機体から隊員が外に放り出されるのを見た。

『メーデーメーデー！ フライ02墜落する！ フライ02墜落する！ 座標は……！』

メインローターを爆発で損傷したUH1J改が、揚力を失って急速に地上に降下していく。救助要請を出したパイロットが座標を言い終わる前に、墜落に近い形で機体が地面にたたき付けられ交信が途絶えた。

『フライ02、墜落！』

『レディバード03、ミサイルの破片を食らった！ 飛行継続は不可能、不時着する！』

『全機、SAMに注意せよ……！』

パイロット達の慌ただしい声が無線で交わされる中、今度は光の矢が編隊に襲い掛かった。基地の対空機関砲が火を噴いたのだ。

装軌式の車両に搭載されたレーダーと連動して正確な射撃を行える対空車両は作戦開始時の空爆で大半が破壊されていたが、シェルトー等に待避していた小型の対空機関砲は無事だったのだ。レーダー等を省略した目視照準式の対空機関砲は、軽トラックの荷台に搭載出来る程小型だ。それゆえ兵員と共に簡単にシェルトーに隠匿する事ができ、空爆が一段落ついた頃に展開された。

兵器を収容するシェルトーは大きく、地下にあっても位置さえわかればバンカーバスター爆弾などで破壊が可能であり、実際作戦が始まった直後に兵器のシェルトーはほとんどが破壊されていた。だが兵員用の小型のシェルトーは基地内外のあちこちに分散していてサイズが小さく、それゆえ破壊が困難だった。対空機関砲はそれらのシェルトーに収容され、ヘリコプターの接近を阻止するために地上に展開されたのだ。

携帯式のSAMなどは人間よりも小型なので、隠匿は簡単だった。

上空を舞う攻撃ヘリは兵員が地上に出て来次第モグラ叩きのように攻撃していたが、アザーズ兵達は後から後から地上に現れ、逆にSAMや機関砲の攻撃を受けて押されていた。

小型の対空機関砲では目視照準ゆえに精密な射撃は望めず、音速で飛行する戦闘機を撃墜するのは不可能といつていい。だが低速で低空を飛行するヘリコプターを照準することは、それほど困難ではないのだ。

地上に引き出された対空機関砲が炎上する基地のあちこちに設置され、同じくシエルターから出てきた兵士の肩撃ち式のSAMと共に攻撃を開始する。先程のミサイル攻撃は、シエルターから出てきた兵士達によるものだった。

曳光弾が夜明けの空にレーザーのような軌跡を描き、砲弾でテールローターを吹き飛ばされたヘリが、メインローターを軸に回転しながら高度を落としていく。隊員が遠心力で兵員室から放り出され、直後、ヘリが地面に叩きつけられる。

横転した機体が回転方向に従って次々ローターを弾き飛ばし、更に地を転がる。墜落して一回転したヘリは、テール部分から真つ二つに機体がへし折れていた。

『クソッ……!!』

副操縦士の大谷が罵るが飛行は続き、墜落して煙を吹き上げているヘリの姿が後方にあつという間に流れていく。太郎は墜落直前に機体から放り出されていた隊員達の姿を見て、本気で帰りたいと思った。

『掴まれ！ 花火の中に突っ込むぞ!!』

鎌田が叫び、機体が大きく揺れる。VT信管を装着した砲弾が空中で炸裂し、ミサイルが白煙を引いて接近してくる。ミサイルはチャフとフレアでどうにか欺瞞できるものの、誘導装置を一切持たない対空砲弾を回避出来るかどうかは運にかかっていた。

輸送ヘリコプターは可能な限り多くの人員や物資を運ぶため、戦闘を前提に開発された攻撃ヘリコプターと違って装甲が薄い。対空砲は言わずもがな。下手すれば小銃弾すらヘリの外壁を貫通することがある。一応軍用ヘリなので装甲は施されているが、それでも機関砲弾を食らえば無事では済まない。

対してヘリに搭乗している隊員達の身を守るのは、薄い外壁と防弾チョッキしかない。小銃弾ならどうにか阻止出来るものの、口径22mmのアザーズ軍の対空機関砲弾を食らったら、簡単に機内の隊員は挽き肉にされてしまう。

どうにか弾が当たりませんように、と心の中で両手を合わせていた太郎の目の前で、僚機のUH-1J改ヘリの操縦席に機関砲弾が突き刺さった。砲弾の直撃を受けたパイロット達が即死し、ひび割れた風防が内側から血飛沫で真っ赤に染まる。

パイロットを失ったヘリは当然操縦する者がいなくなり、機体を前に傾けて急速に地上に近づいていく。自分とさほど変わらない特別自衛官達の恐怖に染まった表情が、太郎の心に深く刻まれた。

パイロットを失ったヘリは高速で地面に突っ込み、大きな金属音と共に激しくバウンドして何度も転がり部品やローター片を撒き散らした。あれでは兵員室の隊員達は生きていないだろう。

他にもエンジン部分に対空ミサイルの直撃を受けたヘリが、運悪く燃料に引火したのか空中で爆散した。黒煙と共にバラバラになった機体の破片が地上に落下していく。

『着陸するぞ、準備しろ!!』

早川が怒鳴り、徐々に地上が近づいていく。ロープでの降下は空中^{ホバ}静止することが必要だが、砲弾やミサイルが飛び交う最前線で一瞬でも動きを止めたらすぐに撃墜されてしまう。なので今回は数秒間だけ着陸し、隊員を下ろしたら即座に離脱するようパイロット達は厳命されていた。

『よし、行け行け行けーッ!!』

早川が怒鳴り、兵員室の外側に座っていた太郎達は地上から1メートル程浮いた状態から飛び降りる。ヘリのスキッドが地面に触れ、続いて洋二達が一気に外に飛び出る。ヘリが着陸していたのはほんの一瞬で、次の瞬間には再びヘリはローターの回転数を上げて上昇し、最前線から離脱していった。

「嫌だ！ 僕はまだ死にたくない！ 行きたくない!!」

徴兵されて訓練期間を終え、最前線に放り込まれたばかりなのだろう。16歳程の特別自衛官がヘリにしがみついて喚いていた。だが先輩の陸曹に防弾チョッキの襟首を掴まれ、無理矢理外に引きずり出される。

泣きたいのは俺もだよ、と太郎は思った。

ここにいる大半の人間は望んで戦場^{ここ}にいるわけではない。自分の身を守ろうとしない、自分が戦いたくない大人達と、戦争によって儲けている大企業の人間。そして彼らから献金を受けている政治家達。そしてその企業の株を買ってウハウハしている主婦やサラリーマン、年金生活の老人達によって望みもしない戦争に放り込まれたのだ。

だが泣き喚いたところで戦場から逃げられるわけではない。せいぜい上手く立ち回り、敵を殺す事が太郎達に押し付けられた役目であり、より長生きする方法だった。

空荷で離脱したヘリは一端前線集結地点に戻り、増援の隊員を乗せて再び戻って来る。それまでに対空砲を無力化する必要があった。

「分隊集合！ 皆いる！？」

末恵が怒鳴り、隊員の数数える。幸い、全員いた。

着陸地点は元は畑だったらしい。2年間耕作する者がいなかったせいで草は伸び放題になっていたが、最近雨が降っていないせいで地面は乾燥し、ヘリのローターが起こす強風が土埃を舞い上げていた。舞い上がる砂埃が煙幕のように視界を遮り、陽炎のように隊員達の姿をぼんやりと映す。

「全員いるわね。じゃ……」

末恵が最後まで言う前に、銃声と悲鳴、そして何かが倒れるどさっという音が響いた。

「敵だ！ 1時方向、丘の上！！」

続いて連続した銃声。隊員達が一斉に姿勢を低くし、手近な遮蔽物めがけて走る。

ヘリの編隊は、砲兵基地から3キロ程離れた地点に着陸していたが、当然敵も基地の周囲に部隊を展開していた。通常こういった防衛戦闘では、あちこちに陣地を構築して敵に損害を与えつつ後退し、増援を得て一気に反攻に出る縦深防御作戦を取る。砲兵基地を守備するアザーズ軍は、占領して本州における拠点の米子空港の基地から

の増援を待っている。仮に増援が砲兵基地の制圧前に到達してしまつたら、大規模な航空戦力の支援を得つつヘリボーンによって少ない地上戦力を素早く送り込む事によって制圧を意図する自衛隊の勝利は難しくなる。

敵の狙撃を警戒しつつ姿勢を低くして走り、Bチームの面々は小隊の集合地点に指定された用水路の中に転がり込んだ。

枯れて内部には土砂が大量に流れ込んでいたが、1メートル以上の深さを持つ用水路は即席の塹壕になっていた。そしてその中には亀よろしく頭を引っ込めた、第1小隊の隊員達がしゃがみ込んでいる。

「Bチーム！ お前らが最後だ！」

小隊長の権田が笑ってそう言う。分隊長は集合！ 状況を説明する」

各分隊の隊長が権田の下に集まり、権田が狭い用水路の中で状況を伝える。

「ヘリは4機が撃墜され、2機が不時着して1機が戦線離脱した。やられたのはほとんどが特別自衛官^{オレ}達だ。やっぱり経験と訓練の差かな。

まあいい。とにかく我々の中隊はこのまま前進し、北東から基地を攻撃する。航空偵察の結果、途中2つ敵の防御陣地が構築されていることがわかった。こことここ、あとはここだ」

権田は地図を広げ、描き込まれた2つの円を指差す。敵の防御陣地はそれぞれ、第1小隊の着陸地点から700メートル程の間隔を空けて構築されていた。

第2小隊と対戦車、迫撃砲小隊は第1小隊と同じ着陸地点^{アルファ}Aにいる

が、第3と第4小隊は図体が大型輸送ヘリのCH47に搭乗していたから、少し後方の着陸地点Cチャーリーにいる。第1と第2小隊はこのまま南西方向に向かって進み、第3と第4小隊とは基地の東側で合流し、同時に攻撃を仕掛ける予定だ。

他にも少し離れた後方の前線集結地点にはCH47が人員と車両をピストン輸送している。車両なら徒歩より早く移動出来るので、基地を攻撃する時には戦力が今よりも増えているだろう。

権田は地図を畳んでしまうと、さっそく中隊本部を通して航空支援を要請した。着陸地点Aに近い敵は対空火器を装備していないか撃ちきつたらしく、着陸時にヘリを攻撃しては来なかった。そのため、権田はヘリを呼んでも問題ないと思ったのだ。

すぐに、ヘリのローター音が聞こえてきた。

『こちらモスキート02、航空支援を行う。目標の指示を』

航空支援に現れたのは、先程までBチームを乗せていた鎌田達のヘリだった。一端後退して、支援要請が来るまで待機していたのだ。

『こちらスクール01、我々から南西方向、距離200の丘の上にいる敵の小部隊を攻撃してくれ。レーザーで照準する』

『了解、挽き肉にしてやる』

隊員が丘に向かって銃撃を加える中、鎌田達の操縦するUH1J改は小隊員達が隠れる用水路の上空まで前進してきた。指示を受けた隊員の一人がレーザー照準機を出して丘にレーザーを照射する。

隊員が手に持っているレーザー照準機は、小銃などに取り付けて照準の補助を行う小型の物だ。それゆえミサイルや爆弾の誘導などは

できないが、赤外線レーザーを照射して支援機に目標を指示することくらいは出来る。赤外線暗視装置を通して見れば、一直線にレーザーが丘に突き刺さっているのがわかるだろう。

『目標を捉えた。攻撃する』

冷静な鎌田の声と共に、ヘリの両脇に搭載された2丁のM134ミニガンが火を噴いた。毎秒50発という驚異的な連射速度を誇るミニガンによって、丘の上はあつという間に7.62mm弾で耕された。

対空火器を装備していない状態でヘリに立ち向かうのは自殺的だとわかっていただろう。攻撃を切り上げて後退を始めた敵の分隊は、後方から殺到してきた銃弾に斃れた。

「あつつあつつ！ あつつあああッ！？」

ブーン、というミニガンの銃声が響く中、用水路の中でヘリの銃撃が止むのを待っていた太郎、首筋に物凄い熱い物を押し付けられたような感触に思わず叫び声を上げていた。慌てて防弾チョッキの首筋を覆う部分に指を突っ込むと、空莖莖が出て来た。

どうやらミニガンから外に排出された空莖莖が風に流され、防弾チョッキで覆われた太郎の首筋にゴールインしたらしい。撃ったばかりの空莖莖はまだかなりの熱を持っており、太郎は火傷しそうになった。

「大丈夫か、太郎？」

「ああ。防弾チョッキの首元はきっちり締めといたはずなのに……」

「そんな所にちょうど入るなんて、不幸というより一種の才能じゃないか？」

夏男が呆れたように呟く。

ヘリの攻撃は続き、今度は強い風が吹いたのか、大量の空薬莖と分離したベルトリンクが太郎の頭上に降ってきた。ミニガンは毎秒50発撃てるので、一瞬でも引き金を引けば大量の銃弾が発射される。カンカンカン、と、大量の空薬莖が太郎の被った鉄帽に当たる音が虚しく響く。

「……………」

「…………お前、やっぱり不幸だな」

孝俊が哀れみの目で見てきたので、太郎は本当に悲しくなった。

『こちらモスキート02、敵を排除。離脱する』

機銃での支援を終えたヘリは即座に離脱していく。部隊の上空に留まっただけは「ここに敵がいます」と言っているようなものだし、SAMや対空砲での攻撃を受ける恐れがある。一端後退し、要請があつた時だけ前線に出れば撃墜される可能性は減るからだ。

「小隊前進！」

周囲に敵がいない事を確認した榎田がそう叫び、同時に用水路から飛び出す。第2小隊も用水路から出て、基地のある南西方向へと前進する。

迫撃砲小隊は着陸地点Aに留まり、砲撃支援を行う事になっていた。隊員達が円匙シヤベルで地面を掘って平らに均し、その上に分解して携行していた81mm迫撃砲L16を展開した。そしてヘリに積んで来ていた木箱の中から、砲弾と装薬を取り出した。

少し後方に展開した部隊はすでに、重迫撃砲で基地に攻撃を始めて

いるのだらう。空爆に加えて地上からの砲撃を受けた基地が、今も健在であるとは太郎は思えなかった。

だが基地内外に隠れていたアザース兵達は無事で、こうやって抵抗してきている。破壊されていない陸戦型や地上掃射型、そして空戦型のE M Wもまだまだあるらしい。

空を見れば、あちこちで爆発の花が咲いていた。それが狙いを外したミサイルが自爆したものなのか、戦闘機やE M Wが撃墜された時の爆発なのかは、太郎にはわからなかった。

砲兵基地制圧作戦 3（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

砲兵基地制圧作戦 4

「陸戦型E M W^{エム}、3！ 2時方向距離1000から接近中！！」

砲兵基地周囲に展開された地雷原を迂回して進む小隊が、緊迫した空気に包まれた。隊員の一人がそう叫び、複数の視線が基地の方向に注がれる。

遠く、あちこちから煙が立ち上る砲兵基地の方から、小さな人影が走ってきていた。やたらあちこちが角張ったその人影は、当然人間ではない。アザーズ軍の主力兵器であるE M Wだ。

陸戦型の標準的な編成である一個小隊3体でこちらに接近してくるE M Wを確認した小隊長の権田は、即座に航空機による支援を中隊本部を通じて要請した。しかし、

『しばらく航空機による支援は出来ない。現在空戦型との交戦および補給のため、そちらを支援可能な戦闘機はいない』

空を見上げると、あちこちで爆発が起きていた。機体にミサイルが直撃し、目標を外れたミサイルが自爆した赤い炎と黒い煙で青い空が彩られている。

権田は舌打ちすると、小隊に対戦車戦闘の準備を命じた。第1小隊に同行してきていた対戦車小隊の隊員達が、87式対戦車誘導弾^{中MAT}を抱えて射撃が可能な開けた場所に移動しようとする。E M Wは幸いまだこちらには気づいていないらしい。E M Wは人型故の宿命で全高が高く、地上の隊員からは発見が容易だった。

「これ、使つかない？」

「使っんなら小隊長が言うでしょ。ほら、頭引っ込めて」

太郎が背中に数本纏めて背負ったM72 LAW対戦車ロケットランチャーを指差して聞くと、未恵は「うるさい」とでも言うように手を振った。

小隊が今いるのはかつて田んぼだった場所らしく、伸び放題の雑草の間に用水路だったコンクリートで舗装された大きな溝が並んでいた。その用水路を塹壕代わりに、小隊は接近してくるEMWを迎え撃つ態勢を取る。

EMWは随伴歩兵の援護無しに、地響きを伴いながら走って来る。地球の戦車は随伴歩兵の援護無しではあつという間に対戦車火器に撃破される運命にあるが、異世界からやって来たアザーズ軍の戦術は、兵器の体系が違うから当然運用方法も異なっていた。

どうやら異世界での戦闘では歩兵は最終的に敵地を占領し防衛する為の戦力らしく、EMWを大量に前面に出してのぶつかり合いの戦闘が行われるらしい。かつての戦国時代の足軽や騎兵を、そのままEMWにしたような戦闘だ。

それゆえ最前線にはEMW以外の兵器はほとんど出ない。なのでEMWは地球の戦車よりも大量に装備され、戦闘に投入されていた。

幸運なのはその図体のでかさ故に、歩兵でも対戦車火器があれば撃破が可能なところだ。地球の第3世代型戦車よりも若干装甲が薄く、当たり所によつては旧式の74式戦車の105mm砲でも撃破出来る。

しかしEMWよりは、戦車や戦闘ヘリコプターよりも多彩な戦闘が可能だ。腕や上半身の可動範囲は人間同様広いので、戦車には出来ない真上への攻撃などが可能だ。空戦型のEMWは飛行しながら仰向けの姿勢になって、背後への攻撃を行うなど戦闘機には出来ないまさに曲芸飛行をやつてのけたりする（ただし音速で飛行しているので、そいつたG^{豊男}がかかるような事は滅多にしないが）。

地上掃射型は着陸しての陸戦も繰り広げたりすることがあるし、もはら何でもアリな兵器がE M Wなのである。アニメやゲームで人型のロボット兵器が無双しているシーンがよくあるが、あれは本当なんだなと太郎は思ってしまう。今はどうにかタメを張っているが、いつ状況が悪化するかわからない。

対戦車小隊および第1、第2小隊の対戦車班が静かに展開し、E M Wがやって来るのを今か今かと待ち構えていた。

「……撃ってきたッ!!」

64式小銃改のスコープを覗いていた恒が怒鳴る。直後、空気を切る音と共に多数の機関砲弾が殺到し、地面に当たった砲弾が1メートルくらいの高さまで土埃を舞い上げる。

徴兵されたばかりで戦場に慣れていない隊員達が悲鳴を上げて、頭を抱えて用水路の中でうずくまる。太郎達も出来る限り頭を下げ、早く攻撃が終わるよう祈った。

突撃機関砲の銃身下部に取り付けられた122mm砲が火を噴き、用水路の付近で爆発が起きる。爆発で舞い上がった泥をもろに被りながらも、隊員達は3体のE M Wが射程圏内に入ってきたのを待った。

「負傷者はいないか!？」

権田の声が響き渡る。幸いにも今の攻撃で死者は出なかったが、数名の隊員が砲弾の破片で負傷していた。他にも間近で砲弾が爆発し、爆風と音で二半器官を目茶苦茶にされた隊員が地面をのたうちまわ

っている。

一通り射撃を行ったE M Wの小隊は、移動速度を上げて接近してくる。おそらくヘリコプターで運ばれてきた、前線集結地点の陸上自衛隊の部隊を叩こうというのだろう。急いでいるのか、太郎達の部隊が全滅したのか確認しないままに進んでいる。

「どうやら最近、向こうも人手不足つてのは本当らしいな」
アザース

「ああ。多分俺達みたいなガキがエムに乗ってるんだろうな」

「訓練もロクに積んでいないんでしょ。普通なら徹底的に攻撃して敵を倒してから前進するのに」

夏男、孝俊、聡美が口々に、小声で言葉を交わす。しかしその目は油断なく、接近してくるE M Wに視線が注がれていた。

3体のE M Wが部隊から500メートルの距離まで到達した時、攻撃が開始された。設置された発射器から87式対戦車誘導弾が放たれ、同時に対戦車班の隊員が用水路から身を乗り出し、構えた無反動砲を発射する。

殺到してきたミサイルや砲弾に、E M Wは背中に搭載された発煙弾発射器を使用した。空中高く舞い上がった発煙弾が炸裂し、E M Wの周囲を白煙で包んでいく。

対戦車誘導弾は煙幕で誘導用のレーザーを遮られ、命中する事なくE M Wの脇を通り過ぎていった。しかし無反動砲弾は誘導装置も何も搭載されていないアナログな兵器であり、それゆえ煙幕が張られようと狙いを外すような事はなかった。

パイロットが慌てていたのだろう、斜め後ろではなくまっすぐ後ろ

に下がるといふ愚を犯した1体のE M Wの右足に砲弾が直撃して爆発する。狙いは胴体の操縦席に定められていたのだが、E M Wが後退した事で命中した無反動砲弾が、成形炸薬のメタルジェットの噴射で右の脚をもぎ取る。

人型兵器は姿勢のバランスを取るのが難しい。右脚を根本から失ったE M Wが背中から倒れ、大きな振動と土埃を発生させる。僚機がやられた事に動揺したらしい残りの2体は慌て、全速力でわざわざ展開した煙幕の中から脱出してしまった。そしてミサイルが発射された地点に向けて、手にした突撃機関砲を連射する。

対戦車誘導弾の発射器が設置された地点の付近に砲弾が降り注ぎ、発射器のいくつかが破壊される。しかしその直後、別の場所から発射された誘導弾が、煙幕から出て無防備の状態のE M Wに突き刺さる。人間の胸部に当たる位置にある操縦席は爆発で破壊され、パイロットは高熱のメタルジェットで丸焼きにされる運命を辿った。

87式対戦車誘導弾は、発射器と照準装置が200メートルほど離れた位置にあっても使用が可能である。そのため照準装置を手にした操作要員を水路の中に待避させ、発射器を隊から離れた場所に設置する事によって、発射器がある付近を攻撃されても自衛隊側には被害は一切出ていなかった。

残っていた2体のE M Wが轟音と共に地面に倒れ、直後、燃料や弾薬に引火したのか派手な爆発が起こる。

「……汚ねえ花火だ」

小銃を構えたまま、恒がボソツと呟く。

E M Wは、他のどんな陸戦用の兵器よりも敵の攻撃に弱い。20メートル近い大きさの人型兵器という事もあって、正面投影面積が他

の兵器によって異様に広いのだ。しかもその高さ故に、遠くからも容易に発見されてしまう。地球の第3世代戦車の中でも一番全高が高い戦車でも精々3メートル程度という事からも、EMWの正面から見た時の面積が広い事がわかる。

発見されやすいという事は攻撃されやすい事を意味する。現代の戦車は装甲が分厚いが、やはり一番の防御法は敵に発見されない事である。なので戦車に限らず地球の兵器はどれも、出来るだけ小型に作られて被発見率を下げようとしている。

が、EMWはその法則に真つ向から反する兵器なのだ。異世界には兵器はでかく作れば作るほど強くなるという法則でもあるのか、まるで第一次世界大戦後の大艦巨砲主義の際の戦艦の如く、異世界から現れる兵器は徐々に大型化していく傾向がある。

しかし全高が高く地上の歩兵が発見しやすいという事は、逆にEMWからも歩兵や地上の兵器を発見出来るという事でもある。歩兵は迷彩服を着用したり全身に草木を纏うなど偽装をすれば被発見率を下げられるが、全高20メートルのEMWはどう偽装しても一発で見つかってしまうので、今のところ歩兵単独でもEMWに立ち向かう事が出来るのが救いではあるが。

3体のEMWを撃破した小隊はその後も前進を続けた。しかし間もなく、敵の防衛陣地の一つに遭遇してしまった。

重機関銃を設置したトーチカを中心にしていくつかの小銃掩体で構成された防衛陣地は、数十人のアザース兵が籠って激しい抵抗を繰り広げている。複数の機関銃の連続した銃撃により、小隊はトーチカから100メートル程離れた位置に足止めされてしまっていた。

トーチカは小高い丘の中腹にあり、第1、第2小隊はその丘を制圧する任務を与えられている。丘からは砲兵基地が一望でき、そこに対戦車ミサイルや重機関銃を据え付けてこちらの攻撃陣地にする事になっているのだ。

だがアザーズ軍もその丘の重要性を理解しているのか、歩兵2個小隊を配置していた。小隊は丘の麓の溝のように一段低くなった場所を即席の塹壕として、散発的な銃撃をトーチカに向けて加えていた。

「航空支援は！？ 支援はないのか！？」

「今小隊長が支援を要請しているところよ！ もう少し持ちこたえて！」

「持ちこたえろってもなあ……」

洋二がリボルバー拳銃を大きくしたといった体のMGL140ランチャーにグレネード弾を装填しつつ、叫ぶ。敵弾が命中しないよう頭を下げた末恵がそれに答え、太郎がばやいた。

Bチームは爆撃で出来たとおぼしき大穴を塹壕代わりに使用していた。距離があるので手榴弾を投げ込まれたりするような事はないが、先程から迫撃弾が付近に落下するようになっていた。迫撃砲の仰角を上げて、接近しつつある小隊を砲撃しているのだ。

丘をくり抜いて内部に作られたとおぼしきトーチカからは機関銃の銃身だけが突き出され、丘の麓の小隊に上から銃撃を加えていた。

丘の内部に作られているので通常の砲撃などでは破壊が出来ず、破壊するには銃眼に直接ロケットランチャーなどをぶち込むか、戦闘爆撃機などに大型の爆弾を投下してまるごと生き埋めにしてもらうしかない。

装備にロケットランチャーや無反動砲、それに対戦車小隊の対戦車誘導弾などがあるが、機関銃の絶え間無い銃撃がそれを撃つ機会を与えてくれない。少しでも頭を上げた瞬間に銃弾を食らってしまうからだ。事実、既に数人の隊員がトーチカからの銃撃で戦死してい

た。

「……救いはないね。救いはないんですか？」

恒がまた何かを呟いたが、銃声と爆音に声が掻き消される。

「なんか、段々低くなってませんか？ この穴の淵」

「そりゃ機関銃で撃ちまくられてたら、穴の淵もどんどん削られていくよ」

撃たれているにも関わらず聡美と明子が呑気な会話をしている横で、未恵は携帯無線機のイヤホンに耳を当てていた。そしてしばらくすると、その表情が明るくなる。

「へり、来てくれるって！」

「マジ！？ アパッチ！？」

「ううん、ヒューイよ。あのモスキート02だって」

「あの人達が……。ま、へりの支援なら何でも大歓迎だな」

その巨体を必死に穴の中に押し込めていた夏男が言う。

通信要員の聡美が背囊の中に入っていた某iPodに酷似した端末を取り出し、へりの現在位置を確認する。あと1分もしない内に、へりはトーチカ付近に到達するはずだ。

ちなみに聡美に預けられている携帯端末は、自衛隊の軍隊^{RM}における革命化の一環として装備されている物だ。某iPodのような形の携帯端末は軍用らしく金属板であちこちが強化されてぶ厚くなっており、8メートルの高さから落としても、気温80度からマイナス50度までの環境にも耐えられる。各分隊に一つずつ装備され、全ての隊員が身につけたGPS発信機により、戦場の様子が目でわかるスグレモノだ。どこに隊員がいるか、へりや車両がいるかなと

がわかるだけでなく、画面をタッチするだけで砲撃や爆撃の支援の要請をでき、その位置まで指示できる。

ただし敵が鹵獲した場合はこちらの動きや配置が筒抜けになるので、数分毎のパスワード入力をしなければならないのだが。

すぐに、銃声や爆音に混ざってヘリのローター音が聞こえてきた。カメの如く頭を引っ込めていた隊員達にとって、その音は救いを告げるものだった。

『こちらモスキート02、指示を頼む』

「モスキート02、こちらスクール01だ！ 我々の前方の丘の腹にあるトーチカと、その周囲の歩兵を一掃してくれ！ レーザーで目標を指示する！！」

『モスキート02了解』

樫田は部下に命じると、レーザー照準機だけを隠れている溝の淵から出させて丘を照準した。すぐに、ヒューイによる攻撃が実施される。

チェーンソーのような銃声と共にミニガンが銃弾をばら撒き、兵員^{キャ}室の下に取り付けられた補助翼^{スタブウイング}にぶら下げられたロケットポッドが次々とロケット弾を吐き出す。地面に掘られた小銃掩体から小隊に銃撃を加えていたアザーズ兵達は、銃弾に身体を貫かれロケット弾の破片を全身に突き立てて絶命した。

しかし丘の中腹のトーチカは一瞬沈黙しただけで、再び元気に銃弾をばら撒き始めた。トーチカの銃眼は小さく、銃弾やロケット弾の爆風が内部まで届かないのだ。加えて内側からトーチカ内が補強されているのかロケット弾を上から撃ち込まれても崩壊せず、さらに機関銃の射手が死亡しても、別の兵士がやって来て射撃を続行出来

るようになっていた。

「ダメだ、トーチカはまだ健在だ！ 直接内部にロケット弾をぶち込んでくれ！」

権田はそう無線機に叫んだ。ヒューイに搭載されているロケット弾は戦車を破壊出来る程の威力はないものの、装甲車やトラック等は撃破出来る。トーチカの銃眼に直接命中させれば、必ず機関銃を沈黙させられるはずだった。

『モスキート02、了解。しばらく待て』

真正面からロケット弾を撃ち込むためだろう、ヒューイが徐々に高度を落としていく。だがその瞬間、太郎はあるものを見た。

「 SAMだッ！！」

丘の上にいつの間にか現れていたアザース兵は、肩に大きな槍のような対空ミサイルSAMの発射筒を担いでいた。SAMを担いだアザース兵は低空飛行中のヒューイに向けて照準を合わせようとしたが、次の瞬間には頭を7.62mm弾に貫かれていた。

第1、第2小隊より後方で待機していた対戦車小隊と共に配置に就いていた狙撃手が、対人狙撃銃でアザース兵の頭を撃ち抜いたのだ。SAMを持ったアザース兵は倒れたが、ヒューイは慌ててフレアを投下しながら離脱していく。またSAMを持ったアザース兵が現れるかもしれない、SAMはヘリコプターの最大の脅威だからだ。

「仕方ない……おい山田！」

突然権田に名前を呼ばれ、何事かと太郎は思った。嫌な予感がとて

もしていた。

「山田、LAWでトーチ力を黙らせてこい!!」

「やっぱり俺ですか!!?」

「いいからLAWが発射出来る位置まで移動しろ! 援護する!!」

なんで俺ばかり。そう太郎は嘆いた。ちなみに権田が太郎を指名したのは特に理由はなく、ただ山田という苗字が覚えやすかっただけという事を太郎は知らない。

背中に背負ったM72LAWロケットランチャーの一本を手にした太郎に、未恵が「気をつけてよ」と声をかける。

「……太郎、なんであんな震えてんの?」

「いや、未恵つてそんなに優しくなかったっけ?」

「わたしはいつでも優しいわよ!」

「お前は優しさが隠し味になる程しか入ってな……おいやめろ。まだ死にたくはない」

拳を振り上げた未恵に、太郎は慌てて被っていた鉄帽を抑えた。未恵の拳骨は鉄帽を被っているにも関わらずダイレクトに頭に激痛を走らせるため、Bチームの男子陣に恐れられている。

「山田、準備出来たか!?」

「出来ました!」

「よし。板妻、トーチ力の付近をレーザーで照準しろ! 迫撃砲で小銃掩体の敵兵を制圧した後、山田がLAWでトーチ力を破壊する。トーチ力を破壊した後は、敵防衛陣地に突撃する! 総員着剣!」

「了解!」の大合唱が権田に答える。明子が背囊からレーザー照準機を取り出す横で、未恵を始めとした89式小銃を装備している隊

員達が小銃に銃剣を取り付ける。

先程の目標指示用の小型の物ではなく、ミサイル誘導用や座標測定用のレーザー測距機が備え付けられた大型のレーザー照準機を明子が構える。穴の淵から少しだけ頭を出し、トーチカ付近にレーザーが照射されている事を確認すると、一緒に備え付けられたGPS送信機のボタンを押した。

明子のレーザー照準機が測定したトーチカの座標情報は、即座に後方の火力指揮所に送られた。そしてFOによりトーチカを射程内に収める迫撃砲小隊に、砲撃命令と共にトーチカの座標が伝えられる。

第1、第2小隊がヘリで降下した着陸地点A付近に展開していた迫撃砲小隊が、L16迫撃砲による砲撃を開始する。

迫撃砲弾は弾頭と装薬の二つで構成されており、装薬の種類によって射程が決まる。砲身の傾きは、砲弾の飛距離を微調整するためのものだ。

着発信管の対人用の榴弾弾頭と装薬がその場で組み合わせられ、砲手の手によって砲口から砲身内部に落下していく。装薬尾部の発射用の信管が砲身の底の撃針に叩かれ、砲口から炎と共に砲弾が飛び出していく。

そうやって数秒に一発の割合で放たれた迫撃弾は、山なりの軌跡を描いて次々とトーチカの周辺に着弾する。爆風と砲弾の破片が高速で飛散し、塹壕から身を出していたアザース兵達をズスタに切り裂いていく。

「山田、行け！ 他は山田の援護だ！ 目標、前方の丘中腹のトーチカ！100！ 単射、使命！ 撃てーッ！！」

目標、距離、射撃方法が権田によって命令され、隊員達が一齐に穴から上半身を出してトーチカとその周辺に射撃を加える。砲撃で呆

然としていたアザーズ兵の数人が倒れ、他の兵士は被弾を恐れて塹壕に隠れる。夏男の持つミニミやM240といった軽機関銃が、その装弾数と連射力を活かしてトーチカへ牽制の弾幕を張る。

トーチカの機関銃が沈黙した瞬間、太郎は穴から這い出して走った。そのまま横に走って小隊から離れ、丘の麓に無数に設置された、車両の侵入を防止するための鉄骨を3本組み合わせた四面体の形をしたバリケードの一つに隠れる。そして手にしたM72 LAWロケットランチャーの安全ピンを引き抜き、砲身後部を引き伸ばして照準器を起こす。

M72は使い捨て式のロケットランチャーだ。学校で貰う卒業証書を入れる筒をそのまま数倍の大きさにしたような外見のそのランチャーは、50年近く前に開発されたロケットランチャーだ。ベトナム戦争では米軍によって、対戦車用に使用された。

流石に現用戦車の装甲は撃破出来ないが、今でも対装甲車両やトーチカ用として使用されている。製造や操作が簡単でありその軽量さ故に、自衛隊でも異世界戦争勃発後に大量に輸入されて使用されている。

M72ランチャーを肩に担いだ太郎は、砲口をトーチカに向けた。後方に障害物がない事を確認してから、砲身前部に取り付けられた透明プラスチック板に刻まれた照準をトーチカに合わせる。

トーチカ付近の塹壕から一人のアザーズ兵が立ち上がり、太郎へ小銃を向ける。だが次の瞬間、頭を撃ち抜かれて地面に転がる。恒が64式小銃で狙撃したのだ。

発射ボタンを押す。砲身後部からバックフラスト噴射炎が噴き出し、ロケット弾が勢いよく前部から飛び出していく。瞬く間もなく、ロケット弾はトーチカに突き刺さった。

トーチカの銃眼の周囲はコンクリートで固められていたが、装甲車

両をも撃破出来る威力のロケット弾には無力だった。高熱の爆炎がトーチカ内部を満たし、機関銃ごと射手を焼き尽くす。

「突撃にいい、前へ！！」

権田が叫び、隊員達が穴や溝から飛び出して気合いの叫び声と共に走っていく。塹壕代わりの穴に残った隊員が機関銃を連射して、突撃する隊員を援護する。

銃剣術とは、小銃の銃口付近に銃剣を取り付けて、銃を打撃武器として使用する戦闘術である。パヨネット

銃剣術は日本古来の刀による戦闘方法と組み合わせられて、旧日本軍の時代から重要視されていた（重要視し過ぎて無謀な突撃での死者も多かったが）。自衛隊でも銃術戦闘は重視されており、太郎達も訓練期間中に徹底的に叩き込まれた。

着剣した小銃を構えた隊員達はあつという間に塹壕に肉薄し、一気にアザーズ兵に襲い掛かった。

特に格闘技全般に優れた孝俊は、銃剣戦闘を最も得意としていた。塹壕に飛び込むなり離れた敵は小銃で撃ち、近くの敵兵には銃剣を突き刺す。そのまま発砲して刺さった銃剣を引っ抜き、ナイフを抜いて背後から襲い掛かってきたアザーズ兵を、小銃を横に薙いで顔を切り付ける。顔を抑えてうずくまったアザーズ兵に、銃剣を突き刺す。

塹壕内部の土は流れ出した血で水溜まりが出来た程だった。阿鼻叫喚の地獄絵図が繰り広げられた後、生きて立っているのは自衛隊員達だった。

砲兵基地制圧作戦 4（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

砲兵基地制圧作戦 5

作戦開始から一時間近くが経過し、自衛隊は砲兵基地に侵入しつつあった。

ヘリコプターで降下した部隊と、やや後方の集結地点にピストン輸送で隊員と車両が集められ、それらが一斉に砲兵基地に接近していた。

「あのトーチ力を黙らせる！ パジエロとLAVが来るぞ！！」

中隊長が怒鳴り、放たれたロケット弾がトーチ力を破壊する。同時に重機関銃を搭載した小型トラックや高機動車、対戦車ミサイルの発射器を屋根に据え付けた軽装^{LAV}甲機動車が前進し、突撃する普通科隊員達を援護する。車両は大型輸送ヘリのCH47で運ばれて来た後、一気に集結地点の普通科隊員達を乗せて基地の攻撃に加わっていた。重火器を搭載した車両の応援が来た事もあり、戦闘は自衛隊側の優位に傾きつつあった。

だが砲兵基地の周辺には地雷原が展開されていた。そのためロケット弾で曳航索で繋がれた爆薬を飛ばす地雷原爆破装置や、後方に展開した迫撃砲や航空機による砲爆撃で地雷を爆発させてから自衛隊は前進していた。しかし運悪く爆発しなかった地雷があるかもしれない。それらを警戒しながら進んでいたので移動速度が落ちていた。さらに基地の周囲には二重三重に塹壕が掘られ、さらにあちこちにそれらと繋がった小銃掩体やトーチ力が設けられ、進攻を阻んでいる。しかも各所に対空機関砲や携帯式の対空ミサイルが配備され、近接航空支援を行う機体に脅威を与えている。

こういつた場合は戦車などを前面に押し立てて、塹壕を乗り越え敵歩兵を生き埋めにしながら前進する事が望ましい。元々戦車は第一次世界大戦で塹壕を突破するために作られた物だ。

しかし今回の作戦は速度が重要視されており、重量が50トン前後あつて空輸不可能な戦車は投入されてはいない。装甲車なども、空輸可能な重量のLAVが精製である。

「地雷原を吹っ飛ばせ！ あの塹壕ラインが最後だ！ あそこを突破すれば基地内に突入出来る！」

その言葉で施設科隊員達が既に制圧した塹壕の中を走り、広い場所を見つけ地面を平らに均して骨組みの迫撃砲といった体の地雷原爆破装置を設置する。ペットボトルロケットに似た爆破用ロケットを取り付け、角度と方角を調整してから発射した。

ロケットが飛翔しながら本体後方から索を伸ばし、次々と索に繋がれた爆薬が引き出されていく。自力で推進するロケットである上に索を引っ張りながら飛んでいるので、爆破用ロケットは風に流される事がある。最悪味方の頭上に降ってくる事もあり、きちんと狙った場所に爆薬を落下させるのは至難の技だ。

幸い爆破用ロケットは真つすぐ飛び、やがて内部に納めていた索と爆薬を伸ばしきって空っぽになつて地面に落下した。それを確認した施設科隊員が、地雷原を突っ切るようにして落下した爆薬を起爆する。

「爆破！」

一斉に爆発が起き、その爆風や衝撃で周囲の地雷が一気に誘爆する。数十もの地雷が爆発した衝撃が、塹壕に隠れていた隊員達を揺さぶる。

地雷の処理を確認した中隊長は前進を命じようとしたが、「エム、6体！ 11時方向！」という声で止めた。

見れば、砲兵基地の崩れかけた建物を盾にするように、二個小隊6機の陸戦型EMWが現れた。この辺り一帯はアザーズ侵攻前は田園地帯で、砲兵基地がある場所は見晴らしのいい丘だったので、砲兵基地の建物は全てこの地域を占領したアザーズ軍が建設した物だ。高さが15メートルから20メートルと、まるでEMWの盾になるかのように建物が立っている。多分アザーズ軍が、そういった目的で建てたのだろう。

EMWの持つ突撃機関砲が火を噴き、ほとんど同時に塹壕の周囲に弾着で高く土埃が舞い上がる。EMWの全高は20メートル近くあり、斜め上から放たれた122mm砲弾が塹壕内のだ真ん中に着弾した。

頭の真上を通りすぎて行った爆風を首を引つ込めた太郎は、バラバラと土や小石に混じって何かが目の前に降ってきたのを見た。目の前に転がっていたそれは、一見するとただの鉄帽ヘルメットだった。

が、その時太郎達の近くで機関砲弾が炸裂し、その爆風で鉄帽が転がった。鉄帽の中に納まっていた物を見て、太郎は思わず吐きそうになった。

鉄帽の中には、顎から上だけ残った人間の顔があった。どうやら太郎達と同じ特別自衛官の少年だったらしく、その顔にはまだあどけなさが残っている（もともと、半分しか顔が残っていないが）。どうやら砲弾の破片で、頬の部分から上を綺麗に切断されたらしかった。

徴兵して2年以上が経つ太郎だったが、相変わらず死体を見るのは苦手だ。しかし意識と身体は別物で、吐きそうと感^じても嘔吐する事はない。もう身体の正常な感覚が麻痺してしまったのかもしれない、と太郎は頭の片隅で考える。

「……い、おい！　どうした太郎！？　耳をやられたか！？」

その声と共に頬をバシバシ叩かれる感触で我に帰ると、目の前に夏男の顔があつた。

「……すまん、一瞬意識が飛んでた」

太郎は無事だと判断したのか夏男は頷くと、ミニミ軽機関銃を構えて基地へ向けて連射する。E M Wと同時に歩兵も出てきて、背水の陣なのか猛烈な銃撃を加えてくる。アザース軍にはこれ以上後退する余裕はなく、残された道は徹底抗戦か、一旦基地を放棄した上で米子から来た援軍と共同で奪還作戦に出るしかない。

塹壕の中はうめき声と、衛生員を呼ぶ声で満たされていた。近くにいた隊員が負傷者の個人用医療キットを取り出し、応急手当を始める。すぐに衛生要員がやって来て、負傷者の手当をしてから搬送していく。

見れば味方の車両はE M Wの砲撃を恐れたのか、全速力で走って狙いを定められないようにしていた。所詮は軽装甲車両だ、精々重機関銃弾や地雷程度しか防げない。陸戦型E M Wの標準火器である42mm機関砲弾を食らったら一たまりもない。

「クソッ、まだいたのかよ！？」

「話す暇があるなら撃つてよ！！」

孝俊と明子が怒鳴りあい、小銃の二脚を立てて撃つ。恒が64式小銃で狙撃し、軽機関銃を連射していたアザース兵が頭を撃ち抜かれて沈黙した。

「攻撃ヘリに支援を要請しろ！　無反動砲を使い！」

中隊長が怒鳴り、対戦車班の隊員がカールグスタフ84mm無反動砲を発射する。EMWの一体が胴体にHEAT弾を食らってパイロットもろとも操縦席を焼き尽くされ、燃料に引火して派手な爆発を起こす。—79式対舟艇対戦車誘導弾《重MAT》を搭載したLAVがミサイルを放ち、片足をもぎ取られたEMWが大きな土煙と轟音を立てて転倒した。

しかしこちらの戦車に匹敵する陸戦型EMWは、やはり戦車並の強さを誇っている。反撃を受けて味方の車両が一両爆発炎上し、残った車両が発煙弾を発射して煙幕に紛れて後退する。

その煙幕を切り裂くようにして、支援要請を受けたコブラ攻撃ヘリの編隊が現れた。新型のアップチ攻撃ヘリは正規部隊優先で配備されているため、旧式のコブラは改修を受けつつ特別自衛官の部隊で使用されている事がほとんどである。

コブラが一齐に補助翼にぶら下げたTOW対戦車ミサイルを発射し、スタブウイングミサイルを食らったEMWが次々爆発を起こす。人型をしていて無駄に全高が高く、正面投影面積が大きいEMWは、対戦車攻撃をやらせたら最強の攻撃ヘリの的でしかなかった。

地上の歩兵が携帯式の対空ミサイルをコブラに向けようとしたが、狙撃を受けて血を撒き散らしながら倒れる。コブラが撃ち漏らしたEMWは隊員が発射したロケット弾や無反動砲弾の直撃を受けて撃破された。

EMWは人型をしているので、戦車よりも攻撃可能な範囲が広い。腕を持ち上げたり肘を曲げれば、EMWは人間同様真上から真下まで攻撃が出来るのだ。しかも全高は20メートル近いので、低空飛行をするヘリコプターも十分攻撃可能である。

コブラが回避運動を行い、その間に普通科隊員達がEMWを攻撃する。全てのEMWが撃破されて脅威が減ると、コブラは地上の敵を

攻撃し始める。

機首のM197ガトリング砲やスタブウイングのロケット弾を連射し、機関砲弾が地上の歩兵を挽き肉に変えロケット弾の破片がバラバラに切り刻む。基地から重機関銃を搭載したアザーズ軍の装輪装甲車が現れ迎撃の火線を張ったのもつかの間、次の瞬間には機関砲弾で穴だらけにされていた。

『観測ヘリからの報告。敵部隊は西に向けて移動を開始した。恐らく撤退するものと思われる』

前線司令部からの通信が入り、同時に基地への突入命令が下される。地雷原は銃砲弾が飛び交う中も作業を続けていた施設科隊員達の手により、多くの地雷が爆破処理されて安全な通り道が出来ていた。

「着け剣」と命じられた隊員達は小銃に銃剣を装着し、一斉に塹壕から飛び出して基地へと突撃していく。

一方、空の戦いも終わりが近づいていた。先程までは航空自衛隊のF15J戦闘機とアザーズ軍の空戦型EMWが激しいドッグファイトを繰り広げていたが、時間が経つにつれてアザーズ軍は劣勢に追い込まれていった。地上で基地への突入が開始された頃には、襲い掛かるF15を空戦型EMWが必死に回避する、という光景が広がっている。

もつとも、果敢に反撃しようとする敵機もあり、やはり自衛隊側は苦戦を強いられている。

『こちらディンゴ02、ケツにつかれた！ 誰か援護してくれ！』

僚機からの通信を聞いた航空自衛隊第204飛行隊所属の春日^{かすが} 雪^ゆ
男三等空尉^{きお}は、愛機のF15Jの操縦桿を僅かに傾けた。

「こちら01、今助けてやる」

全身にかかるG^{重力}を腹筋に力を入れて堪え、マスクに繋がったホースで送られてくる酸素を吸いながらそう言う。

『頼むぜスノーマン！ コイツしつこくケツに食らいついてきやがる。パイロットはガチホモか？』

ちなみにスノーマンと言うのは、春日のTACネームだ。名前の雪男を雪^{ユキ}スノー、男^{オトコ}マンと直訳しただけの、安直なTACネームだ。

逃げる僚機のF15とそれを追う空戦型EMWの背後につき、翼下^{ヘッドアップ}に搭載したAAM-3のシーカーを作動させる。目の前にあるHUD^{ヘッドアップディスプレイ}に目標をロックオンするための発射キュー・シンボルという緑色の斜めに傾いた四角が現れた。機体真正面を飛ぶEMWの機体に重なる目標指定ボックス^{TD}と呼ばれる緑色の四角にシンボルが徐々に近づいていく。シンボルがTDボックスに重なれば、ロックオンが完了してミサイルを発射する事が可能になる。

背中にジェットエンジンと可変翼を背負い、空気抵抗を減らすために流線型をしている空戦型EMWのTDボックスに発射キュー・シンボルが完全に重なって色が赤になり、ロックオンした事を告げる警告音が鳴る。すると敵機も自分が狙われている事に気づいたのか、味方機の追撃を止めて回避運動を取りはじめた。EMWが急旋回して、ロックオンが解除されてしまう。

「クソッ、動くんじゃねえよ……！」

思わずそう呟き、E M Wの背後を追う。右に左に旋回しつつチャフやフレアをばら撒きながら飛んでいるので、近距離での戦闘に有効な赤外線誘導方式のミサイルの照準が定まらない。赤外線誘導方式のミサイルはエンジンの排気熱を目標にしてロックオンする。だが火の玉であるフレアを放出することによって、シーカーがフレアをエンジンの熱だと間違えて狙いを外してしまうのだ。

次の瞬間、もう一度ロックオンしようと敵機の背後を取っていた春日の目が驚愕に見開かれた。必死に逃げ回っていたようにしか見えなかった空戦型E M Wが、急に機体を引き起こし直立させ、空中静止する事によって春日のF 15を追い抜かせたのだ。

いわゆるプガチョフ・コブラ機動と呼ばれる荒技である。変態的な機動性を持つロシア製戦闘機がよく行う空戦技術だが、速度を大きく落とさなければ機体が壊れてしまうので、実用的な技術ではなく曲芸向きと言われている。だが地球の戦闘機よりも飛行速度が遅く、さらに操縦士が思考するだけで様々な姿勢を取れるE M Wには、あまり難しくはない技術のようだ。

空戦型E M Wは平気で空中静止したり、背面飛行しながら後方に向けて銃撃したりと、ロシア製戦闘機もびっくりな変態機動を普通に行う。無論超音速飛行中にそんな事をやったら機体がバラバラになるのでそういった事は低速飛行中にしかやらないが、空戦型E M Wと格闘戦ドッグファイトをするには相当の覚悟が必要だ。

もともと最近操縦士の質が落ちていらしく、2年半前程の脅威とはなっていない。まるで太平洋戦争のミッドウェー海戦後の日本軍戦闘機のようなものである。

「やってくれるじゃんか……！」

腹筋に力を込めて、スロットルを全開にする。たちまちGで身体がシートに押し付けられ、意識が一瞬だけ遠くなりそうだった。

航空自衛隊に限らず世界各国の戦闘機パイロットは、「空戦型E M Wに背後を取られたら、全速力で離脱しろ」と教えられている。人型故に空気抵抗が大きく、空戦型E M Wは平均して精々マッハ1.2程度までしか出ない。いくら機体表面を流線型にしても、元々人型兵器は飛ぶには向かない形なのである。

そのため背後を取られたら、全速力でその射程圏内から離脱することが正しいと言われている。地球の戦闘機は平均マッハ2以上の速度を誇るため、速度差を活かしてさっさと離脱するのが正解なのだ。

春日機の背後についたE M Wは可変翼の根本、エンジン部分に設けられたハードポイントにぶら下がった空対空ミサイルをロックオンしようとする。空戦型E M Wの手足には魚のヒレのようなフィンが取り付けられ、空戦機動中に手足を少し動かす事によって姿勢の変更を容易にしている。E M Wは長い可変翼のフラップだけでなく、手足を動かして姿勢を微調整しながら春日機の真後ろにつく。いくら速度差があってもミサイルを発射されてはどうしようもなく、春日はチャフとフレアを放出させながら機体を急旋回させたり、上昇と下降を繰り返して振り切ろうとする。

『こちらデインゴ02。01、援護する』

見れば先程助けた僚機のデインゴ02が、春日機の真後ろにつく空戦型E M Wの背後にいていた。再び背後を取られた事に気づいたらしいE M Wは春日機の追撃を止め、再び急旋回して離脱しようとする。

「今度は逃がさん」

そう言いながら、HUDに映る円形のガンサイトを逃げる空戦型EMWに合わせる。EMWが射程内に入り、ガンサイトがEMWを捉えた瞬間、操縦桿のトリガーを引く。

ブウウン、という重く低い銃声と共に、右翼付け根のM61バルカン砲が火を噴く。毎秒50発の連射速度を誇るバルカン砲は少しトリガーを引くだけで数十発の弾丸が発射され、曳光弾が空中にレザーのような軌跡を描く。

放たれた20mm機関砲弾がEMWに殺到し、背中と腰に取り付けられた4つの推進ユニットの内の3つを破壊する。一気に推力の大部分を失った空戦型EMWは徐々に降下していき……

「あ」

火と煙を吹きながら降下していくEMWの先には、自衛隊が突入を開始した砲兵基地があった。

一方砲兵基地に突入した第一中隊は残っていたアザーズ兵を掃討しつつ、基地の中心部まで到達していた。基地の中心には司令部だったらしき鉄筋コンクリート製の建物や兵舎、そして空戦型EMWや輸送用のヘリコプターの発着場が設けられていた。

野砲や地対地ミサイルの発射器は、作戦開始と同時に空爆を受けて派手に燃えている。EMWやヘリコプターに給油するための燃料タンク車が、迫撃砲弾の直撃を受けて巨大な火柱を上げた。

例によってイロイロと嫌われているBチームは、中隊の一番前を進むよう命じられていた。銃撃を受ければ真っ先に撃たれる位置であ

り、要するに「コイツら撃たれないって事は敵はいないよね」と判断する為の目安である。

特に何か悪い事をしたわけでもないのに補充という理由でBチームに配属された太郎は心の中でぶつぶつ文句を言いつつも、死にたくないなので、小銃を構えながら注意深く視線をあちこちに巡らせていた。

未恵が『前進』と手信号で伝え、4人1組で前進する。一人当たり90度の範囲を警戒し、小銃の銃口を視線と一体化させて動かす。基地の中心にはいつも建物があり、どこから撃たれるかわからないので、一秒たりとも気を抜けない。

中隊は兵舎らしき2階建ての鉄筋コンクリートの建物に近づき、内部を搜索し安全を確保する事になっていた。まずは使い走りというか盾同然のBチームが先行し、玄関付近を制圧する手筈だった。

盾代わりの放置されていたトラックの陰から飛び出し、小走りで兵舎に近づいていく。Bチームの背後では、中隊の隊員達が固唾を呑んで敵襲に備えていた。

が、敵は意外な場所からやって来た。
というより、降ってきたのである。

兵舎の玄関に近づいた太郎は、突如周囲がフツと暗くなったのを感じた。太陽が雲に隠れたか？ そう考えたのもつかの間、背後からの「Bチーム！ 下がれ、下がれーッ！！」という叫び声で上を見上げた。

そして絶句した。

太郎の視界には、炎と煙を噴き出しながら落下してくる空戦型EMWの姿が大きく映っていた。先程春日が攻撃を加えた機体だった。操縦士の執念が乗り移ったかのように、空中で爆発四散していてもおかしくない損傷を受けたのに、EMWは不時着を試みようとしていた。そしてその落下する軌道の先には、今まさに兵舎に突入しようとしていたBチームの姿があった。

「待避、待避ーッ!!」

末恵が叫び、慌ててメンバーが元来た道を引き返す。だが太郎は一人、兵舎に逃げ込んだ。

一番先頭にいた太郎はもつとも兵舎の近くにいて、また引き返そうにも落下してきたEMWに途中で押し潰されそうな位置だったのである。だから咄嗟に前に進み、兵舎に飛び込んだのだ。

「なんで俺ばかり……!?!」

そう悪態をつきつつ兵舎にスライディングして飛び込んだ直後、兵舎の入口付近の壁が轟音と衝撃と共に吹き飛んだ。落下中のEMWが空中で軌道を変え、兵舎の入口を破壊するように墜落したのである。

さらに墜落直前に推進ユニットを切り離していたのか、兵舎の周囲に落下した推進ユニットが爆発炎上する。被弾した際にボロボロになっていたのか、左のマニピュレーターが衝撃で吹っ飛んだ。

兵舎の入口を曲がってすぐの廊下の壁に隠れていた太郎は、頭を押さえながら爆発と炎の嵐が通り過ぎるのを待った。

「クソツクソツクソツ、なんで俺ばかりこんな目に!!」

今日一日で何度「クソ」と繰り返したかわからないが、この状況を例えるならばその言葉がピッタリだった。パラパラと天井から細かい塗料が降り注ぎ、文字通り粉碎されたコンクリート片が鉄帽に当たって乾いた音を立てる。

やがて静寂が辺りに満ちた。間近でE M Wが墜落したというのに大した怪我一つしていないというのは、奇跡に近かった。この時ばかりは普段信じてもない幸運の神様に感謝しつつ、太郎はゆっくりと立ち上がると、小銃を構えて自分が飛び込んできた入口に戻ろうとした。

しかし入口は、墜落した空戦型E M Wによって塞がれていた。左腕を押し潰すようにして胴体が屋根を突き破って入口を塞いでいる。首が半ばちぎれかけた人間の頭のようなメインカメラのユニットのスリット状のカメラのレンズが粉々に割れていた。そしてその周囲で小さな炎が燃えている。

『こちらスクール01B、^{フラボ}無事なの太郎！？』

唐突に無線機のイヤホンがノイズ混じりの声を流す。未恵からの通信だった。

「……………未恵の声って事は、ここは天国じゃないな。天国ならもっと優しいお姉さんとかがいるだろうし」

『それ、遠回しにわたしは優しくないって言ってるわね？ 後で覚悟しておきなさい。……………まあいいわ、そっちは無事なのね？』

「ああ。だが入口が塞がれちゃった。外も漏れた燃料とかであちこち燃えてるし、砲撃対策のためか窓も少ない。他の脱出路を探してそっちに合流するのか、それともここに残るのか指示をくれ」

末恵はしばらく無言になり、ややあってから答えた。どうやら小隊長とどうすべきか協議していたらしいと太郎は推測する。

『兵舎の搜索はいいわ、中に敵兵がいたらとつくに逃げて外に出てきてるだろうし。そつちはどこか迂回路を探して兵舎から脱出して頂戴。兵舎の西にある第3砲撃陣地で合流しましょう』

「了解、オワリ」

最後だけきちんと通信手順を守ってから無線を切る。

どうやら他の皆は太郎を置いて、基地の掃討を続けるつもりらしい。元々第3砲撃陣地（自衛隊が付けた作戦上の便宜的な名称だ）は第1中隊が攻撃を行う予定だったので、砲撃陣地付近に行けば合流出来るだろう。そう考えて、さっさと崩壊寸前の兵舎から抜け出そうとした時だった。

がきつ、という金属の軋む音が背後でして、太郎は振り向きざま89式小銃を構えた。

入口を塞ぐようにして倒れているEMWの胴体前面にあるハッチが、僅かに開いていた。そして次の瞬間、轟音と共に一気にハッチが全開になる。どうやら操縦士はまだ生きていて、機体から脱出しようとしているようだった。

墜落したEMWの惨状に操縦士は生きていないと思っていた太郎は、完全に不意をつかれた恰好になった。「動くな、両手を上げろ！！」とアザーズ語で叫んだ太郎は、はい出てきた操縦士の顔を見て思わず息を飲んだ。

操縦士は太郎と同じくらいの歳の少女だった。墜落した時の衝撃で切ったのか額から血を流した少女は茶色の髪をポニーテールにして、

切れ長の目をしていた。瞳の色は黒で、顔の形こそ違ふものの、その少女は太郎にあさ子の事を思い出させた。

あさ子は2年前の高校の入学式以来会っていない、太郎が中学高校と同じ（となる予定）だった先輩である。そして必死に勉強して県内上位の同じ高校に入学するほど、太郎が好意を抱いている少女だ。

まるであさ子に銃口を向けているような気がして、太郎は動揺してしまった。その一瞬の隙を見逃さず、少女は自衛用火器らしいブルパップ式の短機関銃を構えると、躊躇う事なく引き金を引いた。銃声が狭い廊下に反響し、銃火が蛍光灯が割れて暗くなった廊下を照らす。太郎は慌てて後退して廊下の壁に隠れた。太郎を追うように弾痕が床や壁を走り、コンクリートを粉砕する。

あれはあさ子ではない。特徴が似てるだけの、敵だ。そう自分に言い聞かせ、小銃の銃口だけを壁の端から突き出して単発で撃つ。狙って撃っているのではないので当たっているかどうかはわからないとにかく牽制して、敵が怯んだ時に一気に制圧する腹積もりだった。小銃の弾倉が空になり、今度は手榴弾を取り出して安全ピンを引き抜き、廊下の角から放り込む。数秒後、腹に響く爆発音と共に、廊下に爆風と破片が吹き荒れた。

二段ベッドが並ぶ手近な部屋に飛び込んで爆発をやり過ごした後、ドアをそつと開けて用心深く廊下に出る。呻き声は聞こえない。

「……やったか？」

そう呟いた直後、舞い上がる土煙を切り裂くようにして少女が飛び出してきた。太郎が知る事はなかったが、少女は銃撃と爆発を、E M Wの操縦席に戻ってかわしたのだ。空戦型E M Wは軽量化のため装甲を薄くしてあったものの、小銃弾と手榴弾の破片程度ならやり過ぎす事は出来るのだ。

煙を裂いて飛び出してきた少女に咄嗟に銃口を向けたものの、少女の回し蹴りが炸裂し、銃口を逸らされる。少女は拳銃を抜くと連射し、一発が小銃の負い紐を切断する。そこを見逃さず、少女は太郎の手首に蹴りを放った。

激痛と共に思わず手の力が抜け、小銃を取り落としてしまう。だが怯む事なく逆に少女に向かって突っ込んでいき、その手首を掴んで拳銃の銃口を天井に向けさせる。

格闘戦になれば、男で体格や力が大きい太郎の方が有利だった。少女はE M Wの操縦士が着用する薄いゴムのような素材で出来たボディースーツを身につけ、頭には操縦の為の脳波を増幅するヘッドギアを装着していた。身体を締め付けるようなボディースーツに少女の身体がラインがくつきりと浮かび上がっていたが、今はそのエロさを堪能している暇は無かった。

少女がアザーズ語で何事か叫び、勢いで拳銃の引き金を何度か引くが、銃口は天井に向いていたので、天井から粉碎されたコンクリート片が降ってくるだけだった。

太郎はそのまま壁に向かって突進し、少女を壁にたたき付けた。そして拳銃を握る手を、力を込めてコンクリートの壁に何度か叩きつける。

痛みで拳銃を取り落とすのを見て、今度は頭突きを食らわせようとする。だが少女はスツと姿勢を低くすると、ナイフを抜いて太郎の腹を切り付けた。

幸い防弾チョッキの抗弾プレートで斬撃は防いだが、思わず太郎は真後ろに下がってしまう愚を犯した。ただ後ろに下がっただけでは敵が前に踏み込んだ時にそのまま攻撃が命中してしまうので、攻撃をかわす時は斜め後ろに下がらなければならない。

案の定、少女はナイフを逆手に持って接近してきた。レッグホルスターから9mm拳銃を抜いて連射したが、少女は猫を思わせるよう

な柔軟な動きで銃口の前から身体を逸らし、放たれた銃弾が命中する事はなかった。

「アザーズ兵は化け物か……！？」

思わずそう呻き、次の瞬間、ナイフが一閃し、迷彩服の腕の部分が裂かれる。薄く皮膚が裂けて、血が滲み出してくる。

少女が気合いの声と共にまた回し蹴りを放ち、手に少女の踵が命中する。激痛と共に拳銃が吹っ飛び、続いて放たれた前蹴りが腹に炸裂した。

「ぐえっ……」

衝撃で肺の奥から息が漏れ、そのまま吹っ飛ばされる。が、視界の端に先程少女が取り落とした拳銃が目に入ったので、蹴られて吹っ飛ばされた勢いを利用して、全体重をそちらに向ける。

少女が何事かを叫びながら、床に倒れた太郎に向けて、ナイフを振り上げて駆け寄ってくる。だがその時には、太郎は壁際に落ちていた拳銃を手元に引き寄せる事に成功していた。

アザーズ軍が使用している拳銃は全体がプラスチックで構成されて曲線が多様され、まるでヨーロッパ製の自動拳銃のパーツをあこれこつちやにしたような印象がある。だが構造や弾丸の形状共に、地球の拳銃と大差ない。

仰向けに倒れたまま、アザーズ軍の拳銃を腕を持ち上げて構え、そのまま引き金を引く。弾が尽きるまで撃ち、スライドが後退したまま止まる。

少女は太郎にナイフを振り下ろす直前に、腹部に数発の銃弾を食ら

った。一気に少女の身体から力が抜け惰性でそのまま前進し、太郎の上に倒れ込んだ。ナイフが少女の手から離れ、カラカラと乾いた金属音を立てる。

ここが戦場で、自分の上に倒れている少女が敵兵ではなく、さらに死にかけていなければ、これは嬉しいシチュエーションだった。血を吐いた少女はその綺麗な顔を自らの血で汚し、恨めしそうに太郎の顔を見る。

だが太郎は少女を撃った事を後悔はしていない。そりゃ少女は美人だが、銃を撃ちナイフを振り回して殺そうとしてくる奴を殺すなどという方が難しい。これは戦争なのだ。

少女が何事か小さく呟き、そのまま事切れる。太郎は少女の屍体を押しのけて立ち上がり、その身体を見下ろす。

少女は最期に、異世界の言葉でこう言ったのだ。

「お母さん……」

と。

最期に聞いた言葉に、後味が悪くなる。

いくら異世界から来たといっても、見た目も中身も人間そのものなのだ。そして地球でも異世界でも、最期の言葉は同じだった。どう見ても、同じ人間なのだ。

「……クソッ」

そう呟いて、コンクリートの床を蹴りつける。

6時間後、砲兵基地に駐屯していた部隊のほとんどは西に撤退し、基地に残っていたアザーズ兵は全員が射殺されるか投降した。基地の長距離砲撃能力は失われ、直後に自衛隊の地上部隊が制圧された砲兵基地への移動を開始した。

砲兵基地制圧作戦 5（後書き）

御意見、御感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1265s/>

Bチームの戦場

2011年11月17日18時42分発行